

遊戯王 ～Fake Origin～

SOD

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

遊戯王 〈Fake Origin〉

主人公ーレン・ファムグリットは、『登校しながらパンチラを見た』という目的のために偏差値三倍・坂の上に建っている学園ー坂上学園に入学した。

そんなレンを待っていたスカートの中は、入学時に配布されていた短パンだった。

もはや学生生活になんの期待も無いレンは、巻き込まれ事故のような形で、昔やっていたデュエルモンスターズに再会し、持ち前の博才を生かしギャンブルカードで戦って行くようになる。

勝利の可能性に賭けて戦うレンの定石をガン無視したデュエルを見ながら、初めてカードを手にした時のワクワクを思い出して頂ければ幸いです。

この物語は、

です。

目次

230	遊戯王	Fake Origin	19	その夜明け昨日の明日へ
220	遊戯王	Fake Origin	18	大三角
209	遊戯王	Fake Origin	17	3倍プッシュ
200	遊戯王	Fake Origin	16	キョウイノゼツボウ
192	遊戯王	Fake Origin	15	水辺の決着
180	剛拳			
163	遊戯王	Fake Origin	14	NO. 106 消火する
156	遊戯王	Fake Origin	13	
148	遊戯王	Fake Origin	12	
142	遊戯王	Fake Origin	11	
131	遊戯王	Fake Origin	10	
122	遊戯王	Fake Origin	9	
	編			
109	遊戯王	Fake Origin	8	5 気が向いたから番外
99	遊戯王	Fake Origin	8	
91	遊戯王	Fake Origin	7	
83	遊戯王	Fake Origin	6	
63	遊戯王	Fake Origin	5	
50	遊戯王	Fake Origin	4	
33	遊戯王	Fake Origin	3	
1	遊戯王	Fake Origin	2	
	遊戯王	Fake Origin	1	

遊戯王くFake Originく20 どう考えてもこの主人公
はDQNから下の良識の持ち主である

遊戯王くFake Originく21 この世界のカードの値

段 241

遊戯王　　＼ Fake Origin 　　＼ 1

春。それは新しい季節。入学式だ。

桜の花びらが空を舞い、学校へと続く坂道を桃色に染め上げる。だが、今俺の意識は桜では無くパンチラを求めている。

そして、先を歩く女子はミニスカである。だと言うのに…。

「帰りたくなって来ちゃったな」

桜の花弁の桃色にくらべる、俺の心は灰色だ。

新しい季節だの、ピンク色の坂道だの、そんなことどうでもいい。

「くそっ…！何でだよ。何でこうなるんだよ…っ」

「どうしたの？にー」

朝はあんなにウキウキだったのに。」

「妹よ…この絶望はお前には理解し難い物なんだ…。。だが、聞いてくれるか？」

「うん。聞いてあげるよ」

ニッコリと微笑む双子の妹の聖母のような慈悲に甘えて、俺は心の内をさらけ出した。

「じゃあ、聞いてくれ…。。何で女子は皆スカートの下に短パンを履いているんだ!!？」

俺はこの坂の下から毎朝パンチラを見ながら登校するためだけに、この伝統だけで何の取り柄もない学校に入学したのに!!」

「うわーやっぱり聞かなきゃよかったかも。」

「毎朝勉強したんだ!!ノイローゼになるほど！」

物を見るたびに名前が漢字で浮かび上がるほど書き取りしたし、数字を見るたびにそれ以下の数字の素数の数が分かるほど計算したし、学校で習う薬物は全部教科書無しで調査出来るようになった!!世界史に出てくる全ての人物の肖像と名前と生年没年も覚えたぞ！」

「頑張ったねーところで効率って知ってる？にー」

「全ては坂の下からパンチラを見ながら登校するために!!それなのに…っ!!!」

見渡す限り短パンと野郎のケツ。俺が見たかったのは、こんな絶望

の光景じゃねえ…っ」

「よしよし、レナさんが慰めてあげよう。にーは頑張ったねーなどで」

「もう俺帰る…家で自宅警備員の試験受ける」

「二ートの試験って何するの?」

「親の涙や白い目にめげずにクズになるテスト。」

「ついでにレナさんも非難してあげるねー。」

妹に慰められて涙ぐむ自分…涙で視界が歪む。もう短パンすら見えねえ…。

「終わった…俺の学園生活。」

「新入生の皆さん。もうすぐ始業式が始まります。急いで体育館に移動してください」

女教師が体育館の前で生徒達に呼び掛ける。

これから校長だの来賓だのの似たような長話が始まって、在校生の挨拶だの新入生代表のアイサツが始まるのだろう。

生徒の大半は既に親しくなったクラスメイトとヒソヒソと話したりしていて、ハナから入学式になんざ興味は無い。

俺だっけそうだ。学校だの社会だの、今時そんなものに真面目に参加する奴は少ない。

「ハア…まじ帰ってえ。」

どうやら兄妹そろって考えは同じようだ。レナも外を眺めるだけで、校長の話なんて聞いちゃいねえ。

「校長先生、ありがとうございますございました。続きまして、来賓の皆さまからご挨拶を賜りたいと思います。」

何となくレナの見ているものが何なのかとか考えてみた。

アイツの目に視えている景色が何なのか。兄弟とはいえ他人の考えとか、そいつの目に世界がどう映ってるのかとか、マジで考えてる

俺は、シヤレにならないくらい暇人だろう。

レナは『出会った』時から剣道をやっていて、中学で三年連続全国制覇した天才美少女剣士とか呼ばれるやつだが、俺には何も無い。

打ち込む趣味も、人に褒められる才能も、何にも無く、暇なだけで。女子のパンチラ追いかけくらいいかない。それも短パンによつて全て潰された。おのれ短パン、許すまじ。

《それでは続いて、部活紹介に移ります。部の代表の生徒は、準備をお願いします。》

「なあ、レン。見てみるよ、水泳部。女子が水着で出てるぞ！」

「……俺はスク水よりパンツ派なんだよ」

隣に座っていたスク水フェチの旧友その1。鈴木はやたら目を輝かせている。

「うむ！あの部長。実にケシカランおばーいであるツ!!」

一方その隣では、寺の後継ぎであるおばーいマニア。旧友その2、朝倉が1人自己主張の激しいおっぱいに興奮していた。

「けっ！この変態共が……」

ポカッ！

「にーが言うなー」

後ろにいたレナに殴られた。外を観るのに飽きたのかこいつ。

「お前、さつきまで何見てたわけ？」

「ん〜？滅びのバーストストリームだよ？」

「え？何ソレ」

「さつき空に上がったんだよ。ドカーンって。多分誰かがデュエルしてるんだね〜。」

レナさんも参加したいっ！」

「えーマジで？誰かバックれてんじゃんそれ！」

「ゴホン、ボイン。しかし『滅び爆裂疾風弾』とは、また無駄に辛い魔法カードであるな。

世界に三枚しか無い『青眼の白龍』も今は昔。世界中から消息を絶った幻のレアカード専用カード。

ダイヤモンドガイでも無ければそも発動不可能という存在意義を

疑われたカードであると言うのに。

「通か？」

「違うよ。アレ、魔法カードのバーストストリームじゃ無い。

本物のブルーアイズのバーストストリームだよっ」

「何？そんなはずはなからう。第一何故分かるのだ。ボイン妹？」

「中学の時、めちやくちやバーストされたもん。」

「……………」

「ほむん、ボイン。なるほど。フカシであるか」

「フカシてないよ!!」

「いやいやレナちゃんや。幻のレアカードを持ったデュエリストが身近にいたとかーちよーっと盛り過ぎっしょw」

「ぶー本当なのにレナちゃんを倒したことだつてあるんだよ！

……デュエルは負けたけど」

「そーいやレナちゃんデツキ何系？」

「ふっふっふレナさんデツキは戦士族統一のデツキなのだ！」

「……………」

「何でドヤ顔？」

「ふむん、ボイン。戦士族と聞くと『真六武衆』の悪夢を思い出すのう……」

「それあるわくつてかむしろそれしかないわく」

「ありえないっしょアレ。何で『真』付いただけであんなガチ化しちゃったわけ？」

「あそこまで露骨だと最早『六武衆』ただの落ちこぼれレベルまで要らない子じゃね？」

「まったく同意じゃ。拙僧、ぶっちやけ最初『真』なんて只の名前じゃと思うとつた。」

「なのにフタを開ければなんじゃアレ。絶望のあまり気を失いそうになったわい」

「そんなこと言っちゃかわいそうだよカードは全部必要な役割が出てくるんだよ。」

環境次第で（ボソツ）」

「身も蓋もねえ!!」

そんな無駄な話をしていると、部活紹介の部で、聞きなれない部活名が聞こえた。

《続きまして……えつと……『でゅえる部』?の紹介です。部長の坂上みくさん。お願いします。》

「……デュエル……部……?フリント・ロック銃でも撃つのか?」

欠伸を噛み殺しながら檀上を見ると、カチューシャをした美少女が出てきた。

《待たせたわね新入生!!あたしがあなた達が入るべき『でゅえる部』の部長、坂上みくよ!!

我が部は優秀な部員も、無能な部員も分け隔てなく迎え入れるわ! 何にも心配なんかしないで、黙ってあたしに付いて来なさい!

そうね、新入部員の中で最も優秀な者は、あたしから直々にご褒美をあげてもいいわ。

放課後入部届けを持って部室に来なさい。我が部の雑用が強さを測ってあげる。それから――》

ただ、パツと見美人なのに、何か残念なオーラを感じる。

「ほむん……それは察するにおっぱいぱいが断崖絶壁だからではないか?戦闘力5のゴミだな」

「自然な流れで人の心を読むんじゃねえ、生臭坊主」

「これは異なることを。迷いを抱く者に対して悟りの手を差し伸べるのは坊主である拙僧の天命である」

「煩惱の塊が悟りを語るな。」

「おっぱいとは宇宙の真理と見つけたり。」

小賢しい知恵で理性を封殺した賢しい『つもり』の莫迦猿(イエローモンキー)には、この真理は分からないのですよ」

「とても坊さんの吐く説法(ねごと)とは思えねえ言葉(ざれごと)だなオイ……」

「あははっ。にーも言外の本音が隠し切れて無いよ」

《ちよつとそこの新入生!!私の有り難い挨拶を無視してんじやないわよ!!》

「「へ？」」

いま何かマイク越しで誰かに話しかけられたような…？

《しかも今、私の身体的なごく一部分に対して言っちゃならないことを言っただけ…？》

「……マジかよあのでゆえる部部长。

檀上からマイク越しで、初対面の相手に堂々と喧嘩売ってやがる。しかも部活紹介で」

「ほむん。ボイン。なんとも度胸の据わったご仁よ。あの人を寄せ付けぬ断崖絶壁の無いムネには、拙僧らが及びもつかぬ器のデカさを備えておるのやもしれんな。パイおつは小さいが。おっぱいパイは小さいが。大事なことなので（ry）」

「上等じゃないの!!この私に喧嘩売るなんて良い度胸してるわね!!登って来なさい!赤髪の一年!!」

入学早々から物凄いことになったな。朝倉。

言いながら坊主用に髪が反られた頭を撫でる。

「あれ?今あの女、赤髪って言わなかったか…?お前ハゲじゃん」

「ほむん、ボイン。確かに赤髪と明言したぞ。拙僧は…見ての通りベリーショートである。ハゲとか言うな」

「じゃあレナか?」

「レナさんメジャーな金髪ポニーテール。それに…レナだって一応女の子なんだよ?」

「じゃあお前か鈴木。そのロン毛」

「ええ?オレ呼ばれちゃった感じ?」

檀上上がるとか初体験だわくでもやっぱ違くない?

オレっちずっとスクミズの先輩達観ててぶっちゃけ今何起こってんかわかんねーべ?」

「じゃあ一体誰を……」

「アンタよ、アンタ!!」

「ダレヲヨシデルノカワカラナイナー」

見上げた空は快晴。きっと今日も良い1日になるだろう。女子は全員短パンだったけど、明日こそはパンチラが見られると信じて今日

と言う素敵な1日をー

「無視してんじや無いわよ!!」

目の前に残念美人の顔がどアップで出て来た。

見れる顔してたのが救いだな。ブサだったら顔パン確定だぞこの距離。

「何ですかセンパイ。」

部活説明しないんですか?」

「このあたしが直々に説明してやってんのに私語なんかしてる部員しもべを注意するのも、部長であるあたしの仕事なのよ」

「誰が僕しもべだコラ。短パン脱いでから出直して来いや洗濯板が」

「ほむん、ボイン! その通り!! Cカップ以下は女に在らず! 無いムネに勃たせる ピー は無い! 豊胸して出直してくるがいいわ!!」

「……いや、俺そこまで言つて無い」

「ムツキィー!!! 上等じゃない、そこまで言ったからには死ぬ覚悟くらい出来てるんでしょね!!」

「ほむん、ボイン! 当然である! 何を隠そうこの男、クリスマスに巨乳と付き合っていたリア獣をひたすら狩ることによつて黒かった髪が真っ赤に染めた

赤髪のレンと呼ばれた男よ!!!」

「ねえよ! そんな経歴!! ヘアカラー染めだバカ野郎!!」

「な、何ですつて……あの伝説の血色のサタンクロス作戦を実践した猛者がいたつて言うの!」

「テメエも何言つてんだ糞アマがあつ!!!」

「そこまでの猛者だったと言うのなら、尚更あたしの下僕として調教しておかなくちゃね! あんた、あたしとデュエルしなさい。あたしが勝ったら、あんた、あたしの奴隷よ」

壇上の美人がちよつと残念だなど思つてたらいつの間にか俺、奴隷にされそうになってやがるんだが。

「おおうレナさんのーが、高飛車な女の奴隷にされそうになってる」

「つかレナちゃん。オレら置いてけぼりじゃね? 寂しいわwww」

(……だったら替われや、コラ)

「デュエルは明日の放課後！部室に来なさいよね。逃げたら死刑だからね!!」

「そんなもん行くわけー」

「二「おおー！いいぞ坂上ー!!」二」

「負けんなよいちねーん！」

「明日見に行ってみよーぜ！」

パンチラ目的で長く高い坂があるだけの伝統校に入学したレン・ファムグリットは、女子が全員スカート下に短パンを履いていたことに絶望した。

更に新入生部活紹介で残念な美人部長に絡まれたレン・ファムグリットは、己の人間としての尊厳を賭けて、全校生徒の前でデュエルをさせられることになったのだが……？

「……カードが無い」

「二「は？」二」

放課後、ただでさえ長つたるいだけの坂を足取り重く降る一行の足を完全に止める発言が出た。

「ほむん……どういう意味じゃ？巨乳モンスターで組んだデッキでなければ嫌と言うことか？」

「言葉通りの意味だ生臭坊主。あと巨乳モンスターって何だ」

「ほむん……BMGを筆頭にした一切のシナジーと戦略を否定し男の欲望のみを肯定したハーレムデッキである。作り方はまず……」

「いらん。そんな戯言。」

「カードが無いって割りと聞くけどさく案外押し入れとかに当時のデッキとか漬け込んでたりすんじゃない？発掘してみればいんじゃないかね？」

「ねえよ」

「諦めるなよwどうしてそこで諦めりゅー……かみまみた」

「お前ら全員、何で俺が遊戯王カード持ってたテイでナシ進めてんだよ」

「二ハハハーそんなの遊戯王だからに決まってるじゃん」

「何その初心者殺し。超理不尽じゃねーかコラ」

「ほむん。だがしかし、本当にカードが無いならば仕方がないな。明日、水泳部の更衣室に忍び込んでカメラを仕掛けてこようと思ってるのだから、同行せんか？・レン」

「……そうだな、たまには良いか。侵入経路はどうなってる？」

「ダメだよ。にーはこれからレナさんとお買い物行かなきゃだもん」

急に腕を捕まれてバランスを崩したレンを抱きしめるレナ。

「面白い物だあ？何か切れてたか？冷蔵庫の中身は昨日俺が買い足ししたし、トイレットペーパーの特売は明後日だぞ？」

「うわー……カードゲームの主人公が滅茶苦茶所帯染みてるとか引くわWいや、良いことだけでもさ」

「ほむん……不良が家事に精通しているとは、これはアレじゃな。ポインな女子のハートとパイおつをわしづかみにするための策略であるとみた」

「テメーら全員頭割るぞ。あとレナもいい加減離せ。その無駄な脂肪が俺の顔を圧迫してんだよ」

心底メンド臭そうな表情で頬に密着しているレナの胸部を手でどかすレン。

「ほむん……相変わらず何ともケシカランパイおつであるな、ファム妹よ」

「えっへん！レナさんはナイスバディーなのだ！ポオーン、キュツ、ポーン！」

「げへへへ……姉ちゃんエエカラダしとるのお……」

「あ、おさわりはNGで〜」

「フフフ。良いではないか良いではないか」

「あははは〜つかまえてごらんさーい」

「いつもどーりの下校風景な〜。レン」

「そうだな。中坊の頃から大して変わりやしねえ……」

「大きな変化って制服とレナちゃんの胸ぐらいじやね？ぶつちやけどうよ、兄としてあの成長ぶりは？」

「カラダはもういいから、脳ミソとか中身とか磨いてほしいな。真剣に。部屋の中にはなんかよく分らんモンスターのフィギュアがあったり、脱いだ服は脱ぎ散らかすで、片付ける身になってほしい」
「……何か、だんだんレン君のヤンキーっぽいイメージが崩れてきたんだけど……」

「ああ？俺がヤンキー？何でさ」
「いや、だって髪赤いし、しゃべり方アレだし、喧嘩上等って感じじゃん？」

あと、暴走族が着るような服とか持ってんじゃない？」
「特攻服か？アレ着るとバイクのエンジンが調子よくなるんだよ。もう5年の付き合いになる」

「僕たち、ついこないだまで中学生だったんですけどね……」
いつも通りのメンバーで、いつもように他愛もない話をして。それが日常。

(これからも変わらずに続くんだろう。きつと、いつまでも……)
「つと、さあみんな!!到着だよ!!」

「……ん？どこに着いたって？」
「ほむん、お主ついさつきあの残念美人に喧嘩売られとったの忘れたのか？」

「あと、アレじゃん。戦うためには武器がいる。的なの？」
「どういう意味だ？」
「だから、今日はここに来たんだよ！」

レナが指さす方向を見上げると、そこにあつた看板は
カードショップ——ATM

「……………銀行？」
「じゃなくって、カードショップ。だよ！」

「お主、本当に遊戯王やったことないんじゃないのお。
ちなみに、ATMの読み仮名はアテムである。何の略かはその内分かれ」

「いらねえよそんな情報。」
「はいはい。まずは中に入ろうよ！こんにちわーレナさん他三名様

です」

「他とは何だコラ……ってか、買い物つてこれのことか」

「いらつしやいませYOOー無駄乳女と坊主とチャラ男ご来店アルー」

レン以外の三人が入店すると、店員とは思えない言い草でレジの奥にいた中国人女性が出迎えた。いきなり毒舌の中国人が登場したことで、若干店の治安に不安を覚えたレンだけは、ショーウィンドウのカードを見るだけに留まった。

「久しぶりだね、飛フエイニヤン娘ちゃん。元気だった？」

「ええ、ゲンキだったヨ。そのサイコーにムカつく乳袋の脂肪見るまでわね!!」

ワタシあなたに言ったはずネ！次会うまでにその牛乳そぎ落として来いト!!」

「ほむん。ボイン!!そのような暴挙、仏が許容しても拙僧が許さんぞ。まな板チャイニーズ!!」

断崖絶壁など女子に非ず!!!」

「ヨロシイ、戦争ヨ生臭ボウズ!!」

「ハア……何であいつは次から次へと騒ぎを起こすんだよオ」

「さあ？譲れないものとかあるからじゃね？火種のレナチャンが全く気にせずカード見に行ってるけどね」

中々店に入らないレンを迎えに来た鈴木が、ヘラヘラと笑いながら答えた。

「あいつら実は側にいないほうが良いんじゃないか……」

「グンバツでDQNっぽいレン君がマジで一番苦労してるって凶は好きだよオレwwまあ…時々同情するけど。」

ほら、まずは店入るべ？」

「ああ、そうだな。鈴木りんぼく」

いつまでも放っておくと本当に戦争イタズラしかねないので、レンは意を決して店の中に入ることにした。

「オラ、その辺にしとけや朝倉」

話で事態を収めるのが面倒だったので、軽めに蹴り飛ばして強制退場させる。

「ギャフン!!」

「ギャフンって…マジで言う奴はじめて見たぞオイ」

「あ、アイヤー!」

「どちら様アル!?!この不良は!?

いきなり攻撃したアル!」

「紹介するね、飛フエイニャン娘ちゃん。

この人はレナさんのお義兄さんのレン・ファムグリットさんです。

趣味は夜遊びで好きな物はお酒。愛用してる煙草の銘柄はーあ痛ツ!?!」

「人の個人情報を駄々漏らすんじゃねえ!!!

あと最近まで受験勉強に缶詰めだったから夜遊びはしてねえよ」

「あww他はやってるんだ。夜遊びだけはギリ警察に逮捕されない可能性があるラインなのに。

ソコだけ止めちゃったかあ…お酒とタバコは二十歳になってからっしょ」

「うう…いつもはクールなフリしてるけど、気に入らないことがあるとゲンコツしてくる手の早いにーです…」

「ど、どっからどう見ても不良アル!この店には渡せるようなお金は無いアル!!店長が稼ぐ度にバクチでスって来るから毎日スかんピンアルよ!!!」

「ーろくでもねえ店だなオイ!?!」

「ヒイヒイヒイ!!不良が怒ってるアル!ワタシ、ぺたんこダカラ何処にも売れるとこ無いアルよお!?!」

「こつちのチャイニーズ姉ちゃんは身の保身のためならコンプレックスすら武器にするんだね…」

「…ほむん、ボイン。た、たしか…に。断崖絶壁に…出すお布施など…ガク」

「…ヒイヒイヒイ(ガクガクガクガク)」

「うう…あたま痛い」

「…オイ、どうしてこうなった」

「コホン。改めまして、こちらは王・飛ワン娘フエイニヤンちゃんです。レナさん小学校からのお友達ですっ。ね？飛娘ちゃん」

「お友達じゃないアル。」

あなた、ワタシの敵アルよ！」

「だってよ？レナ」

「ヒイツ!?で、でもワタシ悪い子じゃないアルよおニイさん？虐めないでほしいデスよお…!!」

涙目になりながらレンと距離をとる飛娘。

立っているのも精一杯なようで、凄まじく怯えている。

「オイ何で俺こんなビビられてんだよ？若干ウザいんだけど」

眉を潜めながら、頭を掻きむしるレン。

「ご、ご(ご)ご(ご)メンなさいー!」

「あのね、にー。」

飛娘ちゃんは、子供の時に怖い人達にお金で売られて来たの。だから、暴力振るう男の人が怖い。だから苛めないであげてね？にーは只でさえ顔怖いんだからね！」

「……………あ？怖い?？」

「ほらーまた怖い顔する」

「うう…おつかないアル…………つ」

いつの間にかレナの後ろに隠れていた飛娘が一層怯えている。

「……………なあ、レナ」

「なあに？」

「俺、顔怖いのか？」

「うんー!」

満面の笑みで返されると、レンは二人から少し離れた場所にあるテレビの方へ歩み寄った。

「あれ？にー何処に行くのー?」

「…………結構凹むな」

「あー…ごめん、ごめんね？にーがまさかそんなに繊細だとは」

「下着脱ぎ散らかして兄に洗濯させる女に比べりゃ、誰だって繊細だバカ野郎…」

「落ち込まないでーほーら、よしよし。撫でなで〜あ、ほらほら、テレビやってるよ〜」

「ほむん…もしやこれは、前回の前々回の大会の映像ではないか？」

確か、大会優勝者とデイフェンディングチャンピオンが戦うという」

「お〜この店大会の映像なんか流してんの？」

……あれ？っーかこの人って、伝説のデュエリストとか言われてる人じゃね？」

「お客サンお目が高いアル！」

この人はまさに真のデュエリストに相応しいアルヨ！！

大会中に完全試合を幾つも決めたり、フィールドにあの『青眼の白龍』を三体揃えてみたりしたヨ！」

伝説アル！！」

「…………伝説？」

「うん。そうだよ。」

にーの大好きな『伝説を残した人』だよ」

「…………」

レンの視線が大会中のデュエルに向けられた。

《いかにキミが伝説のデュエリストと言われていても、ここからの逆転など不可能だろう！

ついにこの私が伝説になる時が来たのだ！フハハハハハハ！！！！》

テレビの中の対戦相手は、勝利を確信していた。

場に存在しているのは『幻獣機 ドラゴサック』と『幻獣機 トークンが二体』

そしてリバースカードが一枚。

LP2700

一方、伝説のデュエリストの方は……。

場は空っぽ、手札が三枚。LP100
追い込まれている。

「なあ、レナ。これはピンチなのか？」
「……………」

レナもテレビに見入っているのだろうか。レンの言葉にすぐには
反応しなかった。

「…レナ？」
「……………ん。なあに？にー」

もう一度声をかけると、今度は反応した。

「これはピンチの状況なのか？」

「んーそうだね。『普通の人』には、少し厳しい状況かもね。」

「……………そうか。あのリバースカードは、『奈落の落とし穴』か何かだろ
うか……………」

「……………デュエルは知らないんじゃないかな？レン君」

「……………自分のカードが無いだけさ。ダチから借りたカードでやってた
ことくらいは、な」

「そっか。じゃあよく見ててね。あの人の…ライアス・ヴァーレント
のデュエルを」

「……………ライアス・ヴァーレント、か」

《……………俺のターン。ドローカード》

《さあ、ここで歴戦のデュエリスト、ライアス・ヴァーレントのター
ンです。

過去から現在に至るまで、他の追隨を許さないデュエルを我々に見
せてくれた伝説のデュエリストがこの状況をどう覆すのか！注目の
ターンです》

《フフフ…ありえないよ。ここから見られるのは彼が私の前に跪く姿
だ！》

《おおーっと、挑戦者ーロイド・マケルノーダ選手、ここで早くも
勝利宣言だ!!

このセリフにチャンピオンどう応えるのか!?!》
《……………》

《あのくチャンピオン…?》

《……手札から、モンスターを召喚。》

《フフフ…どうやらショックで口も利けないようだね。

無理もない。キミの伝説は今日、終わりを迎えるのだから!!

せいぜい最後のターンを楽しむがいい!》

《……チューナーモンスター『デブリ・ドラゴン』》

「チューナー?」

「シンクロ召喚のためのモンスターだよ。」

「シンクロ召喚?」

「うん。融合召喚とは異なる、モンスター同士の組み合わせで行える新しい召喚方法だよ」

「でも、チャンピオンの場にはあの鼻の長いドラゴンしかないじゃないか」

「すぐに分るよ。よそ見してる内に見逃さないようにね?」

《『デブリ・ドラゴン』のモンスター効果発動。》

墓地に存在する攻撃力500以下のモンスターを特殊召喚できる》

《フフフ…何が来ようとも恐れるに足らず!》

《『ダンディ・ライオン』を特殊召喚》

「へえ、ドラゴンの次はライオンかよ。何か花みてえなモンスターだな。」

「だってタンポポだもん」

「——ああ、ライオンってそういう事か」

《さあ、シンクロしたまえライアス・ヴァーレント!》

《……レベル3の『ダンディ・ライオン』にレベル4の『デブリ・ドラ

ゴン』が調和する!》

《ククク…レベル7でのシンクロモンスターなどたかが知れている。

『DDB』が良いところだろう。だが届かぬ!!私のライフは尽きぬ!!》

「ほむん。この後あんなカードが出てきたのも、こうして当時を振り返ると、この死亡フラグの乱立のせいだったのかのお……」

「いや、死亡フラグだけでああはならないっしょ」

「……何だ急に?」

「まあ見ておれ」

「……………？ああ。」

《約束はこの大地に、誓いはこの種に。結ばれた子種の邂逅は、未来を切り開く華を咲き誇らせん。

シンクロ召喚!!深紅の華竜『ブラック・ローズ・ドラゴン』!!》

この瞬間、会場に真っ赤な華竜（はな）が咲いた。

《な、なあに…これ?》

《咲き誇るは血飛沫の花弁^{かべん}。開け、黄泉路への扉よ!! 『ヘブンズ・ゲート』!!》

《ブ、ブラック・ローズ・ドラゴンだつて!?何だそのカードは!?!聞いたことも無いぞ!!》

《泣きわめいている暇は無いぞ。『ブラック・ローズ・ドラゴン』は大地に根付く命を養分とし、現世の全てをその身もろ共冥府へと誘う奈落の華。

場の全てのカードをシンクロ召喚時に破壊する!》

《く…だ、だが私の場の『幻獣機ドラゴサック』は、『幻獣機トークン』が場にある限り破壊されない!!

更に、リバースカードオープン! 『禁じられた聖衣』!このカードの効果により、場に存在する『幻獣機トークン』を効果破壊から護る!これで貴様の目論見は外れた!!どこで手に入れたか知らんが、存在を知られていないカードであっても、効果さえ分れば対処は容易い!!》

《フン…その通りだ。どんなカードにも必ず対処方法は存在する。しかし、この世にはどうしようもないこともある》

《何…!?!》

《カードそのものに対しては対処は可能だ。しかし、それを使うデュエリスト本人の力量の差は、一朝一夕には埋まることは無い。人が神にひれ伏すようにな…リバースカードオープン。

決して届かぬ境地にてその力は奮われる。さあ、天を仰ぐが良い――『超融合』!!》

《融合……超、融合?》

《俺のデッキには、この地上に知られていない幻のレアカードが湯水の如く溢れている。》

さあ、ここに至れ竜たちの始祖よ!! 『始祖竜ワイアーム』を融合召喚!!》

《そ、そんな…融合素材なんてどこにも…!?!》

わ、私の『幻獣機トークン』が!?!》

《貴様の場のカードを、融合素材として使ってやった。これで貴様の幻獣機は、華竜の開く冥府の渦に飲み込まれる》

ワイアームの召喚により対象を失った『禁じられた聖衣』は不発となり、『ブラック・ローズ・ドラゴン』の全体破壊効果が適用される。

自身の身を守る盾を無くした『幻獣機ドラゴサック』も耐性を失い、崩壊していく。

《ぐっ…だが! 貴様の融合したワイアームも、その華に飲み込まれて…!!》

《竜の始祖たるは、この世に生きうる全ての存在の頂点であると同義であると知れ。》

始祖竜はその膨大な寿命により得た知識と経験は、モンスターが得た全ての効果に対して対処が可能だ。

よって、『始祖竜ワイアーム』は、モンスター効果を受けない》

《そ…そんなイカれたカードがあるかア!!》

《落ちろ、驕り高き者よ。己が未熟さを恥じるなら、力を付けて奈落の底から這い上がって見せろ》

《——ツツ!?!》

《終幕だ。『始祖竜ワイアーム』の攻撃。天解息吹波(ラグナロク・バースト)!!》

《おのれ…おのれエ…!!! 必ず這い上がって——》 L P O

勝利目前で理不尽に敗れた挑戦者に出来るのは、心が潰れてしまわぬように、声を上げることだけだった。

「……なんだこりゃ」

大会の様子を見終わったレン・ファムグリットは、驚愕していた。チャンピオンの戦術には無く、子供のころに遊びで行っていたデュエルの記憶とのあまりのギャップに驚いていたのだ。

「モンスターを召喚するモンスター？」

場のカードを全て破壊する？

相手のターンに融合召喚？

全てが違いすぎる。俺の知っていた頃の遊戯王と……あの時のデュエルが、まるで、子供のじゃれ合いじゃねーかよ、オイ」

「びつくりした？にー

これが現代のデュエルだよ」

「ほむん。子供の遊びとは過去の話。

今となつては知識力、財力、運命力、発想力、洞察力、直観力、判断力。

おおよそ人が生きる上で欠かすことのない全ての要素をプレイに要求される、云わば人間としての本質を試される競技である。

デュエルは子供の遊びと言う大人もおるが、子供の遊びなら大抵は大人が勝てるようになってる。

しかし、これは子供が大人に簡単に負けるゲームだ。ゆえに興味深い。研鑽する価値がある」

「……………人間力…か…成程なア」

「にー？」

「……………伝説…人間としての…

……………ああ、くそ。負けられねえじゃねえかよ」

その言葉がトリガーだった。レン・ファムグリットにとっては。

それまで、ここに来るまで一度も見せなかった、戦う男の貌を見せた。

「久しぶりだね。にーがそういう顔するの」

「うう……不良のオニーサン。益々怖くなたアルう…」

「ほむん。気合の入ったTSU☆PPA☆RIの表情じゃ」

「っべー顔してる、レン君ww

これアレじゃん？何かこれから学校戻って校舎のガラス全割して

くるかんじだべ？」

「でもレナさん。こういう活き活きしたにーが一番好きっ。

これから楽しみだよ」

「さて、レンよ。先ずは何をする？」

「……………決まってる。先ずは俺のいない間に増えたシンクロ召喚の勉強だ。」

「ほむん。見かけによらず、堅実じゃのお。慢心の無いその心意気が、ワシは気に入っておるよ。」

協力しよう。ワシは最新召喚法として『ペンデュラム召喚』を教え
てしんぜよう」

「んじゃ、オレは家からカードカタログ持ってくるべ。」

今まで発売された公式カタログ全部もってっからさっ調べるなら
役立つじゃん？

「っかエクストラ増えたのシンクロだけじゃねーしさっ」

「じゃあレナさんは、待ってる内ににーがデュエル出来るように新し
い召喚方法をコーチします。」

『エクシーズ召喚』を教えただちやおう。」

(伝説…俺がまだ知らない人間の境地……………)

俺が興味を失った世界が、あそこまで進化を遂げているのなら、俺
も……………)

こうして、自称平凡のつまらない男、レン・ファムグリットは、伝
説のデュエリスト、ライアス・ヴァーレントのデュエルを見たのを機
に、デュエルの世界に足を踏み入れることになる。

それが、自分の人生に幕を下ろすための、自殺行為だと知る由もな
く。

「おもしれえ。伝説……………上等だ」

翌日。

でゆえる部部长、坂上　みくが入学したての一年生とデュエルする。

その情報はたった一日で学園中に知れ渡り、なんやかんやあつて場所が体育館ステージに変更されていた。

体育館のステージは着々と装飾が進められていて、体育館内にはすでに物好きな生徒たちで座席は満席になっており、更にどういうわけか、体育館内を埋め尽くす勢いで出店が並んでいた。

ポップコーンやたこ焼き、焼きそばに綿あめ、人形焼き等、レパトリーは本物の祭りで大差が無いクオリティーになっている。既に多くの生徒が出店の食品に手を出しているため、売り上げは上々と言つたところだろう。

そんな誰もがお祭り気分で騒ぐ体育館の中に、一人だけ心配そうな顔をしている女生徒がいた。

「これは大変よろしくないよ……にーが来てないよ」

今回のデュエルの主役の一人、レン・ファムグリット——の妹、レナ・ファムグリットだった。

「ほむん。小僧の頃からの付き合いだが、お主がそこまで青い表情しとるのは初めて見るな。

妹よ、お主が慌てることもないのではないか？」

ファム兄妹の友人寺、朝倉　英心が綿あめを舐めながら言った。

「慌てるんじゃないよ、英心君。レナさんは最悪の未来を危惧してるんだよっ！」

「と、言うところ？」

「レナさんの知る限り、にーはやるって言つたら絶対やる人なんだよっ。遅刻とかしない人なんだよ。

……あることさえしてなければ」

「あること……ほむん。理解した、自慰だな」

「G?i?i?キのこと？」

「性格には自身の高ぶりを己が手にて封じ込め、最終的に一気に解放する

男特有の儀式であるところのオナ——」

「それ以上言ったら、エーシン君レン君に殺られるんじゃないやネ？」
「ファム妹よ、今言ったのは無しの方向で」

「え〜!!途中で止められたら気になるよ!」

公共の場において適切ではない会話をギリギリで止めたのは友人
その2、波平 鈴木（なみひら りんぼく）だ。

話し方、見た目、共にチャラ男丸出しの男子学生だ。

「で、レナちゃん。レン君がナニシてるって?」

「あ!うん。そうだよ大変だよリンリン君!!」

にーがこういう時に遅刻してきてるのは大変なんだよ!!」

「うんうん。もうちよつと分りやすくヨロ」

「ちよつと!!そのアンタ達!あの赤髪の男はどうしたのよ!!」

「どこにも居ないじゃない!」

レナがまさに状況を説明しようとした時に突然、一人の美少女が現れた。

「ほむん。何かと思えばペチャパイの部長殿では無いか。

貧乳に用など無い。しっし!」

「ひんにゆ——!?!アンタ:喧嘩売ってんなら買うわよ!?!」

「ちよ!?!ま!!あんたはどうしてそう断崖絶壁に対して喧嘩上等な訳さ
!?!エーシン君。」

「小は大を兼ねない!!言わば出来そこないであり、欠陥品であり、劣等
種である!!!」

貧乳は猿とでも子作りしておれい!!」

「あんた本当に寺の跡継ぎか!?!人種差別ってレベルじゃねーツスよ
!!」

「——ツ!!……………ツツ!!」

「うわあ…:部長さんショックで声もで出なくなった……」

「可哀そうだよ、英心君。身体的特徴で誰かを苛めるなんて、人として
やっっちゃダメなことだよ。

部長さんだって、好きでおっぱいがペチャンコなわけじゃないんだ
からね。

大丈夫だよ、部長さん。おっぱいが小さくたって、部長さんは出来

そこないなんかじゃないよ。

もしも大きくならなかつたら、今は豊胸手術だつてあるから心配ないよ。

「貧乳でも生きていけるよ！」

「……………ツツツ!!!!う……………うわあああああああーん!!!

見てなさいよデカ乳女!!!アンタ達の仲間あたしの奴隷にしてやるんだからあああああーん!!!

「うわあああーん!!!」

とうとう耐えきれなくなつたでゆえる部部长は、物凄く泣いて走り去つて行つた。

「英心君、後でちゃんと謝りに行こうね?レナさんも行くから」

「……………ほむん。そうじゃのう。妹は少し、やり過ぎかもしれんものう

…なあ、鈴木よ?」

「……………うん。何て言うか…。

圧倒的に『持つ者』から送られる心からのエールつて、持たざる者が一番傷つけるんだーつて感じ?

マジベンきよーになつたわ。あと、レナちゃんは後でレン君と一緒に謝りに行くべ」

「あれ!?!何でいつの間にかレナさん患者なの?!?何でえー!?!」

同時刻、学校近くのコンビニから一人の学生が出てきた。

「懐かしいなー」

ほら、昔カード買う時つてさ、大体コンビニだったじゃん?

んでさ、レア抜き出来る奴とかヒーローだったじゃん?

久々にやつちやつたぜ」

「……………。(ガクガク)」

赤い髪を揺らしながら、幼少の頃の思い出に僅かに浸る学生。

そもその来店目的は、只の買い食いだったのだが、たまたま視界に入ったカードパックに後ろ髪惹かれ、つい眺めている内に時間が経ち過ぎてしまつていた。

「人間いつ死ぬか分らないからこそ、思い出は美しいに越したこと無いし、たまに浸るべきだよな、うん」

「……………」

全く意味の分らない言い訳を自分にながらカードパックを購入し、ついでに肉まんを二つ買った。

「ありがとうございますー」

久しぶりに思い出に浸り、少し上機嫌な学生は、そのまま家に帰るため、自転車をこいだ。

右に左にペダルを踏み続け、スピードに乗った自転車で風を切る。

「単車もいいけど、たまにはチャリで飛ばすのもいいな」

「……………」

気持はふわふわと浮いて行き、風は心地よく肌を撫では後ろへ吹き抜ける。

ここまで心安らかだと思えるのは、いつ以来だっただろうか。学生は心のアルバムを開き考える。

仲の良かった仲間や友達と、尊敬していた先輩の顔が浮かんだ。

そして、最後に今の仲間たちが浮かぶ……………」

「……………」あ。今日つてあの残念な人とデュエルじゃん」

ほぼ家に着きかけたころ、赤髪の少年、レン・ファムグリットは、初めて今日の予定を思い出した。

時刻を遡ること15分前。

レン・ファムグリットは、いつもの三人が教室に残っていないことを確認すると、特に探すこともせずさっさと家路に着くことにした。

元々単独行動を好む彼は、周囲に友達がいなくても気にしない。

一人には1人の楽しみがある。

先ず最初に寄ったのはパチンコ。

慣れた手つきで千円札を入れて、5分もすれば噴く。金額にして大体三万円前後の勝ちを拾う。が、彼はそれをお金ではなく全て景品のドロップにつき込む。

一つだけ口に入れると次に向かうのは喫茶店。ゴンザレスと呼ばれるマスターが経営する寂びれた店だ。

入店するたびに舌打ちして『チツ、客が来やがった』と言うのがお

決まりだ。そして心底めんどくさそうにコーヒーを煎れ始める。五分ほどで飲み干すと、コンビニへ寄った。

肉まんを二人分と、カードパックを一つ買うと、一旦自宅へ寄ってから、昨日に寄ったカードゲーム屋へ足を運んだ。

ブンブンブンブン……!!

景気良く音を鳴らす紅いバイクを店の前に止めると、それまで一言も話さなかった少女に話しかける。

『……………』

『おい、着いたぞ。中国人』

『……………わ、ワタシ、お家帰して貰えるアルか……………?』

『ああ。用事思い出した。付き合ってくれてありがとな。これお土産。』

さつき買った肉まんを手渡す。

『うう……………ワタシ、無事に帰ってこれたアル……………おかあさーん!!』

最後にパチンコへ行く前に偶然出会って拉致した王・飛娘を送ってあげた。

以上、レン・ファムグリットの放課後。

「さすがにこのままじゃ遅刻だな。」

すでに十分に遅刻しているレンだったが、一応待ち合わせをしていたこともあつて急ぐことにした。

移動中の今の彼の状況を簡単に説明しよう。

暴走族が着る特攻服（赤）。背中には刺繍入り。

ノーヘル。

信号は無視。法定速度は無視。交通規制は無視。

そして背後には……………。

《そのこの暴走車!!直ちに停まりなさいッ!!!》

ボディを白黒に塗った車が、サイレンを鳴らして付いてきていた。「ポリ公共が煩いな……………まったく、近所迷惑だろうに。暴走行為は慎まなきゃいかんだろうに……………」

レンは後ろの追跡車を振り切るためにアクセルを開ける。

メーターには120kmを超えた数字が出されている。無論、ここ

は公道である。

並木道を5秒で通過し、赤信号を突破し、立体歩道橋を潜り抜ける。

その時——誰かから声を掛けられた。

「そのの明らかに色々な法律を犯してる人ー!! 犯罪次いでに二人乗りさせてくださーい!!!」

すると、次の瞬間。

立体歩道橋から坂上学園の制服を着た少女が飛び降りてきた。

少女はそのままバイクに着地すると、レンにしがみ付いた。

「はじめまして。レン・ファムグリットさん」

少女は笑顔であいさつすると、自己紹介を始めた。

「私、坂上学園新聞部部长、文月 ひよの 二年生です。あなたを取材したくて探していたんです!」

「……取材? この状況でか?」

「そうですねーさすがにこの状況じゃ無理ですねー。メモも取れませんし。」

とりあえず、坂上学園まで行きましょう! です!」

良い笑顔で滅茶苦茶な事を言う女生徒は、何故か既に自前のヘルメットをかぶっている。

つまり彼女は最初からレンがバイクに乗っていることを知っていたのだろうか?

というか、立体歩道橋から時速120kmを超えるスピードのバイクに飛び乗れる人間がこの世にいるのだろうか?

更に彼女は何故自分の居場所を見つけられたのか?

様々な疑問が浮かんでいたレンが出した答えは——。

「……ようこそ共犯者。目眩く逃亡生活への入り口へ」

(もうどうでもいいからさっさと学校戻ろう。そんなことよかデユエルだ)

極めて適当で投げやりなものだった!!

「逃亡生活はいやです! 私は嫌だって言ったのに、この人に無理やりー!」

あとイヤラシイこともされそうになりましたー! 私の魅力に当て

「られてんですねー!!」

「降ろすぞテメエ」

「…………コホン。」

改めて運ちゃん、坂上学園までよろしく!です」

「良い時代になったもんだなオイ。今時はこんなナリして単車乗り回してても、雇ってくれるタクシー会社があんのかー…ゼツテーそこ潰れるわ…。因みに俺、持病があつてノーライセンスだが、そんな奴でも大丈夫かア?」

「大丈夫です!バレなきや犯罪じゃないですよ!!スピード違反とノーヘルと二人乗りは見つかったらちやってるから擁護出来ませんけどね!!」
「最後のはアンタのせいだろ」

気がつくと、後ろの車は電信柱に当たったりしてクラッシュしていた。おそらく数時間は渋滞だろう。お気の毒に。

「で、アンタ俺に何の取材したいんだ?」

後ろを気にする必要がなくなったレンは、速度を落として運転し始めた。

ついでなので、取材とやらも受けることにした。元々悪い気もしていなかったのが理由だが。

「もちろん決まってるじゃん。入学早々に全校生徒の話題と関心がかつ攫ったレン・ファムグリット君と、出来立てはやほやの部であるでゆえる部の部長にして、学園長の孫娘であらせられる坂上 みくさんとのデュエルですよ!!」

「ふーん。物好きだなアンタも。騒ぎになっただけで、面白味も無いだろうに」

「そんなことありませんよ?」

坂上 みくさんはデュエルを初めてたった三カ月で全国でも指折りのデュエリストのロイドさんに勝った才女ですから」

「へえ…あの残念な美人がねえ」

「おやおや、レンさんは坂上部長のような女性がタイプですか。メモメモ」

「タイプか…抱いた女は沢山いるが、惚れた女はあんな感じじゃない

な。

髪は長かったけど、ウェーブが掛ってたし。乳は無かったけど、背は低かったし。

性格は大人しい子だったよ」

「ふむふむ。今は好きな人いないんですか？」

「最初からそいつしかいないよ。今じゃ遠くにいるから会えないけどな」

「おおく遠距離恋愛ですか！ヤンキーみたいな恰好してるくせに一途なんですわね!!」

これは反響ありそうです!!です!!」

「どんな反響だか……つと、着いたな。学園」

「みたいですね。いやく優秀な運ちゃんでした。出来れば専属ドライバーになってほしいです。ですすー!」

「乗せるたびに犯罪(二人乗り)を犯す専属ドライバーなんざ聞いたこともねえな。ほら、降ろすぞ」

校門を潜ってバイクを止める。

少女を降ろしてみると、意外と身長が低いことに気がついた。

「最後に、一言お願いします」

「何だ？」

「デュエルへの意気込みをどうぞ!」

「(丁寧に録音機まで準備されていた。

「……………」

「……………」

お互いに沈黙が続く。

何を言えばいいのかと考えるレンと、レンが口を開くまで急かさずに待つつもりのひよの。

そして、長い沈黙の後、レンはようやく口を開いた。

「勝つ!!」

そう一言だけ答えたレン真剣な表情に、ひよのは一瞬だけ魅入っていた。

「……………素晴らしい答えですつ。私、キミのこと応援することにしま

す。

がんばるのです!!」

ひよのは、満足したような笑顔でエールを送ると、走り去って行った。

と思つたらまた戻って来た。

「まだ何かあるのか?」

「レンくん。これあげます!!ひよのからの『頑張れのプレゼント』なのです!!」

その小さな手に持っていたのは、一枚のカードだった。

『白き龍は勝利をもたらず。されど、黒き竜がもたらずのは可能性なり。』

このカードも、勝利はもたらさないけど、可能性を導くのです。」

「勝利の可能性…か」

「ただ、召喚条件があるので、どんなデッキでも使えるわけではないのですが……ごめんなさいです」

「いや、せっかくだ。デッキに入れておくわ」

使えるかわからないカードを、レンは迷わずデッキに入れた。

「レンさん……優しいですね。」

「別にそんなんじゃないさ。枠が余ってたから入れても入れなくても同じってだけさ。」

「だったら折角だから入れるのも一興だと思っただけだよ」

「そうですか。フフツ」

「じゃあ、行くか。どうせ観に来るんだろ?一緒に行こうぜ」

「もちろんです。しっかり取材させてもらいますよ!!」

「……………」

「……………」

「遅い…遅い……遅ーい!!!」

レンとひよのが会場に着くと、痺れを切らした坂上みくが暴れまわっていた。

辺りには壊された出店や飾りが無残に散らかっている。

「うがあああああああー!!!」

その姿を目の当たりにしたレンは……。

「なあ、センパイよお……。」

「はい。なんでしようかレンさん？」

「……………帰っていい？」

「ダメです」

「マジで？アレもう人じゃないぜ？めっちゃ暴れてるぜ？誰だよ動物園からゴリラ逃がしたの」

「女の子にそんなこと言っちゃダメですよ。デリカシーに欠けますよ？」

「……………アレを女の子扱いするくらいなら、アンタをレディとか呼称する方がまだ救いがある……………いや、無いか」

「失礼ですよ！私は背が低いだけで出るとこは出えます!!マニア垂涎のロリ巨乳なんですよ!!」

制服のブレザーを脱いでみせるひよの。確かに出るとこは出ている。でゅえる部部长、哀れ。

「そのそこそこ立派な乳は隠しておけ。あそこに巨乳マニアの生臭坊主いるから。襲われるぞ」

「それは嫌です。」

サツと上着を着なおそうとしたようだが、かなりもたついている。自分で服着られないのだろうか。

「さてと……………おい、そのゴリ——ゲフンゲフン!!!——でゅえる部部长。」

待たせたな。デュエルの時間だぞ」

「あああああ!!待たせたなですって……………って、ええエー!!」

待ち人来る。さんざん待たされたみくは、怒り心頭だったがレンの恰好を見て血の気が引いた。暴走族御用達の特攻服姿である。ちよつとビビってチビった。

「遅刻したのは悪かったよ。ほら、土産だ」

「わわ!?!って、何よこれ!!ドロップ!」

「パチンコの景品だ。なんならコンビニで買ったコーヒーも付けるか

? ブラックでよければ」

「あんた……あんたねえ……!!!この私を待たせておいて……パチンコして……コンビニ行ってたわけ?」

「ああ。あと、家帰って着替えて、ショップに寄って女を1人送って来たら来た。」

「どれだけあたしのことバカにすれば気が済むのよー!!バーカあああああああー!!!うわあああああーん!!!」

「あーわかったわかった。ウザいから泣くな。ウザいから」

「アンタ、絶対…ぜつたい……負かして奴隷にしてやる……つつ!!」

誓いなさいよね!!あたしが勝ったら、あんたは一生あたしの奴隷よ!!」

その言葉に、レン・ファムグリットの目つきが変わった。

「ああ。誓う」

「いい度胸ね!!じゃあさっそく——」

「お前はどようするんだ?」

「……………は?」

「お前は、俺に負けた時…その人生と幸福を、全て俺の都合のために浪費できるのか?」

一生奴隷になると言うのは、家族にも友達にももう会えなくなるんだ。お別れも言えない。

それどころか、自分が今どこにいるのか。生きているか死んでいるのかさえも知られずに、忘れられていく。

——その覚悟がお前にあるのか」

その言葉には、泣く子も黙る重みがこもっていた。

「……………つつ!?!」

「まあいい。俺が勝ったら、好きにさせてもらう。アンタの人生を。

まあ、気に住んなよ……アンタが勝てばいい話だから……」

はじめようか?」

「そ、そうよ。あたしは…負けない。負けないんだから!!!」

「決闘(デュエル)!!!」

これから行われるのは、文字通りの決闘。

自分の人生を賭ける戦い。

もちろん、坂上みくは、そこまで深く考えてなどいなかった。悔しかっただけ。見返したかっただけ。

何も相手の人生を狂わせようとしたわけじゃない。

だが、レンは違う。完全に本気に捉えていた。

『この決闘の敗者は、人生を相手に譲渡する』

自称平凡な男の何処にそんな冗談みたいな言葉を本気にする要因があったのか？

ここにいる誰一人、それを知る者などいなかった。

遊戯王 ～Fake Origin～2

——ピーン。

金属音が静かに響き、室内の空気を震わせる。親指から放たれたコインが宙を舞い、坂上みくの足元に落ちた。上を向いているのはみくが選んだ十字架の描かれた面。

先ほどまでお祭りの雰囲気であまっていた体育館では今現在、張り詰めた空気が漂っている。

ここで行われるのは見世物的なデュエルのハズだった。誰もがデュエルと、その空気を楽しむつもりでいた。

しかし、開始直前のレンの言葉で一変してしまった。

坂上みくもまた、それまでの騒がしさが嘘のようで、借りてきた猫という言葉で彷彿とさせる。

「あ……あたしのターン」

相手のドロローと同時に、レンの目の鋭さが増す。その目はみくの一挙手一投足を決して見逃さないように、刺すような視線を放つ。

「……………っっ!!」

(何なのよあいつ…人生を捨てるのか家族と会えないとか、バカじゃないの!?)

何本気でキレてんのよ。わけわかんない……っ。絶対倒して土下座させてやる!!)

「アタシのターン!!」

手札から、雷帝家臣ミスラを特殊召喚!!」

ミスラの効果により、レンの場には『家臣トークン』が特殊召喚される。

「……雷帝……??ザボルグでも出てくるのか……?」

「あんな時代遅れのカードなんか使うわけないでしょ!

ミスラをリリース。手札から、炎帝テストタロスを進化召喚
!」

炎帝テストタロス ☆6 2400/1000 炎属性 炎族

このカードがアドバンス召喚に成功した時、相手の手札をランダム

に1枚捨てる。捨てたカードがモンスターカードだった場合、そのモンスターのレベル×100ポイントダメージを相手ライフに与える。

「さあ、手札を捨てなさい。一番右のカードよ」

「あいよ」

レンが捨てたのは魔法カード『死者蘇生』

「最後にカードを一枚伏せてターンエンド」

「ほむん。どうやら、あの断崖絶壁(ナイムネ)な高飛車部長は、帝デッキのようだよ」

「つか、今はむしろ蛇に睨まれたカエルじゃん？めっちゃビビってるし。」

レンくんてば温室育ちのお穢さんにガン付けたらマズいって」

「にーは勝負事になると目の色変わるから。」

普段は本当にいい人なんだよ？人の意見と法律は無視するけど：

(ボソツ)

「ダメだろそれ。」

義妹の必死のフォロー空しく、レン・ファムグリットは擁護出来ない。い。

「俺のターン。ドロ」

カードを引いたレンの眼光は、一層鋭さが増していく。おそらく子供が見れば泣き出すだろうし、親御さんがいれば通報待ったなしのヤバい人の目だ。

「手札から『古のルール』を発動する。」

「古のルール？ってことは、バニラデッキなのかな？レナさん、ちよつとワクワク」

「む？ファム妹。お主、家でレンにデュエルを教えたのではないのか？」

「そうなんだけど、デッキは当日まで隠しておきたいって言われちゃったから、レナさんも全然デッキ内容知らないんだよ」

「手札から『真紅眼の黒竜』を特殊召喚!!」

「「え!!」」

デュエルディスクにカードがセットされる。

光とともに現れたのは黒い翼を持つ竜。遊戯王の歴史の中でも最初に登場したドラゴンだった。

「レッドアイズ…ですって？」

アンタ、それがどういうカードか分かって使ってるわけ？」

「どういう意味だ？」

「はあ…いいわ、教えてあげる。

そのカードはね、星7 攻撃力2400守備力2000のモンスター。

星6バニラでもデーモンの召喚ってカードが有る。同じレベル、属性でもそのカードより攻撃力の高いカードは幾らでもあるわ。要するに弱いカードなのよ！」

「ほむん。まさか今そのカードを実戦投入するとは…挑戦的であると
言わざるを得ないのう」

「レナさんは好きだよ。あのカード可愛いもん。頑張れーレッドアイズー！」

レナの応援に雄たけびで答えるレッドアイズ。やる気は十分である。

「そんなカードで戦うなんて、アンタあたしのこと舐めてるんじゃないの!？」

「……………真紅の眼を持つ黒竜。怒りの黒き炎はその眼に映る者全てを
焼き尽くす」

「？」

「黒い炎は、カラダよりも精神を蝕む…気がする。魔法カード『黒炎
弾』！」

通常魔法：黒炎弾

自分フィールド上の「真紅眼の黒竜」1体を選択して発動する。選択した「真紅眼の黒竜」の元々の攻撃力分のダメージを相手ライフに与える。このカードを発動するターン「真紅眼の黒竜」は攻撃できない。

坂上みく LP5400

「くそっ、先制された！」

「——更に、二枚目の『黒炎弾』を発動!!」

「むつきいー!!」

坂上みく LP3000

「おおく!!一度はやってみたかった黒炎弾二連発だー!!」

「三枚目の『黒炎弾』を発動!!焼きはらえ!!」

「「「おおおー!!」」」

まさかの『黒炎弾』三連発に、それまでお通夜モードだった会場の雰囲気を払拭するほどのインパクトを会場に与えた。

坂上みく LP600

「く…っ!」

「弱いカードだか何だか知らねえが、要は使いこなせてないだけだ。負け犬の遠吠え——いや、雑魚が知ったかぶってるのか。」

「…ふん。そういうセリフは勝ってから言いなさいよね!!ライフなんて投げ捨てるものよ!」

「んじゃ、そのまま命も人生も投げ捨てる。俺は『家臣トークン』を守備表示にして、ターンエンドだ」

これでターンは一巡。

ここまでの状況は

坂上みく LP600

手札3枚 場 テスタロス 伏せ1

レン・ファミグリット LP8000

手札0枚 場 真紅眼の黒竜 家臣トークン

「ほむん…互いに大きくアドバンテージを失っているな…。」

しかし大丈夫なのかレンは。あやつ、現代の遊戯王において如何に手札が重要でライフが軽視されているのか知らんようだが…。」

このターンで全ての手札を使い切ってしまったレン。

対してガンマンで落ちるLPのみく。

「ま、手札的には仕方ないんじゃね?今までのカード全部見たから言えるけど、アレもう他に手無いじゃん?『古のルール』『真紅眼の黒竜』『黒炎弾』×3とか、オレ普通にココロ折れるわー」

「他にバーンカードがあるにしても、次のターンに決着出来るカード

などあったかの？」

「無いねー少なくとも自分のカード一枚だけで600削るようなカードは『昼夜の大火事』みたいな実戦で使われないカードばっかじゃない？ レッドアイズにシナジーあるとも思えないし」

「フフフ…手札を使いきった状況じゃ、もうアンタに打てる手なんてない!!」

あたしのターン。ドロロー。

行くわよ!! 永続魔法——帝王の開岩!」

帝王の開岩 永続魔法

このカードがフィールド上に存在する限り、自分はエクストラデッキからモンスターを特殊召喚できない。また、自分がアドバンス召喚に成功した時、以下の効果から1つを選択して発動できる。「帝王の開岩」のこの効果は1ターンに1度しか発動できない。

●アドバンス召喚したそのモンスターとカード名が異なる攻撃力2400/守備力1000のモンスター1体をデッキから手札に加える。

●アドバンス召喚したそのモンスターとカード名が異なる攻撃力2800/守備力1000のモンスター1体をデッキから手札に加える。

「更に、手札から『風帝家臣ガルーム』を召喚。

更にリバースカードオープン。『連撃の帝王』。

これで私は、1ターンに1度、アドバンス召喚出来る!

ガルームをリリースして、『邪帝ガイウス』をアドバンス召喚!!」

邪帝ガイウス 星6 闇 悪魔族 2400/1000

①：このカードがアドバンス召喚に成功した場合、フィールドのカード1枚を対象として発動する。そのカードを除外し、除外したカードが闇属性モンスターカードだった場合、相手に1000ダメージを与える。

「私は、帝王の開岩の効果を発動。更に邪帝ガイウスの効果を発動。更にガルームの効果を発動。」

「へえ、ガルームの効果。どんな?」

「ガルームは、アドバンス召喚のためにリリースされた場合に、デッキから「風帝家臣ガルーム」以外の攻撃力800／守備力1000のモンスター1体を手札に加えられるのよ。

私は『地帝家臣ランドローブ』を加えるわ。そして——」

「……………いいね。」

レンは口の端を吊り上げながら狂気染みた笑みを浮かべ始めた。「は？」

「……………俺のいない間に、デュエルは進化した。ゲームと呼べるほどの戦略を携えて。」

「何よ突然？」

ククク……………と心底愉快そうに笑うレンの姿は一層畏れを増していく。

「……………アンタはいつからデュエルをしてるよ？」

「三ヶ月くらい前からかしら？それが何」

「俺は、両親に捨てられてしばらくしてからだった。6歳の時かな」

「捨てられた…………？」

「あの時はさ、今みたいな平和なデュエルは無かった。強いカードも弱いカードも、完全に決まっていた。

デッキに入れるカードも大体固定されてて、ただひたすらに相手をつぶし合ってきた。

だから今、少し楽しいと思うよ。こんなにも幅広い戦術とカード。

選択の余地が広がり、戦略を考え、実現できるだけの環境。

ああ……………ここはまるで、虹のかかった露天風呂のようだ」

「意味の分かんないことばかり言ってるんじゃないわよ!!」

何が露天風呂よ!!だったら熱湯で火傷させてやるわ!

ガイウスの効果は場のカードを除外する。真紅眼の黒竜を除外する!」

「……………ガウ……………」

これで出番終わりかと言わんばかりに、悲しそうな泣き声を上げたレッドアイズ。

サラサラと砂のように消えていった。

「へえ、雷帝の除外番か。強力だ」

「まだよ！更に除外したカードが闇モンスターの場合、相手に1000ポイントのダメージを与える。」

レン・ファムグリット LP 7000

「おめでとさん。ファーストダメージだ。」

このデュエル、初めてのダメージがレンに入った。しかしレンは愉快そうに口元だけで笑う。

「最後に、開岩の効果でデッキから『風帝ライザー』を手札に加える。」

「ああ…本当に、良い時代だ。」

「バトル!!」

家臣トークンがガイウスによって破壊される。

「アンタが黒い炎なら、こっちは怒りの真っ赤な炎で灰にしてやる!!」

炎帝テスタロスの炎撃がレンを包む。

炎帝テスタロス ATK2400

レン・ファムグリット LP 4600

「フフフ…楽しいなあ、オイ…!!」

「ひっ…!」

過去の記憶とのあまりの違いにテンションが上がって来たレンは、段々と狂気染みた笑みを浮かべ始めた。

「どうした…?まだ何かあるのか…?」

その瞳は目の前のみくを獲物として認識し始めている。

その口元は今にもみくに喰らいついて来そう。

1秒先にも犯されるのではないかという錯覚に陥りそうで、恐ろしい。

「た…ターン、エンド」

「ああ、んじゃあ俺のターンだな…フフフ…!」

(…何よあいつ!!なんなのよ!!本気で意味がわからない!!!)

勝負に遅刻してきたと思ったら、暴走族みたいな恰好で現れるし!

何か怒ってるし!!しかもめっちゃくちゃ怖い!!もう逃げたい!!)

いつその場から逃げ出してしまおうかと思った。その時――。

「え…!」

ヒュン――!!

バキッ!!

「――超痛え!?!」

コロンコロンと中身の無い音が床で鳴る。

そこに落ちているのは、なんと木刀だった。

「にー!!少し落ち着きなさい!!」

レンに怯えるみくを見かねたレナがわざわざ教室まで行って取って来たのだった。

「ゑ……俺??」

しかし、デュエルに夢中(?)になつていたレンは、今までみくが怯えていたことにすら気が付いておらず、何の事を言われているのかさっぱり理解できていない。

それをすぐに理解すると、レナはステージまで上がって来た。

外野もその光景にざわつき始める。

「何だ今の?」

「あれって木刀!?!」

「あの子可愛くね?」

「あれって、レナ・ファムグリットじゃね?テレビで観た!」

ステージに上がりきったレナはみくのもとへ駆け寄った。

「部長さん。タイムね!」

「へ……うん」

それまでの恐怖のせいで急な横やりに頭が付いて行かず、腰が抜けてしまったみくは、言われたとおりにするしかなかった。するとさつさとレンの元へ踵を返した。

「……何の用だ、レナ。ジャマだ」

一方、当初デュエルのこと自体すっかり忘れていたはずのレンは、早く続きがやりたくて仕方ないらしく、このタイム自体が本意で堪らなかつた。

「にー。ちよつとその服脱いで」

「ああ??何でだ」

「何でも。はい、これ着替え」

レナは何故持っているのか不明な、レンの着替えを手渡し、そのま

ま上着を脱がせた。ついでに服も着せようとした。

「はい、ばんざーい」

「そしたらお前上まで手届かねえだろうが…」

物理的に難しかったので諦めた。

「ねえ、レン君」

「……何だ。レナ」

「キミは、自分の身長が何センチか把握してる?」

「……183cm」

「レナは?」

「………160前後。多分」

「163cm。正解」

「何が言いたい?」

「あのね。レン君は、自分が思っている以上に怖い顔してるの」

「え……?」

レナにしか分からないが、明らかにショックを受けたような表情で落ち込んだ。

「レナは知ってる。にーが本当は優しいこと。でもね、あの人は何も知らないんだよ?」

飛娘ちゃんだって、そう。たとえばにーが仲良くなりたくて街中をバイクで連れまわしたりしたら、仲良くなるどころか怖がらせて余計に仲良くなれなくなるの。」

「……………」

「にーは楽しいんだよね。部長さんとのデュエル。」

名前を知っているカードと、初めてみるカードが同じデッキの中で力を発揮している姿を見て、凄くうれしかったんだよね?最初はムツとしたけど、今はとっても楽しいだけなんだよね。」

「……………」

「だったら、にーも相手を楽しませるデュエルを、見せてあげようよ。ね?」

「……………」

レンはすっかり黙って意気消沈してしまった。

「部長さん。怖がらせてごめんなさい。」

「え……？」

そんなレンの代わりに、レナは謝罪した。

「でも、怖がらなくても大丈夫だよ。にーは……。」

レン君は、怖い人じゃないから。だから……」

「あなた……。」

レナは優しく手を差し伸べる。

「ぜったい、だいじょうぶだよ。」

「……………」

みくは、レナの手を受け入れて立ち上がった。

これで大丈夫だ。そう確信したレナは――

「二人とも、あと、観てるみんな!!中断してごめんねー!!」

バイバイと手を振りながらレナは去って行った。

「あと、にーもごめんねー。お詫びに今夜はご馳走!勝ったらにーの

大好物スペシャルってことで!!」

「……………」

「……………」

レナの乱入で中断したデュエルが仕切りなおされる。

レナが観覧席に戻ると、友人二人が迎えた。

「ファム妹よ。お主何がしたかったのだ？」

状況がつかめない英心は、レナに説明を求めた。

「ん〜?もちろん、レナさんの大事な大事なにーが、楽しくデュエル出

来るようにしてきたんだよ。」

主に肩の力を抜いてもらうためにお着替えしてもらった」

「何ゆえに?」

「それは恋ゆえに?」

「なぬっ!?!お主よもや実の兄に恋心を??!」

「冗談は置いといてさ、レナちゃん。とりあえずもう楽しいデュエ

ルってのは無理じゃん?」

「どーして?」

「だって、レンくん手札0じゃん。」

「そうだね。しかも、部長さんの手札には疑似ドロロックの『ライザー』！場には『連撃の帝王』！」

畏なら負け、場に出さなきや効力を発揮しないモンスターなら負け。絶望的だねっ！」

「ほむん。おまけに墓地は空っぽで貪欲も期待できぬ。確かに、これを何とか出来れば奇跡じゃのお……」

「ま、負けちゃっても死んじやう訳じゃないし。

その時は慰めてあげようよ。膝枕でもして頭でも撫でながらさ」
につこりと笑うと、レナはデュエルの観戦に戻った。

みくはそれまでの恐怖を振り払い、デュエルに集中することにした。

（そうよ。どんなカードが来たって、1枚しかないのなら、全部ライザーで凌げる。

次のターンに直接攻撃すればあたしの勝ち！）

「……………」

「どうしたの？アンタのターンよ。打ちどころでも悪かった？」

レンはドローフエイズにドロースることなく、観客席を眺めていた。

「……………」

「ちよつと？ねえ、アンタ!？」

「……………レン。」

「え??」

「レン・ファムグリット。今の俺の名前だ。」

「レン……?」

「ああ。よく考えてみたら、俺達はまだ、自己紹介すらしてねーからな。

お互い勝手に自分の感情を押しつけるだけで、相手を理解しようとしてなかった。」

「……でもあたしは名乗ったじゃない。部活紹介の時に」

「そうだったかな……悪いけど俺、その時全く話を聞いていなかったんだ」

「なあっ…!?!あたしのありがたい部活紹介を聞いてなかったですって!?!」

「後で聞かせてもらおうさ。1年全員に向けた言葉ではなく、俺に向けた部活紹介を、な」

「あ…」

笑った。さっきまでの狂気染みた笑みではなく、もっと温かみのある、そういう笑顔で。

「さて、そんじやデュエルを続けようぜ。

俺のターンだったよな」

「ふん！そうよ、かかって来なさい!!言っておくけど、半端なカードを使ったって無駄よ!」

『風帝ライザー』は、場のカードをデッキトップへ戻す。

すでに王手はかかっているのよ!」

「フフフ…いいぜ。だったら呼び込んでやるよ。

半端じゃない、最高のカードを。ドロー!!」

会場に緊張が走る。

一体何を引いてくるのか。

「……………俺が引いたのは」

「……………」

長い沈黙が漂った。それはほんの一瞬だったのかもしれないし、何秒もかかったのかもしれない。

沈黙を解き放つ言葉が響く。

「魔法カード『カップ・オブ・エース』!!」

「なんですって!?!」

そのカードを知る者は、そのカードの投入を決めたレンに驚き、そのカードを知らないものは、ただただそのカードの効果説明を待った。

するとレンは、最初に使ったコインをみくに向けて弾いた。

「受け取れよ。俺とアンタの運命を決める1枚だ」

「アンタ…本当に何考えてデッキ組んでるのよ??」

カップ・オブ・エース 通常魔法

コイントスを1回行う。表が出た場合、自分はデッキからカードを2枚ドロースする。裏が出た場合、相手はデッキからカードを2枚ドロースする。

「……これでも運命に身を任せて生きてきた身で、采の目に一喜一憂して、コインの裏表でその日の飯が食えるかどうかって日も少なくなかった。遊びでギャンブルが出来る。良いゲームだ。」

「アンタいったい何者よ?」

「レン・ファムグリット。」

「……もういいわ。コイントス!」

ピン!!

放たれたコインが宙に舞う。今日の運命は表か裏か。1枚のコインにデュエルの行方は託された。

「裏が来ればあたしの勝ち」

「表が出ればデュエル続行。」

コインが地に落ちる。せわしなく跳ね続けた後、ようやく落ち着いた。それに続き、結果が見えない観客がざわつく。

「おい、どっちだ!表か!裏か!」

「見えねえぞ!!」

「どっちどっち?終了?続投?」

「……。もしもここで終っていたのなら、俺はその程度だった。

いつ死ぬかもわからないものに、常に命を掛け続けてきた。」

「へえ……なんのために?」

「……死なないために。」

「そう……。まさに、今の貴方そのものね。」

「ああ。俺は勝つためではなく、殺されないうちに命を掛ける。その矛盾の中でいつ破滅するかもわからない綱渡りで、俺は今日も破滅から逃げ続ける。このコインが、俺にとどめを刺すその日まで。」

示し合わせるでもなく、二人のデュエリストは同時にコインを見た。

「ほむん……とりあえずは……」

「だね。うん。」

「さつすがだよ、にー！表！表だよー！！やったー！！」

カップ・オブ・エースのコインの出目は、レン・ファムグリットのドローだった。

「さあ行くぜ。ドロー！！」

「後は、レン君のドロー次第……」

「ほむん。何を引くか？」

引いたカードを確認する。

「……俺は一体、あと何度逃げ続けられるのかな。」

引いたカードは、魔法カードと罠カード。

「行くぜ、坂上みく」

「……来なさいよ。」

「生きとし生きる者を飲み込み、命そのものを還す力。その歪みを召喚する。」

魔法カード『ブラック・ホール』！！

「何ですって!?!」

「おおー!!」

レンの引いた魔法カードは『ブラック・ホール』。

場に存在する全ての命を飲み込み、自身すらも破壊する破壊のカード。

この重力の暴力によりモンスターは消滅した。

「ギャンブルに勝って、ピンポイントに必要なカードを引いてきた……。『ブラック・ホール』。現代入れる人の方が少ない大量破壊カード。でも、この場でアレ以上に必要なカードは無いね」

「む？そうなのかファム妹？サイクロンで『連撃の帝王』を割れば同じことであろう?」

「残念だけど、それじゃあモンスターが残る。仮にミラファアや激流葬だったとしたら1ターン待つ必要がある。それじゃあまた次のターンにならないと反撃出来ない。」

しかも、あのデツキに『連撃の帝王』は文句なしでキーカード。仮に二枚そろえば1ターンに3回。相手のターンで2回召喚権を得ることになる。あれは名前指定の1ターン制限じゃないから。

ぶち壊しても湧いてくる可能性の高いカードを破壊するくらいなら、いつそその発動条件を封殺してた方がいいんだよ。

今の状況ならチェインされてもライザーの効果で戻せるカードが無い。彼の場合を考えれば、これ以上はないよ。帝がどつちか残ってればゲームエンドになるんだかr……って何？英心君？！目を丸くして」「お主、詳しくすぎんか？まるでプロの解説のようではないか。」「そう？この程度なら普通だよ」

「普通な事あるか。あろうはずが無い。あつてたまるか。あれほど詳しい解説が出来るのは、実際に使用しかつ使いこなすだけの腕が無ければプロ以外になかろう。お主、剣道以外にもデュエルでも一流であつたのか？」

「ちよつと昔、専門的に勉強してるんだよ。今でもバイトで使う知識だからね。……には内緒ね？コンビニで肉まん買ってもらえなくなるかもしれないし。」

「ほむん。フライドチキンで手を打とう。」

「おっけーおっけー。ついでにポテトも付けちゃおう。ん？……いいの？！お寺のお坊さんになるのにお肉って」

「拙僧は破戒僧になる。」

「すごい言い訳だねーハハッ。つと、デュエルデュエル。」

「俺はカードを1枚伏せて、ターンエンド。」

レン・ファムグリット LP 4600

手札 0 場 伏せ×1

坂上みく LP 600

手札 3枚 場 『連撃の帝王』『帝王の開岩』

「あたしのターン。」

（手札にはさつきサーチした家臣がいる。そして、手札にはライザー。攻めるには十分……問題は、あのリバースカード。あのカードがフリーチェインなら、『連撃の帝王』の発動時にチェインすれば、ライザーの強制効果はあたしのデッキに疑似ロックを掛ける。

手札の不要な魔法・罠を場に出せば、どうせ開岩でサーチ出来るか

ら手札交換にはなる…。)

みくは、レンの公開情報を確認する。

(もし、あのカードが激流葬だったら、また振り出しに戻る。ランドロープがいるから家臣には困らないけれど。)

「……………」

「ずいぶん長考してるのう。」

「……………警戒してるんだね。LP600だから下手すれば終わる。だから大胆に動くことができない。サイクロン系か召喚反応系。そのどっちかなら、負けがかなり大きくなる。」

「む?どちらもさっきイラネと言っておらんかったか?」

「あの場ではね。でも今は部長さんのターン。レナさんなら、あの場で怖いのはサイクロン。手札にもよるけどね」

「たとえばどのような?」

「あの手札一枚が、二枚目の『連撃の帝王』か魔法・畏に対処するカード以外なら全部。」

「む?あの絶壁部長の手札は三枚ではないか?一枚とは?」

「公開情報だよ。あの三枚の内、二枚はモンスター。一枚は家臣。一枚は帝。」

あの人は軽率すぎたんだよ。もしあの家臣が雷帝家臣なら、召喚反応でも壁モンスターを召喚する機会は得られた。でも、あれは『地帝家臣ランドロープ』。相手の場にモンスターもいない、魔法・畏も無い。

モンスターに耐性も与えられない。

そんな状態でライザーをサーチするのに、家臣が地帝なもんだから特殊召喚も出来ない。

連撃にチェインされたら、ライザーは自分の場をデッキバウンスする。ね?最悪」

「しかし、あんな事故みたいな手札補充など、視野に入れるのは難しかろう?」

「でも自分のデッキ内で対応可能なレベルの可能性だよ。」

あんなの事故じゃない。舐めプのしっぺ返し。自業自得だよ。

相手のデツキ内容も知らないのに、『だろぅ運転』なんかするから事故に会うんだよ。

舐めプ、かっこわるい。」

「…レ、レナちゃんがキツイ。」

「ほむん。ところで拙僧、一つ思ったのだがのうファム妹」

「なあに？」

「お主の兄は素人であろう？」

「うん。そうだと思うよ。『サイクロンで魔法・毘は無効化できないの知ってる？』って聞いたなら最初信じてくれなかったもん。苦労したんだよ。ちゃんと教えたげるの。『何!?破壊||無効ではないのか!?!』って」

「何それ懐かしい」

「ほむん。ではあやつ。『風帝ライザー』の効果知らなくね？」

「……………」

二人のデュエルはまだ続く。

遊戯王 ～Fake Origin～3

みく「あたしのターン。」

みく（手札にはさつきサーチした家臣がいる。そして、手札にはライザー。）

攻めるには十分…問題は、あのリバースカード。あのカードがフリーチェーンなら、『連撃の帝王』の発動時にチェーンすれば、ライザーの強制効果はあたしのデッキに疑似ロックを掛ける。もちろんそれで連撃と開岩を同時に除去されないのなら、そのまま攻撃すればあたしの勝ち。攻撃が通らないとしても、開岩でサーチすれば手札交換。連撃が残れば次のドローに掛けても勝算は決して低くは無いわ……でも）

みくはこれまでのレンのプレイングを思い出す。これまで確認したカードは、死者蘇生を除けばどれも真剣勝負に持ち込むカードとしては優先度が高くないマイナーカードばかりだ。

みく（もし、あのカードが激流葬だったら、また振り出しに戻る。ランドロープがいるから家臣には困らない。けど、もしあのカードがあたしが知らないようなカードだったら、何が起こるか分からない。）

みく「……………」

英心「ずいぶん長考してるのう。」

レナ「……………警戒してるんだね。LP600で、十分ゲームエンドの可能性がある。だから大胆に動くことができないんだよ。サイクロン系か召喚反応系。そのどっちかなら、かなり苦しくなる。」

英心「む？どちらもさつきイラネと言っておらんかったか？」

レナ「あの場ではね。でも今は部長さんのターン。レナさんなら、あの場で怖いのはサイクロン。手札にもよるけどね」

英心「たとえばどのような？」

レナ「あの手札3枚が、2枚目の『連撃の帝王』か魔法・罫に対処するカード。あと他の帝以外は全部つらい。」

英心「む？あの絶壁部長の手札は5枚ではないか？3枚とは？」

レナ「公開情報だよ。あの5枚の内、2枚はモンスター。1枚は家

臣。1枚は帝。もしあの家臣が雷帝家臣なら、召喚反応でも壁モンスターを召喚する機会は得られた。でも、あれは『地帝家臣ランドロップ』。相手の場にモンスターもいない、魔法・罠も無い。モンスターに耐性も与えられない。そんな状態でライザーをサーチするのに、家臣が地帝なもんだから特殊召喚も出来ない。連撃にチェインされてライザーしかいないなら、自分の場をデッキバウンスする。」

英心「しかし、あんな事故みたいな手札補充など、視野に入れるのは難しからう?」

レナ「自分のデッキ内で対応可能なレベルの可能性だよ。あんなの事故じゃない。舐めプのしっぺ返し。自業自得だよ。相手のデッキ内容も知らないのに、『だろ?う運転』なんかするから事故に会うんだよ。舐めプ、かつこわるい。」

鈴木「:レ、レナちゃんがキツイ。」

英心「ほむん。ところで拙僧、一つ思ったのだがのうファミ妹」

レナ「なあに?」

英心「お主の兄は素人であろう?」

レナ「うん。そうだと思うよ。『サイクロンで魔法・罠は無効化できないの知ってる?』って聞いたなら最初信じてくれなかったもん。苦勞したんだよ。ちゃんと教えたいの。『何!?破壊||無効ではないのか!?!』って」

鈴木「何それ懐かしい」

英心「ほむん。ではあやつ。『風帝ライザー』の効果知らなくね?」

レナ「……………あ。」

外野が議論に興じている内に、みくの決心は固まった。

みく「……………いいわ。あたしはアンタに勝ってアンタを部に入れるんだもの。こんなところでビビって逃げるようなやつ、あたしなら認めない。チャンスには攻める!行くわよレン!!」

レン「来い!みく!!」

みく「手札から、『地帝家臣ランドロップ』を召喚!プレイヤーにダ

イレクトアタック!!」

レン「うっ…!」

レンLP1000

みく「これでまた、あたしの場にはリリース要員が補充された。ア
ンタが何をしようとおたしの勝ちよー!」

レン「いいや。まだ終わらせない。お前はこんなところで諦めるよ
うな軟弱な部員が欲しいのか?」

みく「言うじゃない! だったら見せてみなさい。あたしを納得させ
られたのなら、副部長の座を与えてやるわ!! ターンエンド」

レン「もちろん、断るけどな! ドロー!!」

レナ「にー楽しそう。」

英心「ほむん。まるで熱血バトルマンガの友情を見とる気分じゃの
う」

鈴木「レン君あー見えて単純だかねー。あいつ自分のピンチって
分かってんのかね?」

レン「俺はカードを更に伏せる!!」

既に鎮座するリバースカードの横に新たに出現するリバース。手
札は無く、ライフは1000の状況で、レンは自身の不利に怯える様
子は無かった。

レン「さあ、この2つの俺のカードに、お前はどうか対処する?」

エンド宣言の前に『ライザー』を召喚するか?」

みく「アンタ、ライザーの効果は知っている?」

レン「さあな。だが、俺に有利に働かないことは知っている。」

みく「それでも挑発するわけ? 強気ね」

レン「何だ? 怯えたか」

みく「……………」

レン「……………」

観客A「おい…どうするんだデュエル部部长は。」

観客B「バツカ。発動するに決まってるだろ。ここで使えばあのリ
バースはチェイン出来ないだろ。」

観客C「…………あれは罠で、最初に伏せた方が本命では? 例えば、『イ

ンターセプト』なら、アドバンス召喚したモンスターのコントロールを得られますよ?」

観客D「そんなクソカード入れるわけねーじゃん。『神の宣告』で召喚無効だろ。」

観客A「いや、もしかしたら『サイクロン』で『連撃の帝王』を破壊して、召喚そのものを不発にするかも…」

会場内でも様々な憶測が飛び交っている。実戦的なメタカード。その場だけで有効だが使用されればそれ以上に困るマイナーカード。全く見当違いでタイミングを逃し発動すらできないカード。本来なら考えもしないようなカードを、ふと思いつき出させる。レン・ファムグリットのデュエルはそのくらい予想が付かないものになっていた。

レン「何もしないなら…俺は、ターンエンドだ。」

みく「……………」

レン「どうしたんだみく?」

みく「…言っておくけど、怯えたわけじゃないから。ただ…ただ、アインタを軽く見るのを止めただけ」

レン「…………?」

みく「ドロロー、あたしは、ランドロープでレンにダイレクトアタック。」

レン「…………。」

レンLP200

みく「あと一度攻撃が通ればあたしの勝ちね。モンスターをセツトして、ターン終了。」

みくLP800

手札4

場 地帝家臣ランドロープ ATK/800 伏せモンスター
連撃の帝王 帝王の開岩

レンLP200

手札0

場 リバースカード×2

観客F「なんだよ。部長のくせにチキンプレイかよーつまんねー」
観客G「うわー萎えるわー」
観客H「プライドとか無いのかなー。勝てばいいわけ？サイテー」
みくの一種消極的ともとれるプレイングに、観客は不満を露わにする。

みく「……軽蔑した？レン」

そう尋ねる声音がほんの少しだけ震えていた。それでも、レンを見つめるみくの瞳は、しっかりとレンを見据えていた。

レン「……しない。あれだけ手の内を見せて、その対策を取られていないと思うのは早計だ。大きく動かなくても有利だって言うなら尚更だ。

俺は楽しいゲームは好きだが、相手がバカなポンコツAIじゃ萎えるだけだ。」

その言葉に、みくは今度こそ迷いをふっ切った。

みく「それでこそ、あたしの部員にふさわしいわ！さあ、今度は貴方の番よ!!貴方持ちうる全力で、あたしと戦いなさい！」

レン「言われるまでもねえよ!!付いて来やがれ、俺の全力に!!リバースカードオープン!罫カード『運命の分かれ道』！」

みく「『運命の分かれ道』ですって!?!」

『運命の分かれ道』このカードの登場に、会場全体が騒然とした。

運命の分かれ道 通常罫

お互いのプレイヤーはそれぞれコイントスを1回行い、表が出た場合は2000ライフポイント回復し、裏が出た場合は2000ポイントダメージを受ける。

英心「ほむん…なるほど。はつきりしたな。レンのデッキが」

鈴木「うわーレン君マジ博徒だわー。さっきのカップ・オブ・エースと言い、アレと言い」

レナ「きゃー!!!レン君すつごーい!!!レッドアイズにギャンブルカード!!凡骨デッキだー!!漢気溢れてるよー!!しびれるうー!!!」

鈴木「お、おお…レナちゃんが今まで見たことも無いテンションで

喜んでるわ。剣道の全国大会優勝したときだっていつもどーりだったのに…」

英心「ほむん。妹と言うのは、兄が男気を魅せると喜ぶものなのだから…きつと。」

観客C「おい、すげえデツキ組んでるぞアイツ!!」

観客F「この状況で運命の分かれ道とかアツイ!!めっちゃアツイ!!」

観客H「頑張れー!!一年生ー!!」

みく「アンタって、もしかしてそんなカードばかりでデツキ組んでるの?」

レン「さて、どうかな。俺としては、見返りがデカイカードを選んだわけなんだから。」

みく「何が見返りよ、もう。自分のカードで負けるなんて間抜けすぎるでしょ。これで沈むのだけは絶対止めてよね!!」

レン「そんなもんは、コインとギャンブルのカミサマが決めるだろ。ほら、コイントス!」

みく「って言うかあたしだってこんなので負けるのやよ!!」
ピーン!

両者の指から放たれたコインが宙を舞う。裏に表に表に裏に。目で追いかけることが馬鹿馬鹿しくなるほど目まぐるしく変わる表うちに、みくは念を送るように睨み続けて、レンはとりあえず目で追って結果を確認する。自然と重力に従い地に落ち、反動で弾かれる。

鈴木「出目で考えられる展開は4つ。レンくんが負けるか、あの部長が負けるか、二人ともLPOで終るか…あるいは」

英心「ほむん…どうなるかのう?」

しばらく跳ねたコインがいずれ力を失い、結果が現れた。

鈴木「さて、結果は…つと」

みくのコインは

みく「よ、よかった…表ね…こんな終わり方なんて冗談じゃないわ」

そして…レンのコインは

レン「……………」

観客A「おい！どっちだ!？」

観客D「見えねえよ！どっちだ!!」

観客H「まさか裏じゃないわよねえ!？」

レン「……………結局お互いにライフ回復になっちまったか」

レンのコインも表だった。

観客C「よっしゃ、セーフ!!」

観客E「オツケオツケ!!まだイケるぞ!!」

レンLP2200

みくLP2600

レン「俺のターン。ドロ」

鈴木「うーん。レン君どうにもじり貧だなあ…そろそろ反撃の一つもしてくれないと、飽きてくるぜ」

英心「ほむん。しかし、どうやってもライザーが出張ってくるのではのう…」

鈴木「やっぱ序盤のハンデスと黒炎弾の大盤振る舞いが利いてきたかねえ」

レン「カードを伏せてターン終了」

レナ「……………まただ。リバースカード。」

英心「ほむん。アレではいつまでも攻めに行けん」

レナ「……………多分これで良い筈だよ。下手なモンスターカード引いたって使えないんだから」

みく「あたしのターン！」

手札も十分潤ったし、そろそろ行くわよレン!!あたしはランドロップをリリース。」

英心「ここでライザーを出すか?」

鈴木「あるいは別の帝か…」

レナ「何が出るかのお楽しみだね!」

みく「来なさい!『邪帝ガイウス』」

観客A「何でここでガイウス?」

観客B「敬遠のためのキープじゃねだろう」

観客D「いいや、ここでガイウスを除外してバーンダメージだろ」
観客F「バーンなら伏せモンスターが闇属性なんじゃね？」

鈴木「この展開をレナちゃんはどう見る系？」

レナ「ここでリバースを対処したいなら、最初にライザーを出してデッキバウンスしても、対処しなくちゃいけないカードの絶対数が変わらない……デッキトップに置かれたカードは次のターンに引けるから。だからガイウスなんじゃないかな。そう考えると、それまでガイウスは手札に無かったってことになるね。」

鈴木「一見、開岩を使えば似た動きは可能だが、それが出来るくらいならもうとつくに帝が場に出てきてた。よっぽど警戒してるんだな。今までのカードもほとんどがブラフみたいなもんだったのに、何をあそこまでビビってるんだか……」

レナ「確かにそうだよ。でも、部長さんの気持ち、分からないでも無いよ。」

英心「どういうことじゃ？」

レナ「レン君の場に伏せられたカード。ブラックホール発動以降全然使う素振りを見せてない。そして、部長さんもそれ以降帝を召喚していなかった。何か対策が取られてるかもって思うんだよ。」

みく「チエーン1ガイウス。チエーン2ランドロープ。チエーン3。開岩で効果発動！2枚カードをサーチして、最初に伏せられていた方のカードを除外する!!」

レン「……………フツ」

みく「何がおかしいのよ？」

レン「待ってたんだよ、この時を!!お前が除外しようとしたのは、触れてはいけないセーフティラインだ。リバースカードオープン! 『安全地帯』」

みく「安全地帯ですって!?!」

安全地帯 永続罫

フィールド上に表側攻撃表示で存在するモンスター1体を選択して発動できる。選択したモンスターは相手のカードの効果の対象にならず、戦闘及び相手のカードの効果では破壊されない。また、その

モンスターは相手プレイヤーに直接攻撃できない。このカードがフィールド上から離れた時、そのモンスターを破壊する。そのモンスターがフィールド上から離れた時、このカードを破壊する。

みく「開岩とランドロープの効果を処理。『怨邪帝ガイウス』と炎帝家臣を手札に……くつ、ガイウスが……!」

安全地帯を除外したことで安全地帯に守られていたガイウスはその身を滅ぼし跡形も無く消え去っていく。

レン「邪帝撃破!」

みく「やってくれるわね」

レン「まだまだ行くぜ」

みく「え?」

レン「これでお前の手札、何枚になった?」

みく「え……? 6枚だけど??」

レン「俺は0枚。圧倒的な不利と、圧倒的な敗北を約束された……敗者がその立場を逆転できる方法があるとしたら、その方法に、人は何と名前を付けるか知ってるか?」

みく「……???な、アンタって時々凄い難しいこと口にするわね……全然意味が分かんない」

レン「そうか? 簡単な事だ。このままでは殺されるといふとき、人は一縷の望みを掛けて、命すらもベットにして、賭けをする。今の俺のように。鬼が出るか蛇が出るか。さあ、薄汚れた欲望のため、不誠実な博打に勤しもうか!! リバースカードオープン。『ギャンブル』」

ギャンブル 罫

相手の手札が6枚以上、自分の手札が2枚以下の場合に発動する事ができる。コイントスを1回行い裏表を当てる。当たった場合、自分の手札が5枚になるようにデッキからカードをドロースする。ハズレの場合、次の自分のターンをスキップする。

みく「ギャンブル……!!??なんて言うバカカード使ってるのよアンタ!? 本当に勝つ気ある?」

レン「表か裏か、生か死か……ただの物質の『表裏二分の一』（ひょうりにぶんのいち）に命すら掛ける人間がいる。」

みく「何それ、ただのバカじゃない」

レン「そうだよ。親友を信じて、その娘を助けるために保証人になったばかりに、身を滅ぼし、破滅し、家族と無理心中を図った大馬鹿者だよ。」

みく「え？それ、誰の話……？」

レン「そしてその息子は、父親を目の前で殺した男にギャンブルを挑み、勝った。別に復讐したかった訳じゃない。仇を取る気なんて無かった。ただ、ひとりぼっちで残っても仕方が無かった。その時は、勝負の結果に従って殺されたかった。でも結果として、そいつの幸運は悪運と呼べるほどに勝利を運んだ。」

ピーン。

レン「そんな少年は、ここ一番のギャンブルをいつも外さない。」

みく「そんなオカルトあり得るわけ……」

レン「あり得るさ。このコインは表で落ちる。」

カン——！カカン——！！

放たれたコインが地面に降りた。……表だ。

みく「……たしかに、運が良いみたいね。ギャンブラー」

レン「俺はカードを5枚ドロウする。さあ、これで手札の不利は解消された。どう出る？でゅえる部部长」

みく「……………」

みく（……たしかに強い。デッキはどう考えても素人なのに……それを支えているのは、ギャンブルカードを含む魔法と罠カードを的確なタイミングでドロウ、かつ使用できる所。戦術のメインはおそらく魔法・罠でモンスターを除去しながら、バーンで勝利を狙うこと。ハズ……なんだけど）

みくの脳裏に映る二枚のレッドアイズが、その考えを肯定させなかった。

みく「……………」

次いで手札の6枚のカードを確認する。『風帝ライザー』三枚の『家

臣』『帝王の烈風』……そして、最後の一枚は……。

みく「……………よし！」

レン「ん？」

何かの決心をした坂上みくは、観客席にいた部員の一人に声を掛けた。

みく「タリズマン、来なさい。」

呼ばれた冴えない顔の部員は不思議そうにステージに上がっていった。

みく「『アレ』を使うから、観客全員追い出しなさい」

タリズマン「……はあ!? 『アレ』は使わないようになっていつも理事長に言われてるだろ!？」

みく「うるさいわね！あたしは、あいつにだけは絶対に負けちゃいけないの!!分かる!？」

タリズマン「分かんねえよそんな私情!!」

みく「いいからさっさと観客を避難させなさい!!」

タリズマン「ぎゃー!？」

背中を蹴り飛ばされたタリズマンは、泣きながら観客全員の避難を始めた。

レン「何だ？何が始まる？」

みく「……正直言つて、アンタがここまであたしを本気にさせるとは思わなかった。だからこのデュエルは、部活紹介の延長位にしか考えてなかったわ。あ、もちろんデュエル始める直前までだからね!! デュエル始まってすぐにアンタが凄いやつだって分かったから、慎重にプレイするようになったんだし。そこは勘違いしないでよね!!? あくまでもデュエル前の考えだからね!？」

レン「何だその彼氏に元彼の写真見られた彼女みたいな反応は」

みく「だ、誰が彼女だ!!あたしは今デュエルで世界取るって目標があるんだから、そんな浮ついたこと考えてられないのよ!」

レナ「おおく!部長さん可愛い。」

英心「ほむん。ペチャパイのツンデレなどいらぬな」

鈴木「そう?不細工のツンデレの方がめっちゃ殺意湧かねー?」

みく「そのギャラリ―!!好き勝手言ってるんじゃないわよ!!つか、きつさと出てけー!!これから出すカードは物凄い危険なカードなんだからね!!」

レン「――ちよつと待てコラ」

みく「え?あ、はい。何?」

レン「何じゃねえよ。何だそのギャラリ―散らさなきや出せないカードつて。んなヤバいブツ学校に持ち出すなや!」

何を言っているか分からないかもしれないが、遊戯王にはよくあることだ。

みく「だ、だつてしょうがないじゃない!!勝ちたいんだもん!!」

レン「理由になってねえんだよ!!」

みく「もー!仕方ないわね!!だつたら場所替えよ。ついて来なさい!!」

レン「は?おい、ちよつと待て勝手に――」

みくは突然レンの手を握ると、体育館を走り去って行った。

レナ「わっ!?ちよ、ちよと待つてよー!にー」

英心「ほむん…よいボインが揺れておる。足の速いボイン娘と言うのは良いな。

のお、鈴木」

鈴木「それはいいけどさー。どうするべ?オレら着いて行つちやう系?」

英心「拙僧は行くつもりだが、貴様はどうするのだ。あやつのことを一番見ておきたいのは貴様であろう」

鈴木「おやおや、いったい何の話だか。」

英心「ふん…まあ良い、これ以上話している暇は無い。ファミ妹の立派な揺れるボインを観察せねばならぬからな。……む?」

鈴木「どうしたのさ?エーシン君」

英心「いや、今小柄な体躯ながらも立派なボインを持った幼女が走って行くのが見えたような気がしたのだが…。」

鈴木「胸が出かけりや幼女も守備範囲内かよ!」

英心「何を言う!?ロリ巨乳はもつともパイオツを引き立たせる神秘

のボインなるぞ!!」

鈴木「……あーもういいから行くべ。エーシン君」

英心「心得た!!お主も好きよのお」

鈴木「テメエと一緒にするんじゃねえよこのおっぱいバカ!!」

英心「何だと!?!スク水フエチめ!!」

二人の変態の不毛な言い合いは、次のステージまで続く。

遊戯王　＼ Fake Origin 4

みくに連れられて校舎の外に出たレンは、学校の裏山まで移動していた。

先程の閉鎖的な空間から打って変わって開放的なシチュエーションでのデュエルになる。

レン「さつきまでとは全く違う場所になっちまったな。

だが良かったのか？せつかくあそこまで賑やかにしていたつてのに。

チラツと見たが、祭りの屋台見たいのが出てたよな。アレ学割とか利くのか？」

みく「学割つてアンタ……欲しけりや後で幾らでもあげるわよ。アレお爺ちゃんが用意したものだから」

レン「マジか!?一度綿あめつてのを食ってみたかったんだ。

あんな糸くずだか掃除して集めた埃だかみたいなのがどんな味かするのか、密かに気になってたんだ。」

みく「そんなに欲しけりや、買えばいいじゃない。」

レン「旨いか不味いか分からないものに金なんて出せるかよ。もつたいない。」

みく「……………アンタつて、いろいろズレてるわよね。ギャンブラーのくせに」

レン「俺だつて、生きるに困らなきやギャンブルなんてしなかった。多分。」

うん。平和に暮らせる今になつてもパチンコやら競馬やらしてるのは、昔の暮らしが原因なんだ。きつと」

みく「……………因みにそれ、いくら使つてるの？」

レン「一日5万くらいかな」

みく「……………アンタつて、もしかして嘘つき？」

レン「失礼だな。俺は嘘なんかついてない。1日5万使つて、5万以上稼いだ分は全部ドロップと交換してる健全な高校生だ」

みく「虫歯にならない？」

レン「自慢じゃないが、交換したドロップが俺の口に入ることはま
ず無い。いろんなところにばら撒いてるから。アレ大量にばら撒く
と宝石のように輝くんだ。」

みく「食べ物食べられない国の人たちに謝れ!!!」

レン「あれ??俺なんか怒られるようなこと言ったか……?」

顔に似合わず首をかしげていると…

レナ「お〜い!にー!!」

後から追いかけてきたレナ一行が追いついて来た。

ひよの「や…やつと、おいついたのです……ぜえぜえ…」

そこには、レンがデュエル前に出会い、学校まで相乗りして来た新
聞部の部長、文月 ひよのの姿があった。

息を切らしていないレナと相反しひよのは息切れに汗だくである。

レン「あれ?アンタ来てたのか?会場でも全く姿が見えないから
帰ったのかと思ってた」

ひよの「おやおやおやあ?私の姿が見えなくて寂しかったのかなあ?

大丈夫ですよ〜ちゃんと観てましたよ。メモだつてばっちりです。

そして明日の一面は【意外!不良ギャングブラーは寂しいと死んじや
う!?おねえちゃんといっしょ】で決まりです!!

だから安心してデュエルしててくださいね〜。お姉さんが見守つ
てあげますですよ〜」

レン「お姉…さん??」

ひよの「そこに疑問を持たないでください!!

年上です!センパイです!お姉さんですよ!!」

レン「こんな小さな女じゃ、お姉さんと言えるだけの色気も包容力
も見当たらないな。」

ピキッ——!!

ひよの「ほほ〜う。そうですかそうですか〜。

ていっ!」

レン「おっと!」

ひよのは突然レンに全力の体当たりをし、レンを押し倒した。

みく「ちよつと、アンタ。話はデュエルの後にして——なっ!??」

みく「——つつ!!よくも遠慮なしに殴ってくれたわね!!倍返しにしてやるっ!!」

ひよの「そうです!!やってやるのですみくさん!!私たちの分も!!」

乙女の身体に暴力を働いた罪は重いのです!!」

レナ「わ……元凶になったはずの新聞部部長さんまで敵に回ってる。」

レン「ついさつき俺を応援するとか言ってたけどな」

鈴木「仕方ないよレナちゃん。『女は禿げ親父の頭より薄っぺらな仲間意識と理不尽な程の自己愛で出来てる』って、昔お世話になった人が言ってたべ。」

レナ「あ…アハハ。どうしよう。レナさんその言葉に『違うよ』って言えない……。」

レン「因みに男は『5割以上の欲望と3割以下の見栄で生きている』だそうだ。」

レナ「…………。」

どんな人だったんだろうなあ。そう思いながら絶句したレナであつた。

みく「さあて!気を取り直してあたしのメインフェイズ。」

手札から三体の家臣を特殊召喚!!

『炎帝家臣』『邪帝家臣』『雷帝家臣』 守備表示。

炎帝家臣コストで怨邪帝ガイウスを手札から墓地へ送って、邪帝家臣コストで怨邪帝ガイウスを墓地から除外。そして相手の場に家臣トークンを特殊召喚。

これであたしのターンは終了よ。」

レンLP2200手札5枚

家臣トークン

みくLP2800手札2枚(『風帝ライザー』『???』)

家臣×3 DFF 1000

帝王の開岩 連撃の帝王

レン「さて、俺のターンだ」

レナ「キヤーー!!レン君頑張れーー!!」

レン「——!?!?!」

英心「ぬお?!?!なんじゃファミ妹その明らかにオーバーリアクションな声援は!?!」

レナ「だってほら!!このデュエル初めて、レン君の手札が6枚になっただよよ!」

後攻だって言うのにハンデスされたり、かと思ったらレン君も一切躊躇なく手札使い切ったし!!

とても安心して見ていられなかったデュエルが今やっと、まともな状態になったんだよ!!すごいよ!!」

レン&みく（あれ……?俺（あたし）らもしかしてデイスられてね??）

レナ「だからレン君がまともに攻撃できる初ターンだよ!!」

頑張れー!レン君ーー!!」

レン「うるせえ外野!!」

俺のターン、ドロー!」

改めて自身の手札を確認するレン。

そしてドローカード。

レン「……ん?確かエクストラデッキに…。墓地は……うん。家臣トークンって……だったな。」

みく「何よ?今までに無く慎重ね……。まあ、あたしの切り札を相手にするんだから、そのくらい慎重になって当然よね!なんとってコイツは——」

レン「手札から魔法カード発動!」

みく「って結局動くんかい!!」

レン「『龍の鏡』!」

龍の鏡（ドラゴンズ・ミラー）

自分のフィールド上または墓地から、融合モンスターカードによって決められたモンスターをゲームから除外し、ドラゴン族の融合モンスター1体を融合デッキから特殊召喚する。（この特殊召喚は融合召喚扱いとする）

みく「何よそれ、墓地に居るのってレッドアイズだけでしょ? どうやって融合なんて……。」

レン「ひよの、お前のカードを使わせてもらおう!」

ひよの「え? あれ?? だってみくさんが言うように融合素材が……」

レン「墓地の真紅眼の黒竜と、場の家臣トークンを融合する!!」

みく&ひよの「何その融合素材!?!」

レナ「ここで、レナさんのワンポイントレッスン!

『トークン』は、効果の有無に関わらず、通常モンスターとして扱われるのです!」

みく「それが何よ……?」

ひよの「マジですか!?! じゃあ、ダンディライオンとか御用達になるじゃないですか!!」

みく「アンタ達何言ってるの???」

レン「『紅き瞳の黒竜』よ、『輪廻を外れる命』と共に、全ての命の先を行く始祖と成れ!!」

融合召喚! 恐れるものは物言わぬ力『始祖竜ワイアーム』

始祖竜ワイアーム 星9

融合モンスター

闇属性 ドラゴン族

2700/2000

通常モンスター×2

このカードは融合召喚でしか特殊召喚できない。

①:「始祖竜ワイアーム」は自分フィールドに1体しか表側表示で存在できない。

②:このカードがモンスターゾーンに存在する限り、このカードは通常モンスター以外のモンスターとの戦闘では破壊されず、このカード以外のモンスターの効果を受けない。

ひよの「これこそ、総ての効果モンスターを無価値にするモンスターです!

まさかレンさんのデッキで召喚できるとは……」

レン「こいつは、アンタの全ての帝の効果も受けない！

これならアンタの切り札は怖くない。」

みく「こいつは……確か全国大会決勝でライアスが使ったモンスターカードだったわね。」

英心「ほほお…あやつ、思わぬ切り札を用意していたのだな。やりおる」

鈴木「こりや、部長さんかなりキツイんじゃない？」

手札ってあとはライザーくらいだろ？残りの一枚も多分モンスターだろうけど、三体のモンスターを速攻で召喚したところを見ると、バルバロスってところか？」

英心「ほむん！こうして悪の貧乳は成敗されたのだ!!フハハハハハ!!!」

みく「それはどうかしらね？」

英心&鈴木「何!?この状況でレンを倒せる切り札が有るとでも言うのか!？」

レン「オイこらテメエら、人のデュエルで勝手に死亡フラグ建設してんじやねえぞ！」

みく「さあ、どうするの?レン」

レン「……………」

レン（ワイアームにはモンスター効果が一切利かない。

その上でワイアームに対処するモンスターがいるとしたら、圧倒的な攻撃力か？

あるいは……くそつ、今ワイアームを失ったら、さすがに勝つのはキツイか……?)

レンの手札にはモンスターのカードは無い。

デュエル中からレッドアイズのカード以外を見せていないことから分かるように、手札事故をおこしていた。

ここでワイアームを失えば、後半には帝に手も足も出ない非耐性モンスターばかりで戦うことになるだろう。

今までのみくのプレイングから考えて、それは決して歓迎できる状況では無い。

レン（一応今の状態ではまだワイアームを倒せるカードはみくの場に存在していない。）

そして、手札からモンスターの効果が無効化する魔法・罠カードは、ここ数年で出たカードの中には無かったはず。）

昨夜徹夜でカードの知識を非効率に叩きこんだレンのライブラリーの中に、検索に引つかかるカードは無い。

攻撃しても問題は無い。しかし、藪をつつくことになるのではないかという懸念もある。

レン（……………どうする？）

レナ「にー……………」

みく「悩んでるわね…でも結果は同じよ！あたしがアイツを召喚すると決めた瞬間に、アンタの負けは決まったのよ！！でもそれは恥じることじゃないわ。光栄に思いなさい。あたしを本気にさせたこと！」

英心「おのれ貧乳め！悪あがきを！！」

鈴木「…………反撃の機会…捨てるか？レン君」

レン「俺は——」

ひよの「あーもうじれたい！！レンさん！やっちゃうのです！！ワイアームは無敵です！！」

レン「あ？」

ひよの「レンさんデュエルの前に言ってたじゃないですか！！

『勝っ！！』って！！

私あの言葉本気でかつこいって思っちゃったんですよ！？ここであなたがヘタレたら、私安い女みたいじゃないですかー！！」

レン「…………んな理不尽な……」

ひよの「責任とれー！！負けたら明日の一面あること無いことボロクソに書いてやるー！！バカー！！勝てー！！勝って下さいー！！」

レン「……………」

《いいかレン。女つてのは、女は禿げ親父の頭より薄っぺらな仲間意識と理不尽な程の自己愛で出来てるもんだ。》

《なんだよそれ!?すっげえ嫌な奴じゃん!》

《そうだな。けど、大変遺憾ながら、俺達男は、連中を機嫌良くしておく義務が有るんだ。》

《ええ〜!?何でだよ!そんな我儘なやつらを何で偉ぶらせておくんだよ!?!》

《ハハッ。ガキにはまだ難しいかもな。だが、俺達男だってそう褒められたもんじゃ無い。

男は5割以上の欲望と3割以下の見栄で生きているんだ。

》

《それ残り二割どこ行つたんだよ?》

《ああ、そいつはな……………》

レン「——残り二割は、男の欲望と見栄を5割以下に抑えてくれる女が出来た時に生まれる…………」戦うと言う意志”。最期はそれで全てが埋まる。だからそれまでなるべく女は機嫌よくさせておけ。だったな…フライヤー」

ひよの「はえ??」

鈴木「レン…!!」

レン「つたく、アイツの言葉はいつも最後に台無しだったな…………。

——バトルだ!!ワイアームで炎帝家臣に攻撃!!」

ひよの「それでこそレンさんです!!」

みく「覚悟は決めたつてわけね!!なら見なさい、あたしの最強のしもべ…大地の神の存在(すがた)を!!」

レナ「大地の神…………ってまさか!?!」

みく「三体の家臣を生贄に捧げる。」

鈴木「ちゃんとリリースつて言えよ。教育上よろしくない。訴えられるぞ」

みくが三体の家臣を生贄に捧げたその瞬間——。

ひよの「きやあ!?!」

英心「な、何じゃ!?!」

突如として、大地が揺れ始めた。その場にいた次第に地割れが起き、その内に木々は支えを失いその巨軀を地に伏せた。

鈴木「おっと、あつぶねえ!!」

オオオオ!!!!!!
』

オベリスクの巨神兵 星10

神属性 幻神獣族

4000 / 4000

このカードを通常召喚する場合、3体をリリースして召喚しなければならぬ。①：このカードの召喚は無効化されない。②：このカードの召喚成功時には、魔法・罠・モンスターの効果は発動できない。③：このカードは効果の対象にならない。④：自分フィールドのモンスター2体をリリースして発動できる。相手フィールドのモンスターを全て破壊する。この効果を発動するターン、このカードは攻撃宣言できない。⑤：このカードが特殊召喚されている場合、エンドフェイズに発動する。このカードを墓地へ送る。

みく「ワイアームに攻撃よ!!

神の鉄槌―ゴッドハンド・クラッシャー!!!」

オベリスク4000 VS ワイアーム2700

レンLP2200

レン「さあ、行くぜ!

リバーズカードオープン!! 『モンスターBOX』!!!」

モンスターBOX

永続罠

相手モンスターの攻撃宣言時、コイントスを1回行い裏表を当てる。当たった場合、その攻撃モンスターの攻撃力はバトルフェイズ終了時まで0になる。このカードのコントローラーは自分のスタンバイフェイズ毎に500ライフポイントを払う。または、500ライフポイント払わずにこのカードを破壊する。

英心「この男はギャンブル以外の戦術を知らんのか!?!」

レナ「でも、実際今これ以上のカードは無いよ!」

英心「……………」

レナ「いっけえー!にー!!」

レン「……………」

レナ「あれ？どうしたのにー？」

風に煽られて立つことが精一杯な中、強気を崩さなかったレンの表情が初めて青ざめている。

レナ「にー??」

レン「……………突風が強すぎてコイントスが出来ねえ…!!」

召喚時から吹き荒れる突風が邪魔して、まともにコインが投げられないでいるのだった。

少しずつ弱まってはいるが、まだトスするには辛い風だ。

英心「バカかおのれは!!!」

鈴木「うわー…神どころか地球まで敵に回ってるじゃん。レン君マ

ジ四面楚歌だわ〜」

ひよの「レンさん！神に向かって投げつけるのです!!」

レン「——それだ!!いっけええええええー!!表出ろおおおおお
おー!!」

ブンツ!!前代未聞のウィンドアップからの全力投球コイントスが、
神に挑んで行く。

だが…。

英心「そんなことしたら何処行くか分かんらんだろう!!この風向かい風であろうが!!——って、痛エ!!」

逆風に煽られて戻って来たコインが、英心の頭に直撃し、『裏』側で落ちた。

レン「くそっ!!徳の低い坊主のせいで裏目に出ちまった!!」

英心「拙僧の責か!?否、ギャンブルなどに仏が力を貸すものか!!」

レン「相手は神だろ!!異教徒との戦いくらい助力してくれたっていいだろ!」

レナ「レン君前ー!!神来てるー!!」

レナ「ああああああああああー!!??」

レンLP900

レン「くっそ…使えねえな仏!!」

英心「それ以上仏を侮辱するなら仏敵とみなすぞ貴様!!ってか泣くぞ!!」

レン「泣けよバカ野郎!!その涙で神が倒せるならな!!」

みく「フフフ…いつまで持つかしらねえ?そのワイアーム。カードを一枚伏せて、ターン終了。」

ひよの「うう…殴られたワイアームが痛々しいですう……。

レンさくん」

レン「涙目で見えるな涙目で!俺のターン、ドロー!」

みく(どうせあいつに出来ることなんて、モンスターBOXを維持しながらラッキーヒットを狙うだけ…。だったら攻撃しなければ勝手に自滅する――)

レン「スタンバイフェイズ、モンスターBOXを維持せずに、破壊する!」

みく「はれえ??」

レン「ワイアームを守備表示に変更。そして、カードを一枚伏せて、ターン終了。」

レナ(もし部長さんのリバースがモンスター効果無効カードだったら、ワイアームは倒される。

確かに維持コスト500は明暗を分けるかもしれない。でもLP900も400も普通は大きく変わらない。まして攻撃力4000の前じや尚更だし、可能性に賭けた方がまだマシな場面だって幾つもある。そんなことギャンブルデッキを使ってるに―自身が一番最初に考え着くはず。何でレン君は、可能性を潰したんだろう?あのリバースカードが、そこまでして使いたいカード……?でもだったら尚更ライフを払ってでも残した方が良い。まだ一枚も相手はサイクロンを使つてないんだし、囷として残しておく価値はあつたはず……。)みく「まあ、いいわ。維持しないならしないで、何の問題も無い!!あたしのターン、ドロー。オベリスクで攻撃!!」

英心「バカめ!ワイアームは守備表示だぞ。殴つてところで何の意味がある!

これだからパイオツに栄養が行かぬ愚かものは!!ハッハハハ!!」レナ「やっぱリアレが伏せてあるんだ!に―逃げて―!ワイアームが―!!最後の希望が―!!」

みく「さあワイアーム！そのハゲもろ共沈みなさい!!」

英心「誰がハゲじゃ!!ベリーショートじゃ!!」

みく「リバースカードオープン『帝王の熔撃』！

これでワイアームのモンスター効果を無効化する！」

英心「何!?それではワイアームが只のバナラモンスターになってしまうではないか!!

おのれ貧乳め!!余分な養分を頭に回す暇があつたら乳に回さぬか!!」

みく「フフフ…このデュエルが終わつたら、次はアンタの番よ。首を洗って待ってなさい…!!

ゴツドハンド・クラツシャー!!」

レン「……………」

神の拳に触れたワイアームは粒子レベルに粉碎され、跡形もなくなつてしまった。

ひよの「ああ…ワイアームが…レンさあん…ううう…」

ワイアームが破壊されたことで、ひよのは一層目に涙をためてレンを見つめた。

レン「だから恨めしそうな目で…」

ひよの「ワイアームの敵を取ってください…うう…。このまま負けたら在学中ずっとレンさんの悪評を一面に書き出してやるのですー!カッコつけて負けたカッコ悪い人ってレッテルを学校中に広めてやるのですう…!!」

レン「……………女つてのは本当に理不尽だ。」

ひよの「だから負けないでくださいー!ワイアームがいなくても、まだ勝つ方法はある筈ですう!」

レン「え…??」

レン（もしかしてコイツ、俺がワイアームを失って心が折れそうになつてると思ってるのか…?今までのつてこいつなりのエールだったのか…??）

不器用過ぎて引くわ…などと考えるレン。

ひよの『勝つ!!』って言ったレンさんの言葉を信じて、公平な立場

として見るべき試合にカードまで送っちゃったんです！ここで負けたら無様なのはあなただけじゃないのですう！

あなたの勝負には、二人分のプライドが掛ってるんですよ!!」

しかし、心で悪態を突きながらもその心は燃えていた。

レン「……………心配すんなよ、ひよの。」

ひよの「ふえ??」

レン「俺はまだ、負けちゃいない。そろそろ良い風だ。見てろよ。

リバーズカードオープン！『運命の分かれ道』

みく「そのカードは…」

英心「コイントスの結果次第で2000ポイントのライフを回復するカードか！

しかし、今外せば即負けじゃぞ?!」

鈴木「しかも、向こうさんはLP2800外しても負けじゃない。

これはあまり分の良い賭けじゃないべ?レン君」

レン「このままじゃ死ぬ。やつても勝ちじゃない。命を今日つなぐだけ。そんなギャンブルは幾らでもやって来た。別に珍しいことじゃない。コイントス——!」

みく「もう今日何回目かしらね。コイン弾くの。トス」

レン「そう言うなよ。俺なんて普通の人生送ってたら絶対しない回数弾いてんだ。今日ぐらい付き合えや。みく」

みく「これで最後だといいいけどね。もちろん、こんなカードの効果でライフを失うなんて許さない。

当然表を出してくれるでしょ?」

レン「その答えは、投げたコインだけが知る」

レナ「にー…!」

ひよの「うう〜!」

二人の少女は祈るように手を合わせた。表か裏か。そのどちらかで勝敗すら左右する。

このデュエルは、普通のデュエルよりも、見ている方がドキドキするデュエルだ。

フサツ。

草の生えた僅かな茂みに落ちたコインは、双方異なる面を向けていた。

みく「ふん。ライフなんてもう只の飾りよ！」

レン「当然、俺は勝つ!!」

みくのコインは裏、レンのコインは表だった。

レナ&ひよの「やったー!!!」

祈りをささげた少女二人は手を取り合って喜んだ。

みくLP800

レンLP2900

みく「ターンエンド！」

レン「……手札はそろった。ベットは用意した。あとは、このドローに賭ける！紅き瞳の可能性に!!」

ドロー!!!」

みく「まさかアンタ、レッドアイズを三枚積んでるわけ？よくやるわね。ギャンブルカードにマイナーカード。何でそんなカードばかりでデッキ組んでるの？」

レン「……分からないな」

みく「はあ!?自分で組んだデッキでじゃない!!分からないってどういうことよ!?!」

レン「カードそのものには確かに強弱が有るんだろう。俺も『ツイスター』を使うくらいなら『サイクロン』を入れるよ。だが、可能性に賭けた時、勝った方がより良い状況を生むカードが有るのなら、俺はそいつを信じたい。」

埋もれた凡夫や非才でも、這い上がれば生まれる可能性があるってこと、俺は教えてもらったから。

分からないのは、人が決めた価値観でカードを決めることだ！使いもせずに弱いとなじり、笑い物にすることだ!!」

レナ「おおく!!レン君カッコいい!!」

ひよの「……素敵なのです」

みく「ご立派ね！でも残念。先輩として教えてあげるわ!!いくら使いこなしても、使えないカードってのは出てくるのよ!!デュエリスト

の努力と実力では、どうにも出来ない限界がある!!それが事実よ!!」
レン「だつたらセンパイに教えてやるぜ。カードにはそのカードに
相応しい、最高のデツキ構築が必ずあるって。

この『真紅眼の黒竜』でな!!」

みく「——つつ?!三枚目!!」

でも召喚出来なきや意味が無いわ!!」

レン「手札から魔法カード発動!!『スター・ブラスト』!!!」

スター・ブラスト

通常魔法

500の倍数のライフポイントを払って発動できる。自分の手札
または自分フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選
び、そのモンスターレベルをエンドフェイズ時まで、払ったライフ
ポイント500ポイントにつき1つ下げる。

レナ「これでライフを1500払えば、レッドアイズのレベルは4
で召喚できる!」

レン「俺はライフを2500支払う!!」

全員「何で!?!」

レンLP400

レン「これで準備は整った。

——紅き瞳の黒竜よ、主と共に力を奮い、神を砕く力と成れ!!」

召喚!真紅眼の黒竜(レッドアイズ・ブラックドラゴン)!!」

英心「何をやつとるんじゃあやつは!?!何故あのような無意味な過払
いを!?!」

レナ「まさか…レン君!!」

レン「ライフは投げ捨てるもの。だそうだな、みく」

みく「ええ、そうよ。」

レン「俺そいつはやつぱり勿体ないぜ。俺にとってライフは、ギヤ
ブルのための軍資金みたいなものらしいからよ。投げ捨てちゃな
らねえ。手札から『下剋上の首飾り』を発動!」

下剋上の首飾り

装備魔法

みくLP 0

この攻撃が決まった瞬間、レン・ファムグリットの勝利が決定した
.....。

遊戯王 ～Fake Origin～5

生徒A「なあ、昨日の地震って何だったんだ？震源地が分かって無いらしいじゃん」

生徒B「アレもう明らか大震災並みの揺れだったのに、何故か家で話したらさ、地震なんて無かったってお母さん言うんだよねー」

生徒C「でゆえる部の部長さー、まるで知ってたみたいなたイミングで俺ら体育館から避難させたよなー」

生徒たち「「謎だよなー」」

昨日あれだけ大々的に行われたでゆえる部部長、坂上みくと、新入生レン・ファムグリットのデュエルなどどこ吹く風で、神の召喚時に起こった災害レベルの召喚余波の影響により被害を受けた学園校舎を揺らした超局所的大震災の話題で持ちきりだった。それと言うのも――

先生「ほらみんなー話してないで片づけしろー」

教室には割れたガラスの破片が辺りかまわず散らばり、壁や黒板にはひびが入り、どうこうしても本日中に授業が行えない状態になっていたせいだろう。とぼっちりを受けて後片付けをさせられている生徒からしたら、愚痴の一つも言わずにはいられまい。

生徒D「せんせー。やっぱり生徒が震災の片づけさせられるのはおかしいと思いまーす。」

生徒E「つてか業者呼ぼうぜー。ここ進学校だろー？こんなことさせといて良いわけー??」

先生「仕方無いんだ。だってどういうわけか世間的には地震なんて起こって無かったことになっているんだもの。そんな状態で業者なんざ呼んだらクーデター疑われるレベルだぞこれ。生徒が暴徒と化したとか新聞の一面飾るぞ？下手したらお前らの進学に響くぞ？良いのか？良いのか？本当にいいのかー??」

生徒A「キタナイ。大人つてキタナイ…」

生徒F「ちよつと月海くん、寝てないでどいてよー掃除できないじゃない」

生徒G「アレ？　そういえば月海の隣の席のやつい無くね？」

そのころ、現場にいた目撃者の1人は。

飛娘「……………」

レン「……………」

店長「おーい、飛娘ちゃん。そろそろ休憩行つていいよー。新しく出来た彼氏とお昼行つてきなよ」

飛娘「くっくっく!!!店長!何度も言ってるアル。違うですよ!!この人が何でここにいいのかワタシもさっぱり分からないヨ!!助けてほしいアル!!」

カードショップATMのアルバイトスタッフこと、王 飛娘(ワン フェイニャン)は、幼いころに強面の男達に拉致されて日本に来た中国人である。その経緯から目つきの悪い男に対して恐怖心を持つようになってしまった。だと言うのに、一昨日初めて店に来てからと言うもの、午後4時過ぎ位になると、この赤髪の少年―レン・ファミグリットは店に来る。因みに今は正午。思いつきり学校の時間なのだが…。普段なら自分の苦手なこの男が来る時間ではないため、すっかり気を抜いていた飛娘は突然の『よお、中国』と挨拶して来たレンの顔を見た瞬間、思わず泣きそうになってしまったほどである。

飛娘「だ、だいたいアナタ!何でいつもいつも店に来るアル!?昨日なんて無理やり自転車乗せられて、またどこかの国に拉致されるかと本気で思ったアルよ!」

レン「まあ、色々あつたんだ。聞きたいか？」

飛娘「もうこの際だから聞かせてもらうアル!!いつまでもワタシやられてばかりじゃ無いネ!!追い詰められたら窮鼠でも猫を噛むアル!!ウガー!!」

レン「よし、じゃあ腹も減つたしまずは飯行くか。ラーメンと肉まんどっちがいい?中国」

飛娘「じゃあまずはその中国呼びから改めるアル!ワタシ、王 飛娘ネ!!」

レン「そうだな、俺は今日ハンバーガーの気分だなー。毛須バー

ガーにでも行くかー中国」

飛娘「無視アルか!!ワタシの言ってること聞いてないアルか!!しかもラーメンと肉まんって言ってたのに全然違う物出てきたゾ!どんだけ気分屋アルか!言葉のキャッチボールをするヨロシ!!」

レン「んじやレッツゴー」

飛娘「ま、待つネ、ワタシエプロン着たままアルよ!」

レン「いいじゃねえの。料理するならエプロンだって着けるし。あ、アンタに昼飯作ってもらうのもアリか」

飛娘「言ってることが変わり過ぎるアル!!おまえ実は情緒不安定な人だろ!!」

店長「いつてらっしやーい」

飛娘「…………アレ??」

レン「何だ?」

道中、レンが気ままに発言し、飛娘がツツコむ漫才のような会話をしている内に、レンが『よし、ここにしよう』と適当入った店が本日の昼食の場所に決まった。それ自体は別に文句はなかった。飛娘は好き嫌いも無く何でも食べる良い子だ。エレベーターで展望室まで上り、高級感溢れる入口を潜り、ウェイターに椅子を引いてもらい、ワイングラスのようなコップに水を注いでもらい、食器の横と縦にフォークとナイフとスプーンが整列しているテーブル。

高級感溢れる内装ながら他に一切の客はおらず、テーブルには「本日貸し切り」と書いた物が置いてある。更には

飛娘「…………何アルか??このメニューに書いてある金額…」

0が四つほど付いた一品で万単位の値段が書かれたメニューを見て、ようやく飛娘は、ここが超高額のレストランであることに気が付いた。少なくとも昼食のために高校生同士で来るような場所では無い。

飛娘「ちよ、ちよつとアナタ、ここ何処アル?!

ウェイターに聞こえないように小声でレンにたずねる。

レン「は?飯屋だろ」

しかしレンはそんなことお構いなしでメニューを見ている。値段を見ていないのか？そんなはずが無い。どういうことなのだろうか？飛娘は訳が分からなかった。レンの目にはこの場所が、街の寂びれた定食屋にでも映っているのだろうか？

レン「…決まったのか？」

飛娘「何言ってるアルか!?!こんな高いところでご飯食べるお金なんて持ってないヨ!!」

レン「……ん、そうか。そーいやアンタいつもバイトしてるもんな。苦学生か。ま、心配するな。金つてのは常に、金持ちの所にあるものだ。」

飛娘「へ…??」

ぽかーんとする飛娘をよそに、腹が減ってとりあえずさっさと食事がしたいレンは、ウェイターを呼んで

『一番良いヤツを頼む。5人分』

と言つてコースを決めた。

注文を決めたレンはくわあくと欠伸をして背伸びする。どう見てもテーブルマナーにうるさそうな店なのだが、誰も彼もスルーだった。

レン「あ、そーいやー、俺は今日学校休みなんだが、アンタは何であんな時間にバイトしてたんだ？」

飛娘「え…?ああ、ワタシ夜間の学校行ってるカラ…」

レン「ふーん。学校楽しいか？友達はあるのか？」

飛娘「……なんかお父さんと話してるみたいネ。あんまり楽しくは無いアル。友達も出来ないし。でも、ワタシ人より勉強しないと就職も出来ないネ。訳ありの外人ダカラ…」

レン「そーか。苦労してるんだな」

その心のこもって無い適当な言葉に、少しだけムっとし飛娘は、ちよつとだけ嫌味を言つてみた。

飛娘「そうアルよ。ワタシ苦労してるアル。昼間からこんな高いレストランでご飯食べられるボンボンとは違うネ。」

その言葉に、レンは特に気分も害さずに言う。

レン「ファミグリット家は一般の中流階級の一家だよ。俺の金は、ガキの頃命がけで勝ち取った泡銭だ。レナの親父さんから小遣い貰ってないしな。レナも大概貯金をやりくりしてるみたいだが」

飛娘「レナ『の』親父さん：??」

レン「ああ。レナの親父。エックス・ファミグリット。趣味は愛娘とデートすること。座右の銘は娘大好き。」

飛娘「アナタ達、兄妹じゃ無かったアルか？」

レン「ああ。義兄妹だよ。もつとも俺は拾われた側だがな」

飛娘「……複雑な家庭の事情アルか」

レンのお察し下さい的な発言は、あまり踏み込んで聞いていいものではないように思えた。

だがレンはさらつと話し出す。

レン「全然。ざっくり言えば『父親がギャンブルで破産して売られちまった俺は、ギャンブルで成り上がり、仲間を作りながら冒険して、売られた母さんを助けるために旅をしていた。長い長い冒険の果て、ようやく母を見つけたはいいけど、実は親父は俺が邪魔だったから、一芝居打って俺を売っぱらって金貰ってて、母ちゃんもグルだったから、これを機に独り立ちしようとした結果失敗して拾われた』ってだけだから。」

飛娘「……あの、ゴメンナサイ、長くて良く分らなかったアル……」

レン「母を訪ねて三千里したら実は母親に捨てられていた。」

飛娘「……………」

さらつとんでもない身の上話を聞かされてしまった飛娘は、背筋が凍るのを感じた。彼女自身も、拉致されて母校に帰国出来ず家族にも会えず、割りと常識外れに不幸な方だが、レンのそれは、更に常軌を逸している。そして、何よりも恐ろしいのは、そんな当の本人が、それを他人事のように平然と語っているだ。少なくとも飛娘から観ていたレンは、その過去に何か感情を抱いているようには全く見えなかった。本に書いてあったことを音読でもしているかのように、淡々としている。

飛娘「あの…っ」

何を言ったら良いか分からないまま口を開いた。その時、

みく「あら、レン。先に来てるなんて、いい心がけじゃない。誰よりも早く来ているなんて、部下の鏡だわ。」

昨日レンと戦った少女が、その場に現れた。

レン「やつと来たのか。人を呼びつけておいて遅刻してしかもその態度は何事だ。俺がアンタをペットとして仕付けるべきか？」

みく「何よ、細かいこと気にするとモテないわよ？」

全く悪びれないみくに対して無言になるレン。

レン「……………」

みく「……………あー…ま、まあ？あたしが悪い所は、ゴメンだけど？べ、別にモテなくてもアンタの居場所はおあたしの部につくってあげるわ。大丈夫よアンタ見た目は良い方だからさ」

レン「……………」

みく「……………つつ分かったわよ!!ごめんなさい！呼びつけておいて遅刻したあたしが悪かったですっ。」

レン「……………」

みく「……………だ、だからそうやって不機嫌そうに睨むのもう止めてよお……………ほ、本気で怖いんだから…」

レン「……………アンタは人の上に立つ前に、人に対するある程度の礼節と敬意を知るべきだ。」

みく「……………」

レン「返事は？」

みく「……………はい。」

今のみくの姿を見て、実は彼女の方が先輩だと分かる人はいるまい。年下にこれでもかと言うほど更正させられている…しかも説教までされて小さくなっている彼女を……………。

パシャツ。

突然シャッター音が鳴った。

ひよの「おおく高飛車で有名なあの坂上みくさんが男性に手玉に取られています！これは人目に付きそうな記事が書けそうです！タイ

トルは「そうですね〜。『でゆるる部の部長、年下ご主人様にタジタジ。メイド部への改名は秒読み!?〜イケないみくを、もつと叱って下さい。ご主人様っ!!〜』で行きましょう」

みく「ちよつと何撮ってんのよ!!消しなさいよソレ!!」

ひよの「もちろんお断りします〜。記者の報道の自由と権利は、永遠に不滅!正義は我に在り!!ですっ」

ひよのは啖呵を切ると脱兎の如く逃げ出す。

みくは追いかけるが追いつかない。すさまじく速い。しかも小さいから小回りも利いてよけいに辛い。

レン「……どうでもいいが、凄まじいAV臭がするタイトルだな。本当に学校新聞か。実は裏ビデオのタイトルなんじゃね?」

そのAVのタイトルに主役級の扱いで記事にされそうになっていると言うのに、レンは完全に他人ごとである。

みく「変なこと言っていないで手伝いなさいよ!もしこれが出たらアンタも変な目で見られるのよ。いいの!」

レン「お!……人の目とか興味ないな。それでアンタが危ない趣味に目覚めたってことにすれば、丸く収まるだろ。」

レン(……と言うか、今の写真でそこまで想像出来るやつがいたら、そいつこそ変態の猛者だろ。ただ俯いてるだけの写真だぞ)

レン本人の目つきが悪いことが坂上みくが手玉に取られている感が出ていることは全く気が付いていないレンなのだった。

ひよの「よっし!!レンさんからもお許しが出ました。これで天下御免で記事が書けますよー!!」

みく「あたしの許しは出てないでしょ!!」

ひよの「有名人に肖像権はないのです!」

みく「ふざけんなあー!!んもうー!!レン!!お願いだから手伝ってよ!!もう本当にムカつくー!!レンー!!」

レン「……さつきから何でアンタは俺にばかり助けを求めてくるんだ。ハア……面倒くせえ。」

レンはため息を吐くと、心底めんどくさそうに腰を上げた。

ひよの「むむっ！レンさんが敵に回りますか。しかし私は挫けませんよ！報道の自由のために、私は最後まで戦います！」

レン「レナ、木刀でカメラごとフィルムを叩き壊せ。」

ひよの「……………え？」

名前を呼ばれると、室内にはみく、ひよのの入室と同タイミングで入室したレナがレンの方を見た。

レナ「おくレナさんすっかりハブられてるかと思ったのに必殺仕事人役だったんだ。……………では、いざ参る！」

どこから出したのか分からない小太刀サイズの木刀を腰の位置に構え、突進するように腰を低くした。

ひよの「ちよ?!待ってくださいレナさん。降参です!!って言うか良いんですか!?レナさんって確か剣道の有段者ですよね!?一般市民に剣向けていいんですか!!」

レナ「うくん……………ダメかな？」

レン「何言ってるんだレナ。犯罪つてのは捕まるまではセーフなんだよ。最悪『時効』つてのがあるだろ。」

レナ「おお！そうか、にー頭良い！それじゃあ、改めて…」

ひよの「……………こういう考えの人がいるから、わたしは『時効』つて廃止した方がいいと思いましたが、まる。」

レナ「必殺奥義！スターライト・セイバー!!」

ひよの「きいやあああああああー!!??」

レナが振りぬいた木刀は、どういう原理かカメラの中のフィルムだけを一刀両断したのであつたとき。

飛娘「なにアル？この状況……………?!」

遊戯王 ｛ Fake Origin ｝ 6

ひよの「うう…せつかくのスクープが真つ二つになっちゃいました…。」

レナ「うーん…本当は最後に撮った写真の所だけ上手く消しちゃうつもりだったんだけど…ごめんね、ひよのちゃん」

みく「いいのよ。他にもどんな写真があつたか分かつたもんじゃないんだから。世のため人のためよ。」

レン「つーかさらつと神業しようとしてたんだな、レナ。いつものことだが、練習くらいしてからやれよ」

全員好き放題話しながら仲よさ気に話し続ける様に、1人ポツンとしていた飛娘がようやく口を開いた。

飛娘「ちよ、ちよつと待ってほしいアル！レナ・ファムグリット、ここにいる人たちは誰アルか!?説明してほしいアル!!ワタシさっぱり分からないヨ!!」

レナ「あれ?ここにいるってことは、にーが説明してくれたんじゃないの?」

飛娘「ワタシ何も聞いてないヨ!!」

レナ「……にー?」

むくつと唸りながら、レンを非難の目で見るレナ。

レン「うむ。中国に会いにカードショップまで行つたはいいが、何で行つたのか目的を忘れちまつてそのまま飯に誘つたら、たまたま待ち合わせ場所に来ていたんだ。運命って凄いな、ハハッ。」

レナ「うう…にーの鳥頭く。ごめんね、飛娘ちゃん。ちゃんと説明するから。あと、にー、今晚はおしおきとしてにーの嫌いな梅干しの料理です。」

レン「それ、俺が外で食べば問題無くね?」

レナ「じゃあ、にーがちゃんと食べるまで、レナさんもご飯抜きです。伝え忘れたのはレナがにーに頼んだのも悪かったから、レナも一緒に反省します。」

レン「……。」

レンは冷や汗を掻いて黙った。自分に対する火の粉は幾らでも逃げられるが、自分の行動で他人が不利益をこうむるのは、レンのポリシーに反することだ。こうなるともう、従うより他に無い。レンを知り尽くしたレナならではのお仕置きだった。

レン「……………せめて、少しでも小さいのにしてくれ…」

負けを認めたレンはお手上げとポーズを取った。

レナ「うん。分かったよ、にー」

ひよの「おおく人をおちよくるのが得意なレンさんも、妹には勝てないんですねえ！」

レン「……………(グリグリグリ)」

ひよの「ひゃあああああああー!??!痛いです、痛いですううううー!!頭グリグリしないで下さいー!!圧力はそうでもないのに的確にツボを突いてきて洒落にならない痛さですううううー」

飛娘「ずいぶん元気な子どもアルねえ」

ひよの「子ども!?失礼ですねえ!!」

子供扱いされた少女は、レンの両腕の拘束を外して(外してもらって)小さなカラダでめいっぱい胸を張って自己紹介する。

ひよの「私は文月 ひよの。坂上学園に通う新聞部の美少女部長、二年生!!ですっ」

レナ・飛娘「二年生!?!」

レナ「そうだったのかあ…」

飛娘「し、信じられないアル…」

ひよの「まったく、失礼ですねえ!!プンスかプンスか!!私はちよくつと背が低いだけで、胸はこの通り立派な大人の女性なのですよ!」

そう言っつて子供のような小さなカラダとは相反する大人のような豊かな胸部を両腕で寄せて上げて強調して見せる。確かにそこには、自分で言うだけの膨らみがあった。

飛娘「うう…ま、まさかこんな所にも敵がいるとは思わなかったアル!!」

レナ「にーは知ってたの？」

レン「ああ。知ってた。合法ロリだろ。部活動は違法のようだが。」
レナ「なるほどく。ああ、そう言えばレナ達って、お互いに自己紹介もしてなかったね。」

飛娘「ウソだあ……ありえないアル」

お互い良く知らない間柄とは思えない弾け方をしていたこのメンツが、実は出会って2・3日。信じられる者がどの位いるのだろうか。

みく「そうね。とりあえずきちんと自己紹介しましょうか。」

これから『長い付き合い』になるかもしれないし」

飛娘「何の話アル…?」

何で今日初めて会ったばかりで長い付き合いになることになるのか？その理由が分からなかった。

すると、横にいたレナからこっそりと耳打ちされる。

レナ「……この人は、オベリスクの所持者よ」

そう語るレナの目は、少しだけ真剣なモノだった。

飛娘「……分かったネ。」

その一言だけで、両者の会話は終了し、そして全てを理解した。

みく「じゃあ、まずはあたしからね。あたしの名前は坂上 みく。坂上学園の理事長の孫で、二年生の生徒。新設したデュエルモンスターズの研究会活動をする部活、でゆるる部の部長をしているわ。今日は、ある報告をするために、この集まりを開いた主催者よ。ここは坂上の分家が経営するレストランで、貸切にしているの。だから、ここでの会話は誰にも聞こえない。つまり他言無用であるということをお忘れなで。」

みくはそう言いながら、レンとひよの方を見た。

ひよの「改めまして、文月 ひよのです。同じく二年生です。自己紹介はさつき流れでやったので省きます。」

言い終わると、隣にいたレンに目配せする。

レン「……レン・ファムグリット。この中じゃ多分一番全員と接点があることだし、俺がどうという人間かは大体分かるだろう。次」

レナ「……レナ・ファムグリットです。レン・ファムグリットとは、義理の兄妹です。」

その発言に、レン以外の三人がぎよつとした。双子にしては似ているとは言い難いが、それでも実際に聞くと驚きがある。

レナ「剣道で女子中学全国大会の優勝記録があります。……『七皇』の1人、NO. 2としてこの集いに参席するものです。」

レン「『七皇』……?」

飛娘「王 飛娘（ワン フェイニヤン）ヨ。カードショップでアルバイトしながら、夜間の学校行ってるネ。同じく『七皇』の1人、NO. 6として、参席スルヨ。」

レンが分からないまま、レナと同じく『七皇』を名乗る飛娘。

みく「……レン。あんたは『七皇』について、何も知らないの?」

レン「知らん。」

みく「そう、ならまずはこちらで私たちの話を聞いていて。」

レン「ハブですかそうですか。」

レン（察するに、ひよのも何が起こっているのかは分かっているよ。うだしな。ハブか……寂しい。）

みく「では、まずあたしから報告します。『三幻神』の1柱、『オベリスクの巨神兵』を、一般人とのデュエルで召喚しました。被害地は、我が坂上学園の敷地内です。」

飛娘「とんでもないことしてくれたアル。いくら既に神の力が封じられているとはいえ、現状オベリスクの巨神兵は、『三幻神』の中では最強クラスの力を取り戻して来ているカードアル。弾みで覚醒なんかしようものなら、世界また滅ぶアルよ!!」

レナ「落ち着いて、飛娘ちゃん。問題はそこじゃない。そもそも、何故あなたが持っているの?そのカードを」

みく「拾ったのよ。私がでゅえる部を立ち上げる前に。中々強そうだったから、デッキに入れていたの。あたしなら操れると思って。」

飛娘「バカアルね。そんな気持ちで『三幻神』を使って。おかげであなたは神の怒りに触れることになったアル。」

レン「……神の怒り?」

ひよの「レンさんもみましたよね？オベリスクの召喚で、大地が割れたのを。」

レン「ああ。見た。」

ひよの「あれは、選ばれたデュエリスト以外が、神を召喚すると起こる、地球の崩壊現象なんだそうです。」

レン「崩壊現象ねえ…」

レナ「今回、この集まりが開かれたのは、『三幻神』の存在が再び力を取り戻してしまっているかどうかを確認するためなの。そして、その結果次第で二人に安心してほしかったの。もう二度と、『大神災』なんて起こらないって。」

ひよの「……つつ。怖いですね、またあんなことが起きるかもしれないなんて思ったら。」

レン「……。」

飛娘「だから、今回ワタシ達が呼ばれたネ。オベリスクが覚醒してないかを、見定めるために。デュエルで」

レナ「もつとも、間置かずに召喚すれば、それこそオベリスクを覚醒させることになるかもしれないから、少し間を置いて、ね。」

みく「ええ、分かったわ。面倒掛けるわね。」

レナ「そうですね。最初にオベリスクを見た時には、一瞬デュエルを中止させようかと思いましたが。それだけ危険なカードなんです。

本当なら、私が預かりたいところなんです。残念ながら、現在はそれが難しい立場なんです。」

飛娘「ワタシには、そもそも神を従えるだけの力が無いネ。

不安だけれど、貴女に持たせておく以外に無いアル。」

レン「……。」

飛娘「身勝手のせめてもの償いとして、責任持って保管しておいて下さいネ」

みく「ええ。分かったわ。」

レン「ちよつと待てよ、中国」

飛娘「何アルか？」

レン「さつきから全く状況が掴めないが、要はそのオベリスクが元

凶なんだろう？」

飛娘「元凶とはちよつと違うアル。でも、その一因であることは間違いないネ。というか、貴方もしかして、『三幻神』のカードのこと——」

レン「だったら破っちまえばどうだ？そんな物騒なもんならよ」

レナ「——それはダメっ!!」

レンの提案を慌てて否定するレナ。その表情は、これまでレンが見たことが無いほどに真剣で、焦っていた。

レナ「お願いだから、間違ってもそんなことしないで!!」

レン「何でさ？」

レナ「なんでも!!にー、お願いだから約束して。絶対に『三幻神』のカードを破ったり燃やしたりしようとしないうで!!過去にやろうとして、死んじやった人が何人もいるのっ!!だから……!!」

レン「分かった。約束する。だから取り乱すな。アンタらしくもない。」

レンを必死に止めるレナの目には、涙が浮かび、瞳には大切なものを失うかもしれないことに対する怯えが浮かび、両手はレンの両腕を痛いくらいに掴んでいた。まるで意図せず自殺しようとしている人間を止めようとするかのように。

飛娘「……………」

みく「……………」

ひよの「……………」

ちなみに傍から見ると生き別れる寸前の恋人同士のように見えなくもなかった。

みく「……………義理の妹ってことはさ……」

ひよの「ええ。結婚も出来ますし子どもだって出来ちゃいますね！お似合いです！」

飛娘「レナ・ファムグリットは昔からこういう、目つきの悪い不良みたいな男が好みだったアル。」

ひよの「その話詳しくお願いします!!」

レナ「あ……ゴホン。まあ、そんなわけで、とりあえず様子を見て、

いつデュエルするか決めるってことで！」
ひよの「あく誤魔化しました。」

話がとりあえずのひと段落を迎えたところで、コースの前菜が運ばれてきた。

みく「あら？料理注文したの？」

レン「ああ。腹減ったし。全員分。」

みく「もう、誰が払うと思ってるのよ…」

レン「？俺だろ」

みく「え？」

何を当然のことをと云わんばかりに言い切るとテーブルに座る。

レン「女4人に男1人なら、俺が払わずに誰が払うんだ？国か？ダメだな。高校生が高級レストランでバカみたいに飲み食いする金を血税で賄いまーすとか、殺されても文句言えねえな。」

みく「い、いやあたしが払うわよ!!そもそもここを選んだのだって、勢いで迷惑かけちゃったあんたにせめてものお詫びがしたくて…じゃなくて!!そう!!未来の部員の活躍の前報酬なんだから!」

レン「俺は入るつもりは無いぞ。第一俺勝っただろうが。何だかわからんが、ついでにオベリスクも倒してアンタのケツも拭いてやったわけだし。」

みく「いや、あの…。だから、えつと…。うう…。くくくッツツ!!じゃあもういつそそのお礼でもいいわよ!!ものすつごく不本意ではあるけど…。」

レン「そんなヤケクソな礼、聞いたことねえが…まあ、いや。素直になれないツンデレなりに頑張ったんだろう。仕方ないから驕らせてやろう。」

みく「その上から目線ムカつくー!!っていうかデレて無いから!!ただのお礼とお詫びだから!」

レン「ああ、それがいい。そうしておけ。俺には生涯1人と決めた嫁がいるからな。惚れられても傷つけちまうだけだ。」

みく「誰がアンタみたいな人殺してそうな目した男に惚れるかああ

あああー!!!

レン「ハッハッハ。ツンデレのテレ隠しの絶叫はいいな。最高の酒の肴だ。」

ひよの「わあくこのお料理美味しいですねー」

飛娘「な、何て贅沢なものが……ゆ、夢のようアル……」

レナ「にー。昼間から飲んで良かったの？バイクは？」

レン「今日は歩きだ。問題無い。」

みく「………未成年が飲酒は問題じゃないかしら……？」

レン「何だ、アンタ普段あんなに偉そうにしてて酒の一つも飲めないのか？まあ、いいことだ。お酒は二十歳になってからだぞ。」

ひよの「うわあ、現行犯が何かほざいてます〜」

みく「………負けるもんか。(ボソツ)」

お酒くらい飲めるわよ！パーティーの時とか、偉い人とお話する時とかちよつと口に含むくらいするもん!!」

レン「ほう、なら一緒にやるか？」

みく「望むところよ！今度は負けないから！ウエイター。白ワインを持ってきて。」

レン「俺はワイルドターキー。ボトルごと二・三本。」

レナ「あ、一本にしてください。帰る時大変なのレナなんだからね」

レン「む、そうか……。」

ひよの「もう既に奥さんみたいですわ〜」

飛娘「けつきよく、騒がしいのは変わらないアルね。あく美味しいヨ。」

途中、良く分らない話をされながらも、結局勢いで誤魔化したまま、五人は料理を満喫していった。

遊戯王　　＼ Fake Origin 　　＼ 7

飛娘「…話って何アルか、レンさん。」

レストランでの食事と酒を満喫した一行は、それぞれ学校、家、店など帰路に着いていた。レン・ファムグリットは、連れ出した責任としてしっかり送り届けると言って、王　飛娘と一緒に歩いていた。しかし、目的は他にもある。あの時、みんなの前では聞けなかったことだ。

レン「ああ。いくつか教えて欲しいんだ。たとえば、『大神災』とか『七皇』って、何なんだ？」

飛娘「呆れた人アルね。レンさんは。『大神災』は、六年前に起こった世界的な大災害のことアルよ。干ばつ、落雷、地割れ。それぞれ三柱の神が引き起こした災害は、半年も続いて、地球最後を予感させるほど凄まじいものだったネ。もちろん覚えているハズアル。」

レン「いいや、全然。」

飛娘「それは絶対おかしいアル！大神災の名前を知らないだけならともかく、あの大災害を覚えていないなんて、経験していない人間くらしいものアル。」

経験して無いっていうなら、もう異世界にでも居たとしか言いようが無いアル。そのくらい世界規模のものだったアルよ？」

レン「ふーん。つまり要約すると『大神災』とは『三幻神』によって引き起こされた、世界規模の超異常気象ってことか。」

飛娘「…そういうことアル。しかし、本当に何で知らないアルか？」

レン「俺にとって“過去”ってのは、目標乗り越えた後に落ちてる残骸みたいなもんだからな。乗り越えちまったらその次の未来もくひょうに向かつて行くだろう？だから覚えてないんだ。多分。きっと。」

飛娘「……………変な人。」

レン「よく言われる。さて、大神災は便宜上簡単に聞いたが、こつからは本番だ。アンタと、そしてレナが属している『七皇』についてだ。」

飛娘「それは…」

レン「おい、中国。まず最初に一つ言っておく。」

飛娘「何アルか？あと中国って呼ぶの止めてほしい——」

レン「何か一つでも隠フカそうとしたら全裸にひん剥くぞ」

飛娘「ひいつ!??や、やっぱりヤンキーだったアルか!!」

レン「さあ、言え。人生で二度目の怖い思いをしたくなけりやな。今なら洩れなくアメをやる。ほら」

飛娘「う…うう。絶対誰にも秘密アルよ??約束してくれるアルか？」

レン「ああ。考えておく。ほら、指きりだ」

飛娘「……………」

差し出された小指を見て、怯えた表情が和らぎ少しだけ笑顔になった飛娘は、指切りをして、レンを信じてみることにした。

飛娘「…………分かったある。でも、ワタシの権限では言えないこともアルある。だから、そこだけは、『言えない』って言うアル。それだけは、許してほしいネ。レン」

レン「…………分かった。」

飛娘「あと、もうひとつだけ」

レン「条件が多いな。オイ…」

飛娘「——ワタシのこと、ちゃんと名前と呼んでください。レン」

レン「気が向いたら呼んでやるよ中国」

飛娘「…………やっぱりアナタ、嫌いアル。」

その頃、飛娘のバイト先では…………。

店長「…………どこまでお昼行つたんだろう飛娘ちゃん。…………休憩時間、過ぎてるんだけどなあ…………。」

飛娘「分かったアル。じゃあこうしましょう。」

歩みを止めないままカードショップへ向かう途中、飛娘は一つ提案をした。飛娘『七皇』のこと、知りたかったら、ワタシとデュエルするヨロシ」

笑顔でそう言うと、デュエルディスクを構える飛娘。レンも利き手

を上げて…。

レン「え、ヤダ。何でそんな回りくどいこと」

「そのまま耳を掻き始めた。」

飛娘「ええ…アナタそれでもデュエリストか？剣士は言いたいことは剣で語り、デュエリストはカードで語るアルよ！」

レン「…拳で語るつてのは聞いたことあるが、カードで語る……あ、中二病か。大丈夫だぞ。俺にも精霊は見える。最近枕元で恨み事を呟いてくる女がいてな」

飛娘「それ精霊じゃないアル！悪霊ネ!!つて言うかアナタそのヒトに何したアル!!」

レン「ああ。一昨日の夜にな。何か物音が聞こえて、すう…つと目を覚ますんだよ。傍目には目が開いてるつて分からないくらいの大きさで。すると、頭の上の方に…」。『よくも晩御飯を残したなあ…自信作だったのにい〜。ハンバーグ好きだつて言ったじゃないいいい』つて、金髪の女が恨めしそうに座ってるから見なかったことにして二度寝したんだ。」

飛娘「それレナのことアルよね?!間違はなくレナのことアル!!」

レン「そんなはずは無い。その女は髪短めだったし、第一俺はあいつの作ったハンバーグを残した記憶など……あ」

ふと何かを思い出したかのように表情を変えたレンは、段々と表情が青ざめていった。

飛娘「な…何アルか？今の意味ありげな『あ』は!?!」

レン「…まさか…いや、しかし…そんな…でも…りい…」

飛娘「りい?りい——何アルね!?!」

レン「お、バイト場着いたな。じゃあ俺はこれで。」

飛娘「待つヨロシ!!ここで何も聞かずに帰られたらワタシの方が怖くて寝れないアル!!幽霊は話題にした人間の所に来るつて言うアルよ!?!」

レン「それで俺の所から消えるなら良いことじゃないか。」

飛娘「全然よく無いアル!!レンさんだけ助かろうなんて、神さまが許してもワタシが許さないアルよ!?!今夜おねしよしたらそのパンツ

明日顔に叩きつけるあるよ!？」

レン「——私是一向に構わんツツ。」

飛娘「……多」

その変態発言に、飛娘は完全に硬直した。

レン「さて、ジョークが通じてない今のうちに俺は帰るとしよう。

……パンツつてのは、きちんと朝シャンした女子が洗濯された状態のものを履いて、スカート或いはズボンから健全にパンチラしているのを鑑賞するからこそ、脳内にメモリーする意味が有るのであって、断じて黄ばんだシミが付いてるのが良いとか、オリモノがついてる臭いのが良いとかって趣味は俺には無いからな。俺はパンツは純白とか縞パンや水玉とかが好きなんだ。デザインが可愛ければ紐パンもアリだがな。パンツをプレゼントするなら、きっちり魅せ方を研究してからにしてくれ。ただ見せるだけのパンツでは布以上の価値は無く、また観賞する意味も無いのだ。例えば中国なら中国なのだからチャイナドレスのスリットから見えそうで見えない微妙なラインで焦らすとか、前の方が短くなってるやつを恥ずかしげにたくし上げてパンモロとか装飾品一つで様々なシチュウが……」

飛娘「——一体何言ってるアルかアナタはああああああー!?!」

レン「……ちつ、しまった。無駄口話してる間に覚醒しやがったか。ん?」

パリーン!!

レン「おっと!」

突如カードシヨップから何かが飛んできて、レンの鼻を掠めた。

飛娘「わっ!!」

更に今度はガラスの破片と共にもっと大きな物が飛娘に向かって飛んで

飛娘「ハイヤー!!」

中国拳法によってあっさり地面に叩き落とされた。

レン「何だ、喧嘩でもしてるのか?カードで語るのが嫌になって拳で語りだしたのか」

飛娘「あわわわ!!大変アル!早く止めないと。」

飛娘は急いで店の中に入って行った。

レン「……………」

レンは飛娘に叩き落とされた何かを確認する。どうやら店の机のようだ。足が折れているわテーブルの面は割れているわで、おそらくもうこの机だったものが元の机の役目を再び果たせる日は来ないだろう。熱心な作家でも来ない限りは。レンは机を地面に叩き伏せた張本人が向かった方向を見て一言呟く。

レン「シバキ倒さなくつちやの間違いじゃ無いのか…?」

飛娘の言葉に一部疑問を持ちながら、とりあえず中へ入って行った。

不良A「どうなってるんだよこの店はヨオ!!?

何パック買ったも狙ってるカードが来ねえじゃねえかア!!細工してんじやねえのかア!!」

不良B「おうおう、店長さんよおオレら客のこと舐めてんじやねえのオ?」

店長「め、滅相もございませぬ。ただ、お客様がお求めのカードは、通称ノーマルレアという種類のカードです!」

不良A「ふざけてんなよてめえ!!ノーマルカードにレアもウエルダンもあるかあ!!もう6000円もパック買ってんだぞ!!ストレージに無いってテメエが言うからよお!!大体公式サイトみてもそんなレア度書いてねえぞこの野郎!!」

不良B「オレらお客様を騙そうって魂胆かあ!!」

世紀末っぽい恰好の不良二人が、店長に因縁を付けていた。

レン(……………なんだろう。良く分らないけれど、言い分だけは不良たちの言っていることの方が若干分がある気がする。)

しかし、レン・ファムグリットは初心者故に遊戯王ノーマルレア(レアリティがノーマルなのに封入確率が箱買いしてもワンチャン有るかどうか)と言う概念があることを知らない。故に暴れているのは悪いとはいえ、彼らの怒りも尤ものような気がしていた。

飛娘「そこまでアルお客様!!店内での暴力行為はこの用心棒 王
飛娘が許さないアル!!」

レン「……用心棒……只のカードショップに用心棒……やっぱこの店
細工してんじやね??」

レンの中の疑惑が広がった瞬間である。

レナ「一応ね、N―レアって、知っている人は常識レベルで知って
ることなんだよ。にー」

レン「へーそうなのかー」

少し疑惑が緩和されていく。

レナ「まあ、販売元は販売当初から20年近く経ってる今でもその
存在を認めてないんだけどね」

レン「それって詐欺じゃん」

レナ「あはは。でもそれを楽しんでる人もいるから、ね」

レン「……………お前なんでここにいる?」

レナ「ふへ?レナさん達見つけたから入って来たんじゃないの?」

レン「全然。」

ひよの「私もヤジウマですっ!」

レン「……………うわ、本当に気付かなかった。」

ひよの「なんだか悪意のある言い方ですねえ、もっかいヘッドロッ
ク行きますか!?!大人の魅力や女子力を味わいますか!?!」

レン「女子力って書いて物理って意味にするのはそろそろ止めて欲
しいもんだな。で?何でいる」

レナ「飛娘ちゃんがスマホ忘れて行っちゃったから、レナさん宅急
便。」

レン「速すぎだろ。何で俺達より後に出たハズのお前らが俺達より
先に店着いてんだよ。」

レナ「それはきつと愛だよ。愛!みくちゃん先輩は、ワインの飲み
過ぎでとても走れそうにないから置いて来ちゃった。」

レン「その愛、少しでもいいから酔っ払いの介抱に向けてやれよ
……………」

坂上みく、現在酔いを覚ますために公園ベンチにて休憩中。

みく「うう…きもちわるいよお……」

レナ「それは無理。だってレナさん回復よりも攻撃職だもんっ。生粋のアタッカーだよ」

満面の笑みで物騒なことを言うレナに対して諦めのため息をつく
と、レナは不良の前に出た。

レン「おい、お前ら」

不良A「ああ!?何だてめえオレらに喧嘩売ろうってかあ?」

不良B「オレら平中工業ひらなかこうぎようとやろうってのかあ?」

飛娘「レンさん…?」

レン「うるせえ、能書きよりもデツキを出せ。」

デツキを手にして睨みを利かせる。レンは殴ってやった方が楽だが、デュエリストならカードで語るといふ飛娘の言葉を思い出したのと、ついでに店に迷惑を掛けないようにとの配慮から、デュエルで穏便に追い出すことにした。

不良A「おおく?何だてめえ」

不良B「ハハハハ!!何言ってるんだコイツ!!」

レン(ちっ…:…やっぱ駄目だったか。デュエリストならデュエルで語るって言ってたじゃねえか。中国のヤロウ…。

まあいいや。俺は拳の方がよっぽど流儀だ——)

不良A&B「俺たちにデュエルで勝て——」

一瞬、レンの姿が消えたと思った瞬間。紅い閃光のような何かが見界に入り、同時に不良Aの視界が上下に揺られて真っ黒になった。

——無言のアップパーカット。

不良A「!!?ぶるうあああああああああああああ——
!???

相手の発声とほぼ同時。一瞬にして不良Aの懐に飛び込んだレンが、高速の右アッパーを顎の先端目掛けて思いっきり叩きこんだのだった。

レン「あん——?」

メキヤッ。顎の砕けた音がした。不良Aは数秒間宙に滞空し、重力に従って床に叩きつけられる。

レン「……………何だよ。デュエルで良かったのか。よし、殺るか」

不良B「A I B O おおおおおおおおおおおおお、殺るか?」

飛娘「ひ…卑怯者がいるアル!!デュエルを挑んで置いてリアルファイトなんて」

ひよの「おおくさすがは『赤髪のレン』さんですね。クリスマスに自身の髪と純白のサンタ服を真っ赤に染めなおした伝説の流血アツパーは健在なんですね!!」

レン「待て。髪はちゃんとカラーリングだ」

飛娘「サンタ服は血に染めたアルか!!」

レン「相変わらずキレの良いパンチ。レン君かつこいい〜!」

どう見ても人としてあんまりの行動を見て、レン・ファムグリットは目を輝かせていた。

飛娘「相変わらずお前の異性に魅力を感じるタイミングはおかしいアル、レン・ファムグリット!!」

レン「レンさん好みの男性のタイプは『自分より強くて可愛い男性(ヒト)』だからね!好きな人は別にいるけど〜」

満面の笑みで好きなタイプを語るレン。ジョーク等一片たりとも含まれていないマジな目をしている。

飛娘「アレの何処が可愛いアルか!!只の手の速いヤンキーアル??しかも手のつけられない暴走ヤンキーアル!!」

レン「そこが可愛いんだよ!!強くて短気で危なっかしくて我が儘でももっ、耳かきとしてあげたりしちやって無防備に寝ちゃったりして、耳にふくつてするとビクッ、つてして起きちゃうの。でもやつぱり眠いから寝ちゃうんだよ!!レンくん可愛いよ、レンくん!!」

1人思いつきり盛り上がるレン・ファムグリットだった。

飛娘「……………最後の方は、滅茶苦茶具体的だったアル。あと、お前の愛は、我が子に対する母親のものに近い気がするネ。真っ当な恋す

るアル。レナ・ファムグリット。」

レナ「レナさんは、好きな時に好きなだけ依存してきて、普段は気にも留めなくせにこっちから離れていこうとすると寄ってくる猫のような人が大好きだよっ。」

ひよの「ぶつちやけダメンス好きですね！ルックス良しでスタイル良し。料理が得意で包容力大。世の中のダメな男が群がりそうな女性です。メモメモ」

レナ「うん。後はレナさんに勝てるかどうかだね。天国か地獄か。いざ勝負！だよっ」

ひよの「……天才剣士が何か言ってる。やっぱりそう美味しい話は転がって無いんですね。」

レナ「アハハっ。どっちみち、レナさん好きな人いるから同じことだけどね」

ひよの「では！その辺のお話も聞かせていただきますしよう!!」

レン（……女子が三人集まると、本気でやかましいな。）

レン「さてと、準備は良いか。その……なんか世紀末っぽい恰好のやつ。」

不良B「く……っ。」

不良B（『赤髪のレン』：聞いたことがあるぜ。たしか、クリスマスイヴに街に蔓延るデート中のリア獣を根こそぎ刈りつくし、その髪と、純白のサンタ服、そして拳を血で真っ赤に染めた伝説のバーサーカー!!）

レン「……。」

レン（なんだろう、ドンドン俺のイメージがオカシイことになっていってる気がするんだが……俺の被害妄想か？）

お互いに睨み合いが続き、心中では戦いのイメージが展開されていく。

不良B（だが、赤髪のレンがデュエルに精通してるって話は聞かへえ……よし）

レン（そういえば、昨日のデュエルじゃデツキのモンスターを全く使えなかったんだっとな。よし）

不良B（喧嘩じゃ勝てないがデュエルなら勝てる!!）

レン（モンスターを展開しまくって物理で殴り続ける。）

思考がまとまった二人のデュエリストは、互いにデュエルディスクを構えた。

レン・不良B「——デュエル!!!」

遊戯王 ｛ Fake Origin ｝ 8

レンと不良のデュエルが始まった頃、店の外には観客が来ていた。ヴィジュアル系「……始まったようだな。」

舎弟系「そーっスねー。でもこっからじゃよく見えないっスよ、手塚さん。中入らないんっスカ?」

手塚「……その必要は無い。このデュエルの勝敗は既に見えている。下駄箱にちよつとした『アイサツ』も入れて来た。なにより、俺の占いでそう出ていた。」

舎弟系「お得意の占いっスねー。じゃあじゃあ、今度競馬の当たり券教えて欲しいっスよ手塚さん」

手塚「断る。勝手に買って、勝手に自滅しろ。ケイト」

ケイト「ああんヒドイ。じゃあ代わりにカ・ラ・ダ・でサービスするっスよ。ほらあ、オンナノコのカラダ、興味ないっスカあ?」

そう言うと、胸元を少しだけ露わにして男に迫る。因みに大きさはお察し。

手塚「悪いとは思うが、一応俺にも好みがあるんだ。守備範囲外の女性から色仕掛けで迫られても、何と言うか……滑稽なだけだ。すまないが諦めてくれ」

ケイト「……本当に酷いっスね……ボク泣いちやうっスよ、マジで」
手塚「済まないな。来世ではもう少しキミに興味を持てるように努力してみる。……きつと、努力すれば、人間は運命だつて乗り越えられる……!」

ケイト「現世のボク全否定じゃないっスカ! 来世のボクの扱いも酷いっス!! ボクそんなに魅力ないっスカ!? 手塚君はもうちよつと心を開いて見聞を広めてみるべきっス!!」

レン君なんて、ボクが涙流して『許して下さい』つて懇願してもガン無視してボクのこと襲い続けたツスよ! 涙はでるわ涎は垂れるわ舌は乾くわ一睡もさせてくれなくてクマが出来るわで! あ、血は出なかつたスね。しかも朝起きたらオムツしなくちゃ服着れないくらい濡れ——」

手塚「そろそろ黙れ。キミの性格では公共の場で許される範囲を逸脱しても構わず話し続けるだろう。」

ケイト「ママにならなかつたのが不思議——あ……」

周囲の奥さま方が『最近の若い子は〜』

とかこどもの「お母さん。あのお姉ちゃんオムツしてる——」「しつ、見ちゃいけません!!」的な会話で周囲に迷惑がかかっていることを察した手塚は、即座にケイトを黙らせにかかった。

ケイト「……あ、あーアレでしたね。隠密ツス。はい」

手塚「……そこまでとは言わないが、今はあの男と会う時ではない、占いでそう出ていた。

会うのは勝手だが、俺はもう行く。今日は顔を見に來ただけだからな。」

ケイト「……行っちゃつたつスね〜。そんじや、ボクはもうちよつと見て行くつスカね、初めての相手の勇士を。」

レナ「……………」

ひよの「どうしたんです？レナさん」

レナ「ううん。なんでもない。ちよつと窓の外が気になっただけ」

ひよの「窓の外ですか。熱心なストーカーさんでもいたんです？」

レナ「くすつ…どうだろうね。」

ひよの「……………」

冷たく笑うレナの表情は、若干お漏らししてしまいそうになったしまったという。(ひよの後日談)

ストーカー(?)「な…何スカねえ??今おにいちゃんを取られた妹が真剣持ち出して斬りかかってくるイメージが見えたつスけど……つと、デュエルデュエル。」

レン「俺のターン。手札から、伝説の黒石(レジェンド・オブ・ブラック)を召喚する」

レナ・ひよの「へ？」

飛娘「あ……………」

レンがモンスターを召喚した瞬間、レナとひよのは信じられないようなものを見たように驚き、飛娘はこの世の終わりのような表情をした。

店長「……アレは確か、今度発売の新パックに登場する真紅眼サポートのモンスターですね」

飛娘「……そ、そうアルね。何処でフラゲしたんだカ……ハハハハ。」

店長「そう言えば昨日、飛娘ちゃんには新パックを運んでもらってましたね。ずいぶん遅く帰って来ていましたが」

飛娘「アワワワワワ……!!!」

レナ「あれ、飛娘ちゃんが……？」

ひよの「ずるいです」

飛娘「……昨日町中連れまわされテ、おっかなくてたまたま手元に有ったパック、渡してしまったアル……」

レナ「それって、にーが脅したってこと？」

ひよの「恐喝ですか!?それは記事になりそうです。」

飛娘「……うう……」

店長「そうなのかい？飛娘ちゃん」

飛娘「それは……ソノ……」

レン『『伝説の黒石』の効果を発動する。』

伝説の黒石

星1 闇 ドラゴン族

0/0

「伝説の黒石」の①②の効果は1ターンに1度、いずれか1つしか使用できない。①…このカードをリリースして発動できる。デッキからレベル7以下の「レッドアイズ」モンスター1体を特殊召喚する。②…このカードが墓地に存在する場合、自分の墓地のレベル7以下の「レッドアイズ」モンスター1体を対象として発動できる。そのモンスターをデッキに戻し、墓地のこのカードを手札に加える。

ひよの「……えっと、ゴホン。確かあのカードは、デッキのレッドアイズと名のついたモンスターを召喚出来るんでしたね。じゃあ、

アレでレッドアイズ呼ぶんですかね〜」

飛娘「……たぶん違うネ。バナラのレッドアイズは、『真紅眼融合』のために残しておいた方が良いアル。」

レナ「好みにもよるけど、炎と雷が両方入っているなら、レナならとりあえず雷かな」

ひよの「炎？雷？なんですソレ」

レン「伝説は誓いに。代償は過去の道に。辿り着きしは弱者を屠る悪魔の雷——紅き瞳よ、ここに来たれ。」

特殊召喚、現れる。『真紅眼の凶雷皇—エビル・デーモン』（レッドアイズ・ライトニング・ロード—エビル・デーモン）!!」

真紅眼の凶雷皇—エビル・デーモン

星6 闇 悪魔族

2500/1200

(1)：このカードはフィールド・墓地に存在する限り、通常モンスターとして扱う。

(2)：フィールドの通常モンスター扱いのこのカードを通常召喚としてもう1度召喚できる。

その場合このカードは効果モンスター扱いとなり以下の効果を得る。

●1ターンに1度、自分メインフェイズに発動できる。

このカードの攻撃力より低い守備力を持つ、相手フィールドの表側表示モンスターを全て破壊する。

レン「カードを一枚伏せて、ターン終了。」

ひよの「あれも、新しいカードですね……もしかして、昨日みくさんとしたデュエルの中から、あのデツキだったんでしょうかね？」

レナ「……もし、そうだとしたら。昨日のデュエルは全く本気を出せていなかったってことだけど……どうなの？飛娘ちゃん」

飛娘「…カードは、昨日あげたアル。その時すぐにデツキに入れているの見たカラ、多分昨日からネ。」

店長「へえ、そうなんだあ。そんなにアドバンテージがあるんなら、もちろんキミの彼氏君は、勝って店を守ってくれるんだよね……？」

飛娘「ひいゝ!? (ガクガクブルブル)」

レナ「にー。絶対に勝ってね。飛娘ちゃんのクビがかかってるよ、このデュエル。」

レン「ああ、任せろ。」

ケイト(おおく真紅眼ツスかゝく久しぶりに見たツスねえ。

やっぱりレン君は真紅眼似合うツス!! 朱い瞳に紅い髪。マッチしてるツス!!

ああヤバイ…もつと近くで観たい……………)

不良B「オレのターンだ、ドロー」

一瞬——不良Bの手が不自然な軌跡を描いた。

レナ「……………」

不良B「へっへっへ。こりゃあ、速攻で決まっちゃまうかもなあ。

行くぜ、手札から機械族専用融合魔法『パワー・ボンド』を発動!!」

レン「……………」

不良B「手札の三体の『古代の機械巨人』を融合だ!!」

飛娘「この融合素材は——!!」

不良B「オレの最強の切り札『古代の機械究極巨人』を召喚だあー!!」

古代の機械究極巨人

星10 地属性 機械族

融合／効果モンスター

4400／3400

×2 「古代の機械巨人」＋「アンテイク・ギア」と名のついたモンスター

このカードは融合召喚でしか特殊召喚できない。このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、その守備力を攻撃力が超えていれば、その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。このカードが攻撃する場合、相手はダメージステップ終了時まで魔法・罠カードを発動できない。このカードが破壊された場合、自分の墓地の「古代の機械巨人」1体を選択し、召喚条件を無視して特殊召喚できる。

ひよの「超重量級のモンスターじゃないですか!!」

飛娘「攻撃力4400 貫通 攻撃時の魔法・罫の封印。かなりの強カードアル。」

レナ「にー。『パワー・ボンド』にはもう一つ効果が——」

レン「知っているよ。」

特殊召喚した融合モンスターの元々の攻撃力分攻撃力をアップするカード、だろ」

古代の機械究極巨人 ATK4400↓8800

レナ「知ってたんだ」

レン「ああ。昨日みくに苦戦してから、カードの効果を片っ端から頭に叩きこんだ。一夜漬けだが」

飛娘「叩きこんだって、どのくらいアル？」

レン「歴代の大会出場者がデッキに入れていた『カード効果』・『コンボ』・『裁定』の全てだ」

ひよの「何か明らかに人間には不可能なことを言っただけです。……そんなの1から覚えるくらいなら、数学や古典の教科書丸暗記する方が楽ですよ……絶対に。」

飛娘「……ワタシも、そんなことするくらいなら日本の漢字1から覚えるほうがいいアル……」

シヨップ内にいた何人かの人間も、様々な目でレンを見る。

レン「……??」

レンが周囲の人間に気を取られていた時だった。

不良B（今だ！）

不良B「バトルだ!! 『古代の機械究極巨人』でエビル・デーモンに攻撃だあ!!」

レン「ん……?」

レナ「レンくん!!」

不良B「古代の機械究極巨人の攻撃宣言時に魔法・罫の発動は出来ない。よってこのままダメージ計算だ!!こ・こ・こ・で・え・く・速攻魔法『リミッター解除』だあああああ——」

古代の機械究極巨人 ATK8800↓17600

不良B「オワリだあ!!『赤髪のレン』破れたりいいいいいいいいいいいいいいいいいいいい!!」

岩をも砕く拳をもつ強大な古代の巨人は、その体軀を更に鍛え上げ、強大なものとし、遂にはその身の稼働の終息と引き換えに、持ちうる全ての力を解放し、大地をも砕く一撃を放つ。

不良B「アルティメット・マンマミーヤ・パンチ!!」

エビル・デーモンは成すすべもなく、その拳に五体をすり潰され、レン・ファムグリットに襲い掛かった。

レン「……………」

レンは目の前に降りかかる現実を視界に入れることなく、手札のカードに視線を注いでいた。

レン「……………相変わらず恐ろしいな、アイツの占いは」

不良B「なんだあ? なんですかああ? 負け惜しみなら聞いてやりますよおろろ」

楽しそうな表情で少し手札を眺めた後、スツと瞳を閉じると、レンはデュエルディスクに少し触れ、腕を下ろした。

不良B「ギャハハハハハ!! 何もできませんってかあ!?

自分から喧嘩売つといてワンターンキルかよ!! 超だっせえろ!!」
ひよの「うう…なんてマナーの悪い…:わたしあの人きらいです」

レナ「……………カッコ悪いのは、どっちになるのかな」

レンは懐からコインを取りだすと、ピーンと弾き『古代の機械究極巨人』に放った。頭部に当たり、コツンと音を音を立てた——瞬間、レンに襲い掛かっていった拳が消えた。

不良B「何!? 攻撃が止まっただ!!」

レン「余りにも目に余るカードの無駄使いだ。だからこんな占いが出てくる。」

『アルカナフォースXIV—TEMPERANCE』——節制のカード」
戦闘ダメージ計算時、このカードを手札から捨てて発動できる。その戦闘によって発生する自分への戦闘ダメージは0になる。このカードが召喚・反転召喚・特殊召喚に成功した時、コイントスを1回行い、その裏表によって以下の効果を得る。●表:このカードが

フィールド上に表側表示で存在する限り、自分が受ける戦闘ダメージは半分になる。●裏：このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、相手が受ける戦闘ダメージは半分になる。

レン『無駄使いや浪費ばかりしてないで、少しはテメエの力量を上げること考えろ』だそうだ」

ひよの「アレって防御用のカードですよ。いつの間に墓地へ送ったんですかねえ？」

レナ「さつき墓地に手が行ってたから、その時だと思う。」

ひよの「むむむ：レンさん！カードは発動していたって言うのはどうかと思うのです。ルールもマナーも無いのですー」

レン「勝負は非情だ。リスペクトなんて甘えた戦争ごっこは余所でやれ！」

不良B「テメエ：ゲームをなんだと思っていやがるんだ!!ルールとマナーを守れ！」

飛娘・ひよの・レナ「——お前が言うな!!」

不良B「ぐ……カードを伏せて終了だ。」

レン「この瞬間、お前の発動した『パワー・ボンド』の制約により、究極巨人の攻撃力分のダメージが襲う。

不良B「ぐっ……!!」

不良B LP8000↓3600

レン「更に、『リミッター解除』の反動により、究極巨人は破壊される。バカな指揮官を持つと、苦労するのはいつだって部下だ……同情するよ」

不良B「だが、この瞬間『古代の機械究極巨人』の効果発動!!融合素材として墓地に送った『古代の機械巨人』を蘇生する」

レン「さてと……オレのターン、ドロロー。」

不良B（ククク。オレの伏せカードはミラフォだ……赤髪のレンが何を出してこようが怖くねえ）

ひよの「クンクン……」

レナ「どうしたの？ひよのちゃん先輩」

ひよの「この臭いは……死亡フラグ臭なのです！」

レナ「……………しば…フラ??」

ひよの「どうやら今回は簡単に決着が付きそうですね!! レンさん
ファイトです!!」

レナ「……………??」

レン「クス…そんなじゃ、ご期待に込めて、少しサービスしてやるか。
まずは手札から、『おろかな埋葬』を発動する。この効果で、『真紅眼
の黒炎竜』を墓地へ送る。

そして、リバースカードオープン。罫カード『レッドアイズ・スピ
リッツ』を発動。

墓地からエビルデーモンを蘇生する。更にチェーン2で速攻魔法
『銀龍の轟咆』を発動、真紅眼の黒炎竜を特殊召喚。」

蘇生カード二枚の連続召喚により、レンの場に真紅眼の『雷』と『炎』
が肩を並べた。

ひよの「おお〜！これがさつき言ってた雷と炎ですか!! 壮観です〜
〜」

レン「……………」

その光景に無邪気に喜ぶひよの姿を見て、レンは少し微笑んだ。

不良B「へへっ、何かと思えば、さつきボコった雑魚カードじゃね
えか。」

レン「……………」

ひよの「雑魚なものですか！優秀なドラゴンなのです!!」

不良B「ハハハハ!! 優秀!?! さつきまで墓に眠ってたそのカードが
か?

笑わせてくれるぜー!」

ひよの「……………やっぱりわたし、あなた嫌いですっ」

不良B「アーっハハハハ!! 凶星突かれてグウの根も出ねえってかあ
〜なっさけねえのwww」

不良Bの心無い言葉にひよのは少し落ち込んだ。その瞬間、レン・
ファミグリットの目つきが変わった。

レン「……………ヤメだ。」

不良B「は？何だあサレンダーかあ？」

レン「お前のデュエルは力に頼るだけで芸が無い。しかも力を使いこなすどころか振り回されていると来た。これ以上長引かせてもイヤつくだけだ……もうツブす。」

レン「魔法カード、『融合』を発動。場の『真紅眼の凶雷皇―エビル・デーモン』と『真紅眼の黒炎竜』を融合する。悪魔の雷よ紅の業火よ悪魔竜の名のもとに重なりて、逆らう命を灰燼に帰させ。融合召喚、『悪魔竜ブラック・デーモンズ・ドラゴン』!!」

悪魔竜ブラック・デーモンズ・ドラゴン

闇属性 ドラゴン族 星9

3200/2500

融合・効果

レベル6「デーモン」通常モンスター+「レッドアイズ」通常モンスター

自分は「悪魔竜ブラック・デーモンズ・ドラゴン」を1ターンに1度しか特殊召喚できない。①：このカードが戦闘を行う場合、相手はダメージステップ終了時まで魔法・罠・モンスターの効果を発動できない。②：融合召喚したこのカードが戦闘を行ったバトルフェイズ終了時、自分の墓地の「レッドアイズ」通常モンスター1体を対象として発動できる。墓地のそのモンスターの元々の攻撃力分のダメージを相手に与える。その後、そのモンスターをデッキに戻す。

不良B「こ、攻撃力3200!?!う……うそだろ、こんなモンスター見た事ねえぞ……何であんな雑魚モンスターからこんな化け物が!?!」

レン「小さな力、大きな力、そのすべてに意味があり、価値がある。バトルだ。ブラック・デーモンズ・ドラゴンで攻撃。ライトニング・ウェーブ!!」

不良B「ククク…今攻撃って言ったなア!リバーズカードオープン……」

レン「ライトニング・ショート」

不良B「——な、なんだ!?!カードが発動しないぞ!!ミラフオが撃てない!!」

レン「たかが人間が、既に落ちてきている雷に反射神経が追いつくと思うか？」

B D D A T K 3 2 0 0 V S 古代の機械巨人 A T K 3 0 0

0

不良B「くそつ…だがまだライフは残っている！」

不良B L P 3 4 0 0

レン「そうだな、まだ殴る部分が残っている。」

レン「悪魔竜の効果発動。墓地の『真紅眼の黒炎竜』をデッキに戻すことで、相手に戻した真紅眼の攻撃力分のダメージを与える。

受ける、真紅眼の炎を。“ブラック・インフェルノ”!!」

不良B「ぎゃあああああああー!??!な、何だ!??!ソリットビジョンなのに熱い!!熱い!!いいいいいいいいいいー!??!」

不良B L P 3 4 0 0 ↓ 1 0 0 0

レン「カードを一枚伏せて、ターン終了」

悪魔竜の効果でダメージを受けた不良は、まるで本当に炎に焼かれているかのようなオーバリアクションで苦しんでいる。

ひよの「あんな馬鹿にした演技までして、まだ余裕ってことですか!!レンさん!!もつとやっちゃってください!あんな人やツつけちゃうのですー!」

レン「アレって本当に演技なのかな?全然そうは見えないんだけど」

店長「……?なんでしよう、何か焦げ臭いような……?」

レン「さあ、テメエのターンだ、さっさとカードを引け!」

不良B「う……ぐひゃ……」

レン「引け」

不良B「……ド……口……ガクツ」

ひよの「あ、倒れたのです。」

レナ「……黒こげだね、これどうしたの?にー」

レン「知るか、戦えないならもう用は無い。その辺捨てとけ!ク

ソツ、不完全燃焼もいいとこだ、この雑魚がア!!」

ドカツ

焦げて横たわる不良Bの腹にいい感じの蹴りを入れると、レンは店を出て行った。

レナ「あ、ちよつと、にー!ありやりや…あれは本当に不機嫌さんだ……」

ひよの「というか、何でデュエル中に急に黒焦げになったんですかねこの人?」

レナ「なんでだろうね……。」

そう言いながら、レナは不良Bがドローしたカードを確認した。

レナ「……二枚目の『パワー・ボンド』か…この勝負は完全に、にーの勝ちだね。さつきりバースがミラフオだつて言つてたし」

飛娘「おかしアル、レナ・ファムグリット」

レナ「うん。知ってるよ」

ひよの「何がです?」

レナ「この人が使つてた『パワー・ボンド』つていうカードは、機械族専用の融合カードなんだけど」

ひよの「はい、知ってます。さつきレンさんも言つてましたね」

飛娘「この『パワー・ボンド』つて言うカードは『薩摩サイバー次元流』と言う流派の道場で有段者のみに配られる一般の人間ではまず手に入れないカードアルヨ。」

ひよの「じゃあこの人はデュエルの有段者つてことなんですか?」

レナ「とてもそうは思えないよ…だつてこのカード、レプリカだし」

ひよの「レプリカ!?!」

レナ「多分デュエルディスクをいじつて無理やり使えるようにしたんだね。」

ひよの「この野郎とんでもないヤツなのです……」

飛娘「でも、いったい誰がこんなことを」

???「あーあ、気づいちまったか。まさかレプリカだつて分かるやつ

がいるとはなあ……」

飛娘「誰アルか!?!」

皆が入口の方を振り返ると、そこには制服姿の人間が何人もいた。
??? 「お前ら…タダじゃ帰れないよ?」

遊戯王 〈Fake Origin〉8.5 気が向いたから番外編

ここはアパートの一室。それも金の無い学生が借りるようなオンボロアパートだ。

部屋にあるのは炬燵とミカン。例え夏でも電源を入れたままにする家主のポリシーに従い、今日も炬燵は働き続ける。労働時間は労働に訴えれば即勝訴だろう。

但し、コタツは人であるならば。

natto mikan「例えそれは山の木々。たとえどれだけ永く生きながらえようと、人にとっては己が領土を侵す害物。故に、樹木はその意思を黙殺され、人のためにその命を理不尽に奪われる。」

コタツの主であるミカンのような生物は、納豆の糸ナマモのような腕と、もう納豆そのもののような手を組んで、意味ありげに語りだす。

natto mikan「幾つの命を手折れども、ヒトはそれが人で無い物に慈悲を与えず、意思無き物と断じた者には、一縷の希望すら残しはしない。一体幾つの業を重ねれば、ヒトは愛を知るのだろうか……。」

レナ「作者パパ。ご飯出来たよー？」

なつとうみかん「わーい♪すぐ行くー」

遊戯王 〈Fake Origin〉8.5 生きる者死に逝く物

作中のヒロイン兼解説役の少女レナ・ファムグリットは、文武両道・才色兼備、金髪碧眼の美少女である。

どこぞに居そうな必殺料理人な壊滅的な料理下手でも無ければ、恨みを買ってハブられるようなことも無い、誰から見ても非の打ちどころのない順風万藩な人生を送っているようにしか見えない——理解

されない少女である。

レナ「おいしい？昨日テレビで観たラタトウユっていうの作ってみたんだよ」

笑顔で昨日見たテレビの話をするレナ。

なつとうみかん「むぐむぐ。ところで——もぐもぐ、今回は、バクバク、じんぶちゅあぐあぐ、しようかひをむしゅむしゅ、だね……」
レナ「食べ終わってからでいいよ。ちゃんと待ってるから、大丈夫だよ。」

おかわりいる？」

——満たされない。自分レナという存在が。想いが、気持ちか。

一人ぼっちの孤独では無く、対等な相手がない不満足。

あらゆるジャンルに拙僧無く手を出し、持ち前の才能とセンスであつさりモノにしてしまう。

ただ、私の料理を食べて美味しいと言ってくれる。おかわりを求めてくれる。

そんな存在に意味を感じられる人格には、僅かに救いを感じる。

もしそれすらも無かったら、私はいつたいどうなってしまったのだろう。

考えない日は、無かった。

私には、四人の家族がいる。

義父の、エックス・ファムグリット。

実姉の、シャールロット・ファムグリット。

そして、赤い髪と、鋭い眼光が印象に残る義理の兄

——レン・ファムグリット。でも、私が初めて会った時の自己紹介の時、彼は『グレ』と言いかけたのを覚えている。そして今でも、彼はレンと呼んでも反応しないことがある。

——だから、きつと、義理の兄の名は、偽名なのだろうと思った。誰も語りたくない過去がある。

だけど、彼の過去は、自分の名前すら、語りたくないものなのだろうか……？

分からない。大抵のことは大体想像が付くし理解出来る。でも、彼

のことは良く分らない。

だから、興味が湧いた。私分からないあの人に、私は癒されていった。

あの人は、どんなひと？

レン・ファムグリット（15）

誕生日 不明

髪の色 赤

瞳 赤

身長 183 cm

体重 69 kg

この年齢の男子にしてはかなり背が高い。

これは本人の身体計測のデータを学校のパソコンから勝手に閲覧したものだ。

別に本人に聞いても良かったが、秘密とか関係なくめんどくさいことを洩る性格だから、こういう手を取ったに過ぎない。正確なデータが欲しかったのも有る。

利き腕 左

視力 右0.4 左0.01

これは、本当に驚いた。もはや失明寸前の左目に。

それでもメガネを掛けないのはポリシーっていうものなんだろうか？

そんなことしてるから、怖がられるんだよ？

血液型 A↓AB

愛用の煙草 JPS

愛車 750RS

好きなもの

・ 昼にする街中の散歩

・ 夜のツーリング

これは、もしかしたらお家に居たくないから、家を出ているだけなのかもしれない。

朝学校へ行く時は一緒だけど、それすら実現するには三年かかった。

嫌われている…わけではない。でも、きっと避けられているんだ。お姉ちゃんも、今でも彼に避けられている。本人は初めてできた弟に愛情を感じているけれど、思春期とかそういうのじゃない遠ざけられ方をしている。何故…？

嫌いなもの

・自分のせいで誰かに迷惑をかけること。

・仲間を傷つける者

見た目に反して、律儀…とも言えるけれど、どちらかと言うと干渉されるのを避けるためにやっている節が見える。…まあ、主に私だけだ。

月の小遣い

0円

月の収入

無し

義父、エックスは私達姉妹には毎月お小遣いをくれる。

でも、彼には渡していない。

本人も何処から手に入れているのか、お金の困っているようには見え、自分だけ渡されないことに何の疑問も持っていない様子だ。

自分だけ除け者みたいにされて、嫌じゃないのかな…？

でも、そんな彼にも友だちがいる。

その1人は

朝倉英心（15）

実家は歴史ある朝倉家の本家で、住職。

いずれはその家を継ぐために修行中の身……のはずだが。

とにかく煩惱が凄い。

好きな物がおっぱい。

座右の銘は『大きいことは良いことだ』

もう救いようが無い。

ただ、なぜか彼の友人と言われると……何故だろう。
疑いようが無いほどに、彼の親友と思える雰囲気がある。
彼と並んでも見劣りしないほど背が高い。
並平鈴木なみひらりんぼく

友人その二

ルビが無いと絶対に所見で名前が分からない人。

ギャル男みたいな話し方の人で、見た目も軽いノリの人。

隠れカードコレクターで、彼がデツキを作る時に何枚か譲り渡したらしい。

なつとうみかん「ちなみに、『真紅眼の黒竜』二枚は、鈴木からの贈り物ですも」

レナ「——!?え、なに??いきなりどうしたのパパ?」

なつとうみかん「ふっ：俺は作者パパだぜ?」

娘キャラクターの考えてることなど理解してて当然さ!」

レナ「……：なら、あの人のこともつと教えてよ。何か私よりあの

二人の方が彼の事情詳しくそうな感じがするんだけど?」

納豆ミカン「詳しいよ。だって英心は大神災の後、つまりレナより

先にレンに会ってるし、鈴木に至っては同じチームのメンバーでもあつたんだもん。」

レナ「え、何それ初耳。：もしかして学校グループで私一番その変の事情ハブられてる……?」

納豆ミカン「うん。だってそうでないと彼ら存在意義疑われるくらいキヤラ薄いし。」

レナ「」

納豆ミカン「それに、そんなに気になるなら、本人に聞いたら?」

レナ「そ、それができるくらいなら苦労して無いわ。」

あの人そういうこと話してくれないなら苦勞して無いわ。第一本人もいない今、作者パパがいるこの瞬間が一番チャンスじゃない?」

納豆ミカン「いるよ、レン。コタツに潜って寝てるし。」

レナ「……?何言ってるの?そんなことになってたら私が気付かないわけ……」

レナがコタツの毛布を捲る。

すると、そこにはどこの関節をどう曲げたのか気になるカタチでしっかりレンが入っていた。

しかも熟睡している。

その様子を認めたレナは、無駄のない動作でレンを炬燵から引っこ抜いて自分のすぐ隣に近くにあつた自分の上着を掛けて寝かせた。

そして一言。

レナ「死ぬでしよこの寝かた!?!何でこんな寝方してるのよ!?!って言
うか教えておいてよ!?!聞かれてたらどうするのよ!?!って言うか私何
で気付かなかつたの!?!」

いつもはすぐ分かるのに!?!」

——否。顔を真っ赤にしながら猛抗議を始めた。

納豆ミカン「うむ。たしかにレナには様々なチートスペックを与え
ている。

その中には気配察知もある。」

レナ・ファムグリット（15）

8月15日

身長163 cm

体重 52 kg

B 89 (E) W 59 H 87

利き腕 右

視力 右3.0 左3.0

血液型O

I Q 170

資格 剣道二段

危険カード取扱S級

好きなもの

・レンの作る朝食

・友達と一緒に遊ぶこと

・シャワー

・強い人
嫌いなもの

・他人を見下す人

月の小遣い

5000円

月の収入

七皇の給料(200000円)

ナンバーズハンターとしての実績(350000円)

お金の使い方

・親しい人へのプレゼント費用

・遊び費用

所属組織

・坂上学園1-A

・七皇|NO.2

デュエリスト・パラメータ

・所持カード数 A (探せばどんなカードも二・三枚ストックされているレベル。ただし、『生活している世界で市販されているもの』に限る)

・所持カード強さ A (大会へ行けば必ず見かけるレベル)

・カード知識 S (本来『世界』に存在しないカードの知識も完璧にマスターしているレベル)

・デッキ構築力 A (使用者に合わせて大会で上位に行ける程度の構築が出来るレベル)

・デュエル・タクティクス A (使用デッキの潜在能力を極限まで引き出せるレベル)

・運命力 B (パックのバラ買いでSレアやUレアを3パックに一度引き当てるか、ピンチ局面で死に札を引かない程度。Bまであれば大会で十分通用するレベル)

デュエル・スタイル

・場にカードを残し続けて必要なら回収し使い回す。

総合評価 A (大会に行けばほぼ必ず上位へ行ける実力)

二つ名 天才美少女剣士

天体の聖劍姫

所持品

・七皇の剣(ペンダント)

・黒丸(木刀・小太刀)

・スマホ

髪 金

瞳 青

備考

天才剣士。小学5年生で始めたものが、子どもの頃からやっている姉をさつさと追い抜いて注目を浴びている。

敵の行動を呼吸と観察に予測と、超直感で移動位置に竹刀をそつと置いておくカウンタータイプと、相手の隙を作り一瞬で斬り伏せるアタッカータイプを使い分けることが出来る。

かなり器用で天才肌の少女。どんなことでも一回やれば覚えてしまうが、そのせいで全力を出して臨んだ遊びは、相手の方がすぐに降参してしまう。

子どもの頃は勝ちに満足していたが、とある人物と戦って負けて以来、全力で戦う開放感と、負けるかもしれないという焦燥感の虜になつてしまい、自分よりはるかに弱い相手と戦うことに対して鬱憤がかなり溜まっている。

そのため、中学生辺りから自分より強い人間が出てきてコテンパンに負かされることを心から望むMっ気が出てきている。

納豆ミカン「だいたいこんな感じ。もうレナー1人で良いんじゃないかね? つてなチートキャラその1。」

だが、ここではその辺。主に戦闘系全部封印してあるから。」

レナ「なんでえ…?なんでなのお…??」

納豆ミカン「フッフッフ…それはね?」

レナ「それは?」

納豆ミカン 「この展開をオチに持ってきて締めるためさ!!」

レナ 「なによそれええええええええええー!!意味分かんない!」

納豆ミカン 「なお、次回のキャラクター紹介があればまたやっても
らうからよろしく。」

┌

レナ 「私オチ要員だったんだ!？」

遊戯王　　＼ F a k e　　O r i g i n　　＼ 9

カチン。

レンは愛用のジツポライターで愛飲の煙草に火を付けると、煙を肺の隅々まで満たし始めた。

それでも全くイラつきが収まる様子は無く、フラストレーションは溜まる一方だった。

??? 「……………」

その様子を路地裏からこっそりと眺める1人の人物がいた。

レン 「……………フリー。」

あつという間にフィルターまで飲みつくすと、携帯用灰皿に吸殻を入れる。そのままもう一本の煙草を咥え、ライターに火を着けようとして……………。

レン 「……………オイ、人の遊びに横槍入れて挨拶の一つもねえとはどういう了見だ…？」

イラつきを一切隠さないまま、隠れていた少女に声をかけた。

??? 「……………」

レン 「出て来いゴルア!! ケイト・ヴァルゼルド。」

??? 「ヒイツ!?? わ、分かったツスよ! 出て行くツス!!」

路地裏から姿を現したのは、どこか後ろめたそうな目をした女の子だった。因みに、手元にはライターとスプレー缶を持っていた。

ケイト 「お…お久しぶりっス、レン君。あ痛ツツ!??」

レンは出て来た少女の頭に思いツツ切り拳骨を叩きつけた。

ケイト 「う…うう…:…痛いよお…:うわあああーん!!」

殴られた痛みで少女はボロボロと涙を流した。しかし、そんなことで怒りが収まらないレンは物凄い剣幕で少女に怒鳴り散らす。

レン 「痛いよおじゃねえだろバカ野郎!! 何だそのスプレー缶とライターはよおー!」

ケイト 「だって…!! だってアイツ、レン君のことバカにするんスもんー!! リーダーがバカにされたら悔しいぢやないっスかあああーっ!!」

レン「だからってカードショップで火炎放射するバカがどこにいるツツ!!紙ばつかだぞ、燃えるぞ!火事起こるぞ!!バカなのはテメエだ!!」

ケイト「ごめんなざいいいいー!うあああああーん!!」
レン「いつも言ってるであつただろう!!人間好き勝手やるなら絶対に他人に迷惑かけんな!!テメエでケツ拭けねえことは起こすな!」

そう、先程のデュエルでリアルに不良Bが黒焦げになっていたのは、ブラック・デーモンズ・ドラゴンの効果演出に紛れて窓の外からケイトが火炎放射したのが原因だった。それにいち早く気が付いたレンは、店の外に出て来て、彼女の存在を見つけたのだった。

レン「だいたい、お前何でここに居るんだ!?確か国に帰ったんじやなかったか?」

ケイト「グスツ:帰ったツスよ:でも、寂しいから戻って来たツス。」

話題が変わると泣いていたのも落ち着いて、パアツつと笑顔を見せるケイト。

レン「犬猫かお前は。」

ケイト「ああ:半年ぶりの再会だつてのに全くの血の通わない冷酷なセリフ:ボク帰って来たんスね!」

罵倒されたケイトは、より一層嬉しそうに目を輝かせて、仲間との再会を噛みしめた。

レン「お前も大概ヤバい奴だよな。ハア:もういいや、俺戻るわ」

ケイト「あ、ボクも行くっス!少し目を放した内にずいぶんハーレム形成してくれちゃってみたいっスね!ここは先達として、指導しあげるツスよ。ニユツフフ〜」

レン「No Thank you」

ケイト「まあまあ、そう遠慮なさらずに癒しのコーデイネーター・ケイトさんのマル秘テク、披露しちゃうツスよ〜」

レン「:~:~:~:そうなるとお前用済みな」

ケイト「ボクのマル秘テクは門外不出だったツス!誰にもおしえな
いツス!!ケイトさんの口はダイヤモンドより硬いつス!!アマテラス

のように引きこもるツス！」

レン「ドロップ食うか？」

ケイト「え!? 食べさせてくれるんスカ。わーい。あーん」
簡単に開いた口に、レンはドロップを投げ入れた。

レン「……全然硬くねえじゃねえか」

ケイト「ふにやつ!? 騙したツスカ!!」

レン「騙されんなよ……」

ケイト「もぐもぐ……うう……しかもこれハツカじゃないツスカ……」
泣いたり怒ったり笑ったり、騒がしいながらも旧友との再会に少し懐かしさを感じながらレンが店に入ろうとする。

ケイト「待つツス、レン君。店の様子がおかしいツスよ」

レン「そりやテメエがニンゲン一人を黒焦げにしたからだと思っ……」

ケイト「じゃなくて! 何かもめてるんスよ。どっか他校の学生ツばいっスね」

レン「……そういや、さっきのアイツら、平中工業とか言ってたっけか。学校の看板の陰に隠れてるくらいだし、何か番長的なのが出て来たんじゃないか? ま、店にインネン付けたってマツポが召喚されるのは目に見えてるんだ。ほっときゃ良いか。」

ケイト「でもアレ、レン君の仲間の人たちと揉めてるツスよ?」

レン「レナツツ!!」

ケイトが言い切る前に、レンは店の中に入って行った。

時間はレンが店を出てすぐの頃に遡る。

店の突然押し入って来た制服姿の学生達が、黒焦げにされた仲間と顎を砕かれた仲間を見てこう言った。

学生A「テメエら何オレらの仲間に手え出しちゃってんの?」

学生B「あーあ、どうやら店の中で暴行があつたみたいだなあ。」

学生C「こりやひでえや。治療も相当かかるだろうなア。」

学生D「店の人も何でこうなる前に何とかしてくれなかったのオ?

こりや店側にも感謝料請求しないとなア?」

学生F「もちろん、そこのお嬢ちゃん達にもね。感謝料と、あと献

と抱き締めた。

レン「……少し昼寝でもすると良い、起きたころには、きつと夢だったと思える。起きたらドロップをやろう。」

ひよの「……………うう……」

頭を撫でながら優しい声でひよのを寝かしつけてやると、しばらくして落ち着きを取り戻し、眠りに着いた。

ひよの「…すう……………すう……………」

寝かした後、思い出したように辺りを見渡すと、店にいた客は、あまりの地獄絵図に全員逃げ出してしまつたらしく、その場にいたのはもう実行犯二人とレンの腕の中で安らかに寝息を立てるひよの、そしてスタッフゆえに逃げるわけにもいかなかったであろう店長だった。因みに、レンの後で入って来たケイトは……………。

ケイト「敵が一瞬で全殺しになつてる…しかも芸術的に。ウチの突撃隊長とはえらい違いっスね、レン君！」

それほど当てられた様子も無く平静である。

レン「……………俺は、こんな状況を見て少しでも楽しそうにしているお前こそ、ひよのとエライ違いだと言いたい。俺の周囲には、普通の女子がいないのか……………」

ケイト「何言ってるッスか。普通って言うのは多数派のことを刺すッス。この場で具合悪くなってるのはそのちっこい子だけじゃないッスか。その美人二人も全然平気そうッス。よってこの場は、ボク達の方が普通の女の子ッス!!」

ドヤ顔でピースしながら、ケイトはそう言い切った。

レン「空は今日もこんなにも青いのに……………どうして人の世はこんなにも理不尽と腹黒さで充満しているんだッツツ!!」

ケイト「出たっスね〜レン君の現実逃避モード。悲しくなると詩人見たいになるんスよね〜。」

レン「あと、人肉で出来たアートを見て、眉ひとつ顰めないお前らを『普通の女の子』とは断じて言わねえからッツツ!!何考えてんだそのの実行犯二人!!」

レナ「女の子にハレンチなことする子にはレナさんの愛刀“黒丸”

が唸るよ。えっへん」

飛娘「悪い不良はオシオキするものアルっ！」

反省の色・絶無

レン「……………」

ひよの「すう…すう……………」

レン「……………ひよの。今だけは、お前だけが俺の癒しだ……………」

頭痛が痛いなあとか思っていたレンが口にできたのは、それだけだった。

店長「……………この状況じゃ、今日はもう店仕舞いかな」

レン「……………あそのゴミと、店中の液体は、こっちで責任持って始末付けるわ。ウチの愚妹が迷惑かけてスマン。」

店長「いいんだよ…半分はウチのスタッフのせいだから。ハハハハ」

レン「ケイト、モップとバケツ」

ケイト「ボクもやるんスカあ…??」

レン「頼む。手伝ってくれ」

ケイト「了解ッス♪」

目が死んでいる店長を哀れに思いながら、モップとバケツを調達する。

レナ「そう言えばこの人は誰なの？にー」

さっきのデュエルの時から外で観てたみたいだけど」

ケイト「気づいてたっスカ!?物音ひとつ立てて無いのに!？」

レナ「レナさん気配に敏感。」

ケイト「た…達人がいるッス!!自分はケイト・ヴァルゼルドッス。是非弟子にしてください!!」

レン「先輩として指導するんじやなかったんかい。」

ケイト「あ…!!あんまりの恰好良さについて…」

レン「莫迦…本物の莫迦め…………っ」

旧友のあまりの馬鹿さ加減に涙が出そうになったレンは、掃除ついでにケイトの脳みそも洗えないものかと本気で考え始めた。

その時、店の自動ドアが開いた。

店長「ん？ああ、申し訳ございませんお客様、誠に勝手ながら本日は早仕舞いに……………」

ドゴツ―

レン「ん？何だ、今の鈍器で人殴った時のような音は？」

レンが振りかえると、そこにはさっきの連中と同じく平中工業の制服を着た男が四人。そして…

???「…………ああ、俺がこいつを殴った音だよ…」

蛇柄の皮ジャンを着た男がいた。

飛娘「また新しい奴が来たアルか。そろそろ飽きてきたアル：ネつつ!!」

男達を見た王・飛娘は、店長を殴った男に向かって攻撃を仕掛けた。

レン「止せ！飛娘!!」

飛娘「アチョー!!」

迷わず男の頭をヌンチャクで狙い、振りぬいた。

しかし…

???「ぬうんつつ!!」

飛娘「おっと!」

その攻撃は、三人の制服の男達の中で最も大柄な男によって阻止された。

飛娘「誰アルか。雑魚は退いておくヨロシ。」

???「それは聞けぬ相談だ。大蔵司 王城（だいぐうじ おうじょう）。ワシが退く時は、この身が朽ちた時と知れい」

飛娘「だったら今すぐに朽ちるといいネ、この王・飛娘の拳で!!」

中国拳法の構えを取り、大宮司を睨む飛娘。

???「ヒヒヒツ…熱いねえ、全く暑苦しいよ。そんなに身構えなくたって、どの道君達はもうタダじゃ帰れないんだしさつ。ボクの複製した『パワー・ボンド』と、改造したデュエルディスクを見ちやっただももんね。」

そう言って陰湿に笑うのは、ひときわ背の低い男だった。

レナ「へえ…あのカードを作ったの、キミなんだあ」

???「ああ、そうだよ。僕は北城 才人（ほうじょう さいと）。キミ
なかなか可愛いね。スタイルも良いし。キミがボクの彼女になるな
ら、君だけはボク達の仲間にして助けてあげるよ!!」

レナ「そう?」

ケイト「え!? あっさり裏切るツスか師匠!! 可愛い顔して意外と薄情
者?」

少し乗り気に見える返答に、初めてレナに出会ったケイトだけが、
動揺した様子を見せた。

才人「ああ、大歓迎さ!!」

レナ「クス…でもごめんね。私こう見えて男の好みにちよつとうる
さいの。」

しかしすぐに態度を変えると、普段からは想像出来ないほど色気あ
る仕草と妖艶な目つきで微笑み、北城才人をからかって見せた。

才人「な、なんだとー!? ボクのどこがダメだって言うんだ!!」

レナ「クスクス。昔からあんまりカッコいい男性（ヒト）が周りに
居過ぎたから、贅沢になつちやつたのかもねえ。強いて言えば、犯罪
がばれた位で証拠隠滅しようとして慌てて来るような人は恋愛対象には
入らないわね」

才人「こ、こいつ…!! 言わせておけば!!」

レナ「ちなみに好みのタイプは、私より強い人よ。あなたはどうか
しら? 坊や」

才人「も、もう絶対に許さないぞおー!!!」

レナ「あ、ケイトちゃん。遅れちゃったけど、レナ・ファムグリッ
ト。高校一年生、レンくんの義妹です。」

今はまだ、もう少しにーと遊んでいたいから、お兄ちゃんにカノ
ジョが出来て欲しくないお年頃です。」

流れでケイトにも自己紹介したレナは、満面の笑みだった。

ケイト「…あ、あんなに可愛い笑顔なのに…同性でも惚れそうな
のに…なんでこんなに足が震えるんスカね?」

???「ふむふむ…」

それまで黙ってパソコンをいじっていた眼鏡と頭が光る中年の男

性が口を開いた。

??? 「ふむふむ。なるほど、分かりましたよ。

確かにその中国とポニーテールの女性は、伝説のデュエリスト『七皇』のようですね。」

レナ「……………」

レナ（……………七皇のデータなんて一般に転がってはいない。この短期間に国家の機密データにハッキングしたのかな？）

飛娘「…………お前達、一体何しに来たアル」

??? 「いえいえ、簡単なお話ですよ。

始め我々は、そこで黒焦げになってしている同朋から『赤髪のレン』が居たという連絡を受けて来たのです。」

レン「…………俺か？」

??? 「いかにも。始めまして、Mrレン。私はヤブイヌと呼ばれています。」

レン「…………始めまして、レン・ファムグリットです」

飛娘「律儀にアイサツ返すアルかアナタ!？」

レン「……………フン。」

レナ「にーって、その辺りきちんとしないと気が済まないんだよね。A型だからかな」

ヤブイヌ「さてさて、始めは貴方のデータが欲しかったのですが、『七皇』と呼ばれる彼女達のデータも欲しい。お付き合い頂ければ幸いですな。」

飛娘「データって、何アルか!!」

ヤブイヌ「もちろん、デュエルのデータです」

レン・レナ・飛娘・ケイト「デュエル!？」

ヤブイヌ「驚くことは無いでしょう?我々平中工業高校にも、デュエルの大会の出場を志す部活動があります。ならば、強いデュエリストやカードのデータを取っておくのは、常套手段ではありませんか。ホホホホ」

レン（解せねえ…………デュエルのデータが欲しいなら、何故最初のターゲットは俺なんだ?）

ヤブイヌ「さあ、我々とのデュエル受けていただけですか？丁度人数は四対四です。」

「もしも我々に勝ち越すようなら、どの道このままでは優勝は難しいので、皆さまへ手を出す意味は無くなりませんが？」

才人「ま、あり得ないけどね〜！」

レン「さっきのチビガキの言った『タダじゃ帰さねえ』ってセリフと言い、このヤブイヌってやつと言い……そしてな何よりも……」

レンは店長を殴った男に注目した。

レン「アイツの雰囲気……ありやどう見ても昔散々見て来た、人を殺したこと人間のモンだ。」

カードゲームで負けたヤツを殺すための人間か？

ケイト「どうしたツスか、レン君。黙っちゃって。…おなか痛いっすか？それともおなかすいたツスか？携帯食くらいならあるツスよ……？」

ケイトが心配そうにレンを見つめている。

飛娘「えええい!!しやらくさいネ!!受けてやるアル!そのデュエル」

レナ「…レナさんもやろっかな。最近全然デュエルしてないし」
レン「……………」

ケイト「レン君…どうするっすか？レン君がやりたくないなら、ボクがさつきみたいにして道作るツスよ…？」

レン「ちっ」

ケイト「舌打ち!?えっ、えっ!?何スか?どうしたんスカレン君!」
レン「もう面倒だ。後先考えて保身を選ぶのは、俺のやり方じゃねえ。俺もデュエルを受ける!!」

ケイト「???な、何か良く分んないっすけど、これボクも人数に入ってるんスよね?そのおじさん」

ヤブイヌ「ええ、もちろんそのつもりですよ。Mrレンの腕の中で眠る少女をカウントするのは、些か可哀そうでしょう。それとおじさんでは無い!!まだ19だっつ!!」

レン・レナ・飛娘・ケイト（留年してんのかよ……）

ヤブイヌ「まあいいでしょう。これで人数はそろいました。
それではさっそく、デュエルを始めましょう。……闇の、デュエル
をね。」

遊戯王 ～Fake Origin～10

英心「もう限界だ!!こんなところに居られるか、ワシは家に帰らせてもらう!!」

神を召喚した余波の影響で色々荒れていた教室の片づけをしていた朝倉 英心は、我慢の限界に達していた。

英心「だいたい何故ワシらが片づけなどせにやなんのじゃ!?元はと言えばあの貧乳部長の失態ではないかア!!」

鈴木「いーんじゃん?これ終わらなきや授業も出来ないんだし。ドラダラやって先延ばそーぜ」

英心「…………ダラダラと先延ばせば良いと言うものではない!!人生とは一瞬一瞬が貴重なのだ!!既に青春も未来も失われた教師陣達が教務室でコーヒー飲みながら腰を落ち着けている中、未来も希望も残されている我々若人が、馬車馬のようにこき使われる。このような事があつて良いものか!？」

鈴木「おーwせーしようねんの主張だわwwエーシン君マジで限界かww」

英心「こんなことをしていても、我々の未来は暗いままだ!!負の連鎖は永久に断ち切れることは無い。勃てよ若人!!今こそ性戦時だあああああああー!!!」

鈴木「色々言つてたけど、途中からエッチしたいっていう欲望しか見えなくなつたわ。んじゃコンビニ行くべ?袋とじでも求めてw」

英心「イク!!」

着々と生徒が逃亡して行くのだった。おそらく明日も授業は無い。

英心「…………そう言えば、今日はレンもファミ妹も姿を見ぬな。少し回り道して探してみるか。」

挑まれたデュエルから逃げるのはデュエリストの恥。受けないという選択肢は無い。

だが…

レン(…………勝とうが負けようが、こんな狭いところで囲みなんぎ会っ

たら、いくらレナでも木刀振れるスペースが足りねえだろうな。かと言って、奥の皮ジャンの男の相手は俺以外じゃ荷が重いかもしれない。それじゃあ戦えねえヤツを守れねえ。つーか火責めとかされたらマジでヤバいだろうな……よし。)

レン「オイ、とりあえず表出ろ」

飛娘・ケイト「ヒイツ!」

敵勢に言ったはずの言葉に、何故か飛娘とケイトがお互いに抱き合ってブルブル震え出した。その光景に、レンは頭を抱えて言う。

レン「……何でお前らがビビってんだよ?」

飛娘「い、いきなり何言うアルか!?怖いアル!! (ガクブル)」

レン「いや、お前さつきまでそこに転がってる不良相手に無双してたんじゃねーのかよ。何?実際に手エ出してくる不良(ヤツ)よりただ喋ってる俺の方が怖いのか?ちよつとショックだわ……」

ケイト「ま、また何かお仕置きされるのかと思つたツス……!! (ガクブル)」

レン「…そう思うなら自重しろやゴルア!!」

レナ「にー。大声出すと、ひよのちゃん起きちゃうよ?めっ」

つい大声をだしたレンを諭すように人差し指を出して注意するレナ。

レン「……まあいい。ここじゃ狭い。場所を移すぞ。文句ねえな、チャレンジャー」

ヤバイ又「ええ。構いませんとも。クッククッククック…」

才人「えくそんな必要ないよ。何で僕達があいつらの言うこと聞いてやらなきやいけないのさ!」

ヤバイ又「いいではありませんか。移る移らないで時間を無駄にすることもありませんよ。それと…赤髪のレンさん。ご心配なさらずとも、そこで山積みになされている者達含め、これ以上の増員はありませんので、とりあえずはご安心を。クッククッククック…」

レン (こいつ…)

ヤブイヌ「さてさて、それではご案内頂きましょうか。戦いの場へと」

レン達が店を出たころ、英心と鈴木は、買い物済ませコンビニを出た後に河原へ向かっていた。

英心「フッフッフ。大漁である。」

鈴木「……やっべーわ。オレまだ信じられない。エーシン君。どれも全部同じ袋とじのハズなのに……ハズなのに……」

朝倉のコンビニ袋はちきれんばかりに大量の本が入っている。

鈴木「何で同じ雑誌買ってんの？ってか何で買占めちゃったのwwww」

英心「この中の袋とじのどこかに、何かの間違いでアングルが異なる袋とじがあるかもしれないか。そうだったら、ワシはこの女優のパイオツを完全に堪能したとは言い難く、またワシ以外の誰かが堪能するのが許せないからだ」

鈴木「無いわwwwwその間違いは、まず無いってwwww」

英心「それならばそれで良いのだ。問題は『確かめる』ことだ。」
全く同じ雑誌を袋一杯に買占め、英心の財布は空になった。それでもこの男の顔は、極めて満足気である。

鈴木「後悔しないん？」

そう言われた瞬間、ほんの少しだけ英心の表情が変わった。

英心「……問題無い。やってすぐに頭を抱えるほど、あるいは絶叫して血の涙を流すほどの後悔が無いのだから、ワシは満足しておる。」

鈴木「……………」

英心「もう二度と後悔など、しとうないからのう。」

鈴木「そっかい。んじやそろそろ二人つても飽きたし、レナちゃんに連絡取ってみよっか」

英心「ほむん。一日一度はあのボインを拝まねばな」

鈴木「ハハハ。またレン君にブツ飛ばされるよw」

って、アレ？エーシン君。アレ、レン君達じゃね？」

英心「…む？」

レン「……こちらでいいか」

土を踏み慣らしながら辺りの様子を確認すると、上着を地面に置き、背負ってきたひよのをそっと寝かせる。

一行が移動して来たのは、大きな川の流れる場所だった。

才人「河原って…まるで不良の喧嘩みたいじゃないか」

ヤブイヌ「フツフツ。大変結構。モチベーションが上がる場所で戦って頂いた方が上質なデータが取れそうだ。」

レナ「それで、ルールはどうするのか。おじさん？」

ヤブイヌ「そうですね、一対一で戦って、先に三勝した方の勝ちとしましょうか。それとおじさんでは無い!!まだ19だッツ!!」

レナ「クス——先に説明してから怒るんだね」

ヤブイヌ「クツ…ゴホン。それでは、お互いに出る選手を決めましょうか。因みに、こちらは大蔵司君が出ます。」

そう言うと、敵側の一番ガタイの良い男が前に出て来た。

王城「我が名は大蔵司 王城（だいぐうじ おうじょう）!!平中工業3年、『関所の王城』である。我が望みは真っ向からの真剣勝負。我こそはと思う者は、この挑戦を受けられよ!!」

見た目通り大きなカラダに大きな声で、対戦相手を待ち受ける。

レン「へえ…おもしろそうだな。」

王城の真っ直ぐな言葉にニヤリと笑うレン。

レナ「意外と武人氣質なのかな。あの中じゃ一番いい人そう…かも？」

ケイト「真っ向勝負ツスか。レン君が一番好きそうツスね。」

レン「ああ、そうだな。」

指をバキボキと鳴らし臨戦態勢に入ろうとするレン。しかし——

飛娘「あ、あのっ!!レン…さん」

レン「あア？」

飛娘「ひい!？」

そこに飛娘が異議を申し立てた。

飛娘「あ、あのっ…出来ればこのデュエル、ワタシにやらせてほし

いアル」

レン「何でだ？」

飛娘「さつき攻撃防がれたのが悔しいアル」

王・飛娘。意外と負けず嫌いである。

レン「そうか。じゃあ行つて来い。」

飛娘「ありがとうネ!!行つてくるアルっ」

お許しが出た飛娘は、パアツつと顔を明るくして前に出た。

レン「フン：『ありがとう』って、ガキか」

ケイト「相変わらず、素直じゃないんスね、レン君」

レン「あ？何だ急に」

ケイト「最初から、あの中国の人に闘わせるつもりだったんスよねえ？レン君戦うって決めたら黙って相手に一発入れて速攻喧嘩するタイプだったじゃないツスカ。本当に優しくせに素直じゃないんスから」

レン「黙れ、ブツ飛ばすぞ」

ケイト「アハハっ。テレ隠してるレン君、可愛いツス♪」

レン「……………」

グリグリグリ。

拳を握って中指だけを少し尖らせて頭を挟んでグリグリする。

ケイト「うきやあああああぁー!!???痛いツス痛いツス!!これマジのやつツスよレン君っ!!」

レン「……………」

グリグリグリ。

ケイト「う…ううっ…痛いよお…っっ」

ボロボロと涙をこぼし始めたところに、レナが止めに入っつてその場は終息した。

レナ「女の子に泣くまで暴力振るっちゃダメっ!」

レン「ちっ……………」

レナ「反省の色が見えないなら、今晚もまた嫌いなおかずの反省メニユー出すからね?」

レン「だったら外で食う。」

レナ「じゃあレナさんがご飯抜きっ！」

レン・ファムグリットは、自分のせいで誰かが辛い思いをするのが許せない性分なのであった。

レン「……………」

こうして、レンは今日もレナの反省メニューを食うことになるのだった。

飛娘「…さっきの借りを返すネ。」

王城「うむ。七皇が相手だと言うのなら不足は無い！いざ、参られよ!!」

飛娘「七皇——NO・6 『剛拳』王・飛娘。推して参いる!!」

飛娘・王城「——デュエル!!」

遊戯王 ～Fake Origin～11

王城「我が名は大蔵司 王城(だいぐうじ おうじょう)!!平中工業3年、『関所の王城』である。

飛娘「七皇——NO.6 『剛拳』王・飛娘。」

決闘の形で向かい会う両者は、互いに盾となるデュエルディスクを構える。今はまさに二人の世界。

川を流れる水の音も、自身の肌を撫でる風の音も聞こえはしない。

その二人の間に、1人の男が歩み寄る。

レン「いつまでもガン飛ばしても埒が明かねえだろ。

ほら、中国。コインだ。先行・後攻はこいつで決めろ」

飛娘「……………」

飛娘は、レンからコインを受け取ると無言のまま僅かに会釈をする
と、すぐに王城に向き直った。

その表情はそれまでの飛娘からは想像も出来ないほど凛々しく、そして綺麗なものだった。

レン(ほう…良い集中力だ)

仲間のポテンシャルの高さを見定めて、心強いと感じたレンは——
レン「ところで名乗りの時に学校名言わんかったのは夜間つてことを知られたくなかったからか?それとも貧乏を隠したかったのか?」
的確に飛娘のコンプレックスをさらけ出した。

その一言で、飛娘の集中は一瞬で持って行かれてしまった。

飛娘「くくくッツ!!どうしてッ!!ここで、そういうこと言うアル
か——!ぶわあかあああああああああああ——!!」

すっかりいつも通りに戻った飛娘は、目に涙を浮かべながら、心底悔しそうな表情でレンを批難する。

ケイト「さ…さすがツス、レン君。空気を一切読まずに仲間の足を引つ張りに行つた…引つ張るどころか、もう大外刈りとか技掛けに行くレベルツス」

レナ「あ、あははは…飛娘ちゃん泣きながらグルグルパンチしてる
ね…中国拳法使いなのに」

飛娘「負けたらどうしてくれるネ!?ただでさえこのところ朝はバイトに夜は勉強で、デュエルしてる暇なんか無かったのに!うあああああーん!!」

レン「いや…中国がまともな人間っぽい表情しているのが気に入らなかった。後悔はしていない」

飛娘「懺悔しろ!!ワタシが負けたらお前のせいアル!!」

レン「だが断る。自分の負けを人のせいにするな、軟弱者め。負けたら裸にひん剥いてマネキンにするぞコラア」

飛娘「ヒドイ!!酷過ぎるアル!!やつぱりワタシあなた嫌いアルー!!!」

王城「……………もう、始めてもよいかのう…?」

遊戯王 〈Fake Orizin〉話

飛娘「ワタシのターン。」

コインの結果、王城が裏を当て、後攻を選択し、デュエルは始まった。

飛娘は少し困った顔をしながらデツキに手を伸ばし――

レナ「飛娘ちゃん!!先行はドロ―無しだよ!」

飛娘「あ……………わ、分かってるアル!!」

ケイト「ちよ……………まさかあの人デュエルのルール知らない初心者ツスカ!?!」

その危なげな様子を見ながら、その場に居るほとんどの者が疑問を覚えた。

それは、このデュエルを挑んできた敵側に特に顕著に映った。

ヤブイヌ（ルールの改定があったことを知らない…?いや、覚えていないほどデュエルから離れていたのか?）

どうやら先程の朝はバイトに夜は勉強という言葉にウソは無いようですね

飛娘「うう……………やりにくいネ」

飛娘は、自身の手札を見ながら困り顔でこの先の行動を考え始め

る。

レン「……………なあ、レナ」

レナ「何?にー。」

レン「お前らが名乗ってる『七皇』ってのが、オベリスクみたいな神のカードをシキってるのは分かったんだがよお、俺は一つどうしてもお前に聞いておきたいことがある」

レナ「聞きたいこと?それはいいけど、あんまり詳しいことは教えてあげられないよ?レナさんこれでも雇われてる人だから。サラリーマンには守秘義務もあるんだよ?」

レン「なんだよ守秘義務って…まあいい。そんなことより、アイツだ。」

レナ「飛娘ちゃん?」

レン「アイツ、何でルールの改定が頭に入ってねえんだよ。アツプデートが遅すぎるだろ。」

マスタールールが変わってから四季が過ぎてんだぞ?」

レナ「それは仕方ないよ。だって飛娘ちゃん、夜間の学校行ったり生活費稼いだりでデュエル離れてたんだもん。もしかしたらアツキも変わってないかもだし……………って、大変だねそれは」

レン「……………大丈夫なのか、あの中国は。」

あと、雇われてるのにバイトしなきゃ生活できないとか。どんなブラックだ。今すぐ取り潰してしまえ。」

王城「……………どうしたのだ。ずいぶん長考しておるようだ?」

飛娘「ぐぬぬ…先行って一体何すれば良いアル…??」

レン「だめだアイツ、早く殴って気絶させて選手交代しないと……………」

ケイト「やってくるツスカ?」

レナ「ダメだよ二人とも!?!ちゃんと見ててあげて!飛娘ちゃんも少しデュエルから離れて忘れちゃってるだけだよ!!」

飛娘「……………とりあえず、手札から『素早いモモンガ』を召喚」

素早いモモンガ

星2 地属性 獣族

1000/100

このカードが戦闘によつて破壊され墓地へ送られた時、自分は1000ライフポイント回復する。さらにデッキから「素早いモモンガ」を任意の数だけ裏側守備表示で特殊召喚できる。

飛娘「更に手札から永続魔法『強欲なカケラ』を発動シテ、ターンエンドアル。」

レナ「……………」

レナ（どうしよう。私まで不安になって来たかも。）

ケイト「攻撃力1000でリバースカードも無し。そしてカケラ。

レナさん、アレつてもしかして『遅延』系のデッキじゃないんスか？」

レナ「ど、どうかな…？昔はそういう構成じゃなかったけど。」

レナ（そもそも構成以前に何でモモンガを攻撃表示なんだろう…？手札誘発のコンバット・トリックにモモンガをサポート出来るカードなんて無いし…まさかグリーンバブーン狙い？いや、いくらマスタールール3に慣れて無くてもバブーンがダメーjistテップに召喚出来ない裁定なのは、それこそ私達がまだデュエルに触れていた頃から知ってたはずだし。うーん……………うん。全然分からないから静かに観ていよう♪）

王城「行くぞ！カードドロ。」

手札から速攻魔法『神の写し身との接触』（エルシャドール・フュージョン）を発動。

手札の『罫髑顔 天道虫』（どくろがん レディバグ）と『シャドール・ヘツジホッグ』を融合する。」

飛娘「——速攻魔法の融合カード!?そんなカードがあるなんて…何だか浦島太郎になった気分アル」

レナ「飛娘ちゃん、気を付けて！シャドールは強いよ!!」

飛娘「何はともあれ、ワタシには打つ手は無いネ…」

王城「影の映し身よ、冥府の生氣と一つになりて、地上の玉座に君臨せよ。」

融合召喚、大地の影絵『エルシャドール・シエキナーガ!!』

エルシャドール・シエキナーガ

星10 地属性 機械族

2600/3000

「シャドール」モンスター+地属性モンスター

このカードは融合召喚でのみエクストラデッキから特殊召喚できる。「エルシャドール・シエキナーガ」の①の効果は1ターンに1度しか使用できない。①：特殊召喚されたモンスターが効果を発動した時に発動できる。その発動を無効にし破壊する。その後、自分は手札の「シャドール」カード1枚を墓地へ送る。②：このカードが墓地へ送られた場合、自分の墓地の「シャドール」魔法・罫カード1枚を対象として発動できる。そのカードを手札に加える。

王城「ここで、素材にした『髑髏顔 天道虫』（どくろがん レディバグ）と『シャドール・ヘッジホッグ』の効果発動。

ライフを1000回復し、デッキから『シャドール・ビースト』を手札に加える。

王城「おそらく狙いはモモンガの効果によってそろそろ星2モンスター2体によるエクシーズかシンクロだろうが、それは諦めよ。このシエキナーガの関所は、貧弱なモンスターでは決して崩せはしない。」

飛娘「……そう思うなら、かかってくるヨロシ。」

王城「応ともよ！行くぞ、シエキナーガで攻撃!!」

シエキナーガ2600 VS モモンガ1000

王 飛娘 LP6400

飛娘「……この瞬間、モモンガの効果発動。ライフを回復して、モモンガを2体デッキからリクルートするヨ」

飛娘 LP7400

王城「無様だな。成すすべなくダメージを受けるとは。守備表示で出しておけば、ライフの回復だけが出来たものを……」

飛娘「そう思うアルか？」

王城「……策有りか？」

飛娘「バラすわけ無いアル。敵相手に」

ケイト「何か必死にプレミったのを誤魔化そうとしてるツスね。」

レン「……………」

レナ「……そっか。そういうことか。大丈夫かもしれない」

レナはここまでの状況を鑑みて、手札にとあるカードがある予測を立ててみた。

何故攻撃表示で無くてはいけないのか？それがひつかかっていたが、小骨が取れたようにスツキリした。

ケイト「えー？アレ大丈夫な奴なんスか??」

一方、レンの方も何か思い当たることが出てきていた。

レン「……………ケイト、お前携帯持つてるか」

ケイト「へ？あるツスけど……………この状況でメアド交換スか？全然歓迎ツスけど」

良いながらケイトはスマホを取り出した。

レン「ちよい貸せ。どこだコラ」

そう言うと、ケイトのカラダを弄り始めた。

ケイト「ふえっ!?!ちよ、ちよつとま……………何言つて…やつ!?!く、くすぐりたい……………あつ。そんな、何処さわってるツスか…んっつ!?!」

レン「?……………何だこのパーカー。内側のポケットの数が尋常じゃねえぞ……………ここか?いや、ここ?」

ケイト「あ……………ああつ!?!そこ違……………んんっ!!」

レン「何だこの小瓶？アロマか」

レンは勝手知ったる家のようにあつちこつちケイトのカラダを調べ、全く見当たらない。

ケイト「ひゃあ!?!……………レン君…顔当たつて……………んんっ!?!ちく…擦れて…やあつ!?!」

レン「またノーブラかよ。いくら幼児体型だからって、外出るときくらい付けとけよめんどくせえ……………(ゴソゴソ)」

ケイト「は、はいっ。ごめんなき——ひゃあつ!?!」

探せど探せどガムやらクツキーやら塩やらコシヨウやら液体の入った小瓶やスプレーにライターに酒瓶。更にはサバイバルナイフにレジャーシートに救急セットなどしか出てこない。

その内全身の筋肉が痙攣し自分の体重を支えられなくなったケイ

トは、レンの頭を抱くようにカラダを預け、更に口から落ちる滴が、レンの顔を濡らすようになるが、それでもみつからない。

レン「な…何でこんな余計なものばかり…」

ケイト「ら、らつてえ…何があるか分からないじゃないツスカあ…んんっ！」

このまま探していたら、見つけてはいけないものや、倫理上描写出来ない物まで見つけてしまうかもしれない。

レン「そんなもんでもいいから携帯はどこだよ!？」

とうとう自分で探すことを諦めたレンは、ケイトに自分から出すように促した。

ケイト「だ…からあ、最初から…持つてりゅじゃ…ないツスカあ…」

レン「あ?どこに持つてんだよ?」

言われて初めてレンはケイトの手に視線を向けるが、目当ての物は見つからない。更にもう片方の手を見ると。

レン「…あるじゃねえかよ」

すると、一連の状況を見ていたレナから、冷たい視線が注がれた。

レナ「……にー?どう見てもワザとだよね」

その目は兄を見る目では無く、煩惱にまみれた男子を批難する女子の目だった。

レン「……まあ、アレだ。俺もたまにはポケをかましたくなるんだよ。ウン」

思いつきりレナから目を逸らすと、ケイトからスマホを借りて操作し始める。

王城「……」

才人「……」

ヤブイヌ「……」

その間、敵側の男性陣数名が前かがみになっていた。

王城「……か、カードを一枚伏せて、ターンエンドじゃ」

大蔵司 王城 LP9000

手札3 場 エルシャドール・シエキナーガ ATK2600 伏せ
1枚
王 飛娘 LP7400
手札3 『素早いモモンガ』×2 『強欲なカケラ』

遊戯王 ｝ Fake Origin ｝ 12

レンの故意のようでその実は事故な行動によって、敵側の男勢は前かがみになっていた。

レン「まったく、あいつらデュエル中に何を考えているんだか」

飛娘「お前のせいじゃあああー!!」

当事者のレンの反応は極めて平常なもので、事故の被害者である少女、ケイト・ヴァルゼルドは少し放心状態だった。

そして、敵側の反応は男として顕著なものだ。

ただ1人を除いては…。

レン「……………」

皮ジャンの男「……………」

周囲が前かがみになっている中、店で店長を殴り倒した蛇柄の皮ジャンを着た男だけは危ない目をしたまま、レンを見据えていた。

レン「……………なるほどな。アイツ似てるわ。あの戦闘狂に……………」

ポカッ。

レン「ん?」

頭の方に衝撃を感じて振り向いて見ると、レナが拳を乗せていた。

レナ「にー! えつちなことしちや、めっ! ちゃんとケイトちゃんに謝らなきや」

レン「ん……………ああ、悪イ」

ケイト「あ、いえ。お構いなくツス。質素なものです…」

レナ「……………ありやりや。」

全く心の籠っていないレンを諫めようかと思ったレナだったが、顔を赤くしながらもどこか嬉しそうに笑うケイトを見て、どうやらその必要は無いのだろうと悟った。

大蔵司 王城 LP9000

手札3 場 エルシャドル・シエキナーガ ATK2600 伏せ
1枚

王 飛娘 LP7400

手札3 『素早いモモンガ』×2 『強欲なカケラ』

飛娘「と、とにかく仕切り直すネ。ドロー。」

この瞬間、強欲なカケラにカウンターが一つ乗るアル。」

強欲なカケラ カウンター0↓1

ケイト「これで次のターンになれば二枚引けるツスね…」

レン（わざわざモモンガを初手攻撃表示で来たのなら、おそらくこのカードが来る。

だとしたら、敵のカードは何を伏せたのか……。）

デュエルを観戦しながら、レンはケイトのスマホをいじりながら飛娘の戦略を予想していた。

もとい

ケイト「ああ、そうじゃないツスよ、レン君。そこはここを触れば…ほら、できた。」

レン「……………」

そもそも自分のスマホを持ち合わせていないレンは、ケイトにあれこれ教わりながら操作していた。

レン「何でこう機械つてのはややこしいんだクソツたれ」

ケイト「あ…そこ押したらダメっすよ。」

レン「なっ!?!何だ画面が真っ黒になったぞ!?!」

ケイト「大丈夫ツスよ、レン君。そういう時は…ほら、ここを触ってみて?」

レン「お、戻った。」

ケイト「カードの特徴さえ教えてくれれば、ボクが検索するツスよレン君?」

レン「嫌だ。俺がやる。あ、また画面が前の画面に戻りやがった!?!」
レナ「スマホの使い方分からないレン君、可愛いなあ〜」

そんなめんどくさい兄に、どう補正がかかっているのか、レナはまるで生まれたばかりの子犬か子猫を見ているように眺めている。

そんな時、デュエルを進めていた飛娘から声が上がった。

飛娘「よし!準備万端ネ!!このターンで終わらせるアル!!」

ケイト（あ、今何かフラグが立ったツスね……）

レン（あいつ…ヤムチャしやがって）

モンガで火力上げた後に物理で殴るつもりだったみたいっすけど、ウオリアーは強制効果だから出してもシエキナにやられるツス。かと言って先にガチガチガンテツをX召喚しても、火力が足りない……八方塞がりッスね」

才人の煽りと言う煽りを受けて、ついに我慢できなくなった飛娘は叫び出す。

飛娘「うああああーぐやじいネーー!!これじゃあ相手のエースを倒してワンショット・キルするというカッコいい勝ち方が出来ないアルーー!!」

才人「……………へ？」

飛娘は、全力で悔しさを体全体で表現した後、仕方ないと割り切つてプレイを続ける。

そこからは、もはや遊びも慈悲も無かった。

飛娘「むう…仕方ないからとりあえず、そこのおっかない人形は倒しておくアル。

魔法カード『地砕き』

王城「……………」

飛娘が発動した魔法カードに召喚された巨大な拳は、エルシャドー・シエキナーガの頭上に現れ、そのままゲンコツのカタチでシエキナーガを頭から押しつぶし、消滅させた。

跡に残る物は、肘から先だけ召喚された、何者かの腕だけだった。

シエキナーガの効果で『神の写し身との接触』をサルベージした

王城は、思わず口から出してしまった。

王城「な…何だこの情けない倒され方は…!？」

起こったことをそのままに話そう。

シエキナーガを召喚したら拳骨一発で破壊されてしまった。

王城「な、なんとということだ……」

飛娘「さあて、邪魔なモンスターも消えたところで、次に移るネ。

まずは『素早いモンガ』を二体リバースして一体に、魔法カード

『巨大化』を発動するアル!

巨大化

装備魔法

自分のライフポイントが相手より少ない場合、装備モンスターの攻撃力は元々の攻撃力を倍にした数値になる。自分のライフポイントが相手より多い場合、装備モンスターの攻撃力は元々の攻撃力を半分にした数値になる。

飛娘「ワタシのライフは7400そちらは9000アル。よって効果は攻撃力倍アル！」

巨大化の効果を受けたモモンガは、倍の大きさになり、攻撃力が上昇した。

正直巨大化という割には元の大きさが大したことは無く、巨大化と言うよりはメタボ化に近いものが有るが。

モモンガ ATK2000

レン「あ、あつた。」

飛娘がカードを発動した頃、ようやくレンも探していたカード『巨大化』の項目を発見した。

レナ「やっぱり巨大化狙いだつたんだねー」

ケイト「いや、あの人見た目スレンダーなのに物凄い脳筋戦法ツスね〜」

飛娘「そして巨大化してない『素早いモモンガ』に『ジャンク・シンクロン』をチューニング！」

王城「ぬううう!!ここに来るか」

飛娘「——限りなき研鑽の果て、大地^{かみ}をも穿つ拳士有り。

その拳は絆を持って、その一撃は仲間と共に——シンクロ召喚。

神殺しは未来のために——『ジャンク・ウォリアー』」

ジャンク・ウォリアー

閻属性 戦士族 星5

ATK2300 DFF1300

シンクロ・効果

「ジャンク・シンクロン」+チューナー以外のモンスター1体以上

①このカードがS召喚に成功した場合に発動する。このカードの攻撃力は、自分フィールドのレベル2以下のモンスターの攻撃力の合

計分アップする。

レン「あれは、シンクロ召喚か」

レナ「うん。条件の揃った『チューナー』と『非チューナー』の『レベルを足し算して合計がシンクロモンスターと同じ』ならエクストラデッキから召喚出来る召喚法だよ」

飛娘「ジャンク・ウオリアーの効果発動！『フレンドシップ・ハーモニー』」

ワタシの場合には、二体の素早いモモンガがいるアル！」

ジャンク・ウオリアー

2300+2000+1000=5300

才人「攻撃力5300だって!？」

ヤブイヌ「ふむ：しかし、全体の攻撃力が、王城君のライフポイントを上回るのは無かったようですね」

王城「ふうむ。しかし単体で我がライフを越えられぬとは、『剛拳』の名も、大したことは無いな。」

飛娘「それは仕方ないことアル。

ひ弱な人間にジャンク・ウオリアーの本気の一撃は耐えきれないアル。

だから死なないように手心を加えなければならなかったネ」

王城「……………」

飛娘『『剛拳』の名はあくまで拳の強さを称えるもの。それは人殺しに与えられるような勲章では無いアル。』

王城「大きく出たな、剛拳！その驕り、貴様の疵になると知れい!! 罨カード『和睦の使者』！」

貴様はこのターンワシとワシのモンスターに戦闘ダメージを与えられぬ。」

飛娘「ターンエンド」

大蔵寺 王城 LP9000

手札 4枚

王 飛娘 LP7400

手札 1

場 ジャンク・ウオリアー ATK5300 素早いモモンガ×2
ATK 2000 1000

王 飛娘のエンド宣言と共に、対峙する二人のデュエリストは不敵に笑った。

飛娘 王城

「さあ…本番はここからだ…!!」

遊戯王 ～Fake Origin～13

(おと…音が聴こえる。)

ワタシのターン、ドロロー!

(だれかがデュエルをしている。)

魔法カード発動!

(とても楽しそう。わたしもまぜてほしい。)

罨カード発動!

(どこでデュエルをしているんだろう?)

ターンエンド。

(どうしよう。デュエルが終わってしまうかもしれない。)

どこ?ここはどこ?)

さあ、本番はここからだ!

(だれかわたしをつれて行ってほしい。)

わたしにも見せて欲しい。このデュエルを。だれか……!)

『そろそろお昼寝も終わりの時間だ。さあ、目覚めろ』

(!!!?)

気が付くと、文月 ひよのは、でんぐり返しの途中のような格好に

なっていた。

ひよの「……………あ??」

大蔵寺 王城 LP9000

手札 4枚

王 飛娘 LP7400

手札 1

場 ジャンク・ウォリアー ATK5300 素早いモモンガ×2

ATK 2000 1000

強欲なカケラ

現在3ターン目、大蔵寺 王城 VS 王 飛娘 のデュエル。
王城のドローフエイズから。

互いに大型モンスターを召喚するもペースを掴みかねており、譲らぬ攻防を見せていた。

ひよの「もう、レンさんヒドイですー!!」

そんな中、外野の方でもちよつとした攻防が行われていた。

レン「スマン。なんか急にお前を叩き起こしてやりたい衝動に駆られてな。まあ良いじゃないか。ほら、アンタの大好きなデュエルをやってるぞ」

ひよの「それにしたつてあんまりですつっ!!いきなり足つかんで持ち上げるなんて。しかもあんな体制じゃ、ぱ、パンツ丸見えになっちゃうじゃないですか!!」

レン「いいじゃねえか滅るもんじゃ無いし。今時パンツくらい小学生だつて自分から見せる時代だぞ?」

ひよの「そんな爛れた貞操観念は滅ぼすべきです!第一坂上学園に入学した理由が登校中にパンツが見たいなんて人に言われたくないです!」

レン「何言つてやがる。酒には花とツマミ。喧嘩には出血つてくらい、青春とパンチラは切つても切れねえもんじゃねえか。こういうのが大人になった時ちよつとした話題に出来たりするんだぞ」

ひよの「そんな男子の爛れた欲望なんざ知らねえですよ!!」

レン「ところでレナ。今の状況つてどつちが有利なんだ?」

ひよの「あ、逃げた!」

レナ「手札にもよるけど、今のところ五分五分かな。飛娘ちゃんは場にモンスターがいて、それはどつちも戦闘で不利になるカードじゃないけど、ブラックホールでも使われたら巻き返しがかなり難しい。あつちの人はライフは多いけど、飛娘ちゃんは火力重視のデッキだから、ライフ9000や10000くらいなら、削りきれぬ。ただ、エルシャドールフュージョンが手札にあるから、少し苦しいかな。」

王城「行くぞ王 飛娘！スタンバイフェイズに手札から速攻魔法『神の写し身との接触』を発動。」

シャドール・ハウンドとドラゴンを融合し、『エルシャドール・ミドラーシユ』を融合召喚！」

エルシャドール・ミドラーシユ

闇属性 魔法使い族 星5

2200/800

「シャドール」モンスター+闇属性モンスター

このカードは融合召喚でのみエクストラデッキから特殊召喚できる。①：このカードは相手の効果では破壊されない。②：このカードがモンスターゾーンに存在する限り、その間はお互いに1ターンに1度しかモンスターを特殊召喚できない。③：このカードが墓地へ送られた場合、自分の墓地の「シャドール」魔法・罠カード1枚を対象として発動できる。そのカードを手札に加える。

王城「カード効果でシャドールが墓地へ送られたことで、ハウンドをチェーン1、対象を『ジャンク・ウオリアー』ドラゴンをチェーン2対象を『強欲なカケラ』として効果発動!!」

対象にされたカードに対し対抗手段が無い飛娘は、そのままエースカードの攻守変更を許し、ドロースーツも失ってしまった。

飛娘「これは…かなりキツイアルね…。」

王城「バトルだ！エルシャドール・ミドラーシユ でジャンク・ウオリアーに攻撃！『破滅の咆哮』」

ジャンク・ウオリアーDF1300 VS エルシャドール・ミドラーシユ ATK2200

王城「カードを二枚伏せて、ターン終了だ」

飛娘「ワタシのターン。ドロ」

レン「飛娘の場に残るは素早いモモンガ二体か…」

ひよの「でもまだ悲観する状況じゃないだけ儲けものですね。シャドール相手に『ジャンク・モモンガ』で挑んでるわりに、アドバンテージは飛娘さんに有る感じじゃないです？」

レナ「そうだねー。相手は手札〇枚で場にはエルシャドール・ミド

ラーシユ と伏せ二枚。モモンガを戦闘破壊したらこっちはライフ回復するだけ。それが二体だもん。下手に攻撃して場を悪くしなければ問題は――」

飛娘「手札から魔法カード『調律』を発動！ジャンク・シンクロンを手札に加えてデツキトップを墓地へ送るアル。」

レナ「……………も、問題は…」

飛娘「手札からジャンク・シンクロンを召喚。効果でモモンガを特殊召喚ネ！」

レナ「……………えつと……………」

言ってる尻から簡単に攻撃に移る準備に入る飛娘。剛拳に後退の文字は無いのだった。

レナ「問題はなんだつて？レナ」

レナ「……………」

かつての仲間のあんまりの猪突猛進ぶりに言葉を失ったレナに、レナは更に問う。

レナ「……………こんな調子で大丈夫か？」

レナ「……………」

レナ「おーい。レナ？」

レナ「……………ぐすつ。ひっく」

レナ「おい待て。さすがにお前のマジ泣きは予想外だぞ!？」

レナ「だって…にーが虐めるんだもん…グス」

レナ「つたく、泣きたいのは俺の方だ。おい、中国！」

飛娘「飛娘!!」

レナ「お前エルシャドル・ミドラーシユがいる限り特殊召喚がタータンに一度だけしかできないっての知ってジャンクロンの効果使ったんだらうな!？」

ケイト「何言ってるツスカレン君。あんな有名な召喚制限モンスタ―知らないなんて、素人じゃないンスから」

ケイトがそんなバカなことあるわけないという表情で飛娘の方を見る。

飛娘「…………何アルかそのしゃらくさい効果は!?それじゃあ、もうこ

のターンはシンクロ出来ないアル!!」

ケイト「とんだがっかり美人さんだったんスね。あの人…」

ひよの「七皇なのにあんな有名なカード知らないとは思わなかったです。」

仲間内からの物凄いきげすみの視線を浴びせられる飛娘。

レン「オメエこれで負けでもしやがったらその頭のボンボン引きちぎるぞ。特隊が負けて許されっと思うなよコラ」

飛娘「ひいつ?!?!そ、それは勘弁してほしいアルう!これはワタシの宝物ネ!!」

レン「だったら勝って来い!!」

飛娘「はいいいいいいーっ!!!」

レンの恫喝にも似たエールに怯えながらも、更に負けられない理由が増えたこのデュエル。心なしか場に居るジャンク・シンクロンとモモンガ達も怯えているように見える。

飛娘「でもこれ以上出来ることも無いし、モモンガを守備表示にしてターンエンド」

王城「ワシのターンだ。」

大蔵寺 王城 LP9000

手札 0枚

場 エルシャドール・ミドラーシユ ATK2200

伏せ×2

王 飛娘 LP7400

手札 1

場 素早いモモンガ×3 DFF100 ジャンク・シンクロンA

TK1300

王城「ワシのターンだ。ドロー」

「カードを引いた王城は少し考える。

ケイト「どつちも動かなくなっちゃったツスね。ボク少し飽きてきちゃったツス。」

レン「俺もだ。ケイト。攻撃型のデッキが攻撃失敗して手札失うと動きにくくなる。」

だつて言うのに相手が行動阻害してくるから、動くに動けなくなる。ここらで何かアクションを起こしてくれんと、退屈で死にそう
だ。」

レンはぼやきながらケイトの髪を遊び始めた。それを見た敵側の陣営は……

才人「けつ、何だよあいつ。あんな貧乳女が彼女なのかよ。羨ましくないぜ。イチヤついてんじやねえよ。リア充撲滅しろ」

ヤブイヌ「ええ、全くです。赤髪のレンは血に飢えた獣のような男だと聞いていましたが、その実只のスケコマシだったようですね……もげろ」

レン「えーっと、みつあみつてどんな形してたっけ？」

ケイト「ボクの髪の長さじゃ無理ツスよ。……あと、敵が物凄い形相でこつち睨んでるツスよ？」

レン「男子校つてのは、女に飢えるもんだろ。それが奴らの青春だ。どこかにエロ本でも落ちてれば喜々として拾うというのが、奴らの最大級の青春のカタチなんだ。」

そんなモチない男達を侮辱するかのような言葉に対し、それまで飛娘に相對していた大蔵寺 王城は、レンに目を向け、言い放った。

王城「安心するがいい、赤髪のレンよ。今準備は整った所だ。今この瞬間から。貴様が退屈だと言える時間は無いぞ」

レン「……何？」

王城「貴様はしらんだろうが、この世には道のカードが幾つも存在している。」

『大神災』を起こした三幻神は言うに及ばず、七皇達が持っているという、神に對抗する七つの力！」

レナ・飛娘「——!?!」

王城「さらに、三幻神に対をなす神も存在しているという噂だ。」

レン・ケイト「——!!」

レナ・飛娘は自身のカードに。そしてレンとケイトもまた思い当た

だ。ご褒美に水をやるう」

ケイト「えへへ褒められたツス……ゴクゴク」

レナ「ひよのちゃん、大丈夫？ 飲める？」

ひよの「有難うございます……ごくごく」

この有様を、飛娘は苦々しい表情で観る。

飛娘「な、なんてことアル。三幻神だけでなく、ナンバーズまで出てくるなんて……この町はどうなってるアル」

王城「ふん。貴様はヴォルカザウルスの熱に当てられていないのか」

飛娘「七皇はみんな特別なカードによって、モンスターの影響を最小限に抑えられているネ。この熱でワタシのプレイミスを誘おうと言う魂胆なら、失敗アル。」

王城「まさか。この程度でへばられては興ざめだ。死ぬのならば存分にヴォルカザウルスの炎を味わってからにしろ!!ヴォルカザウルスの効果発動!!オーバレイユニットを一つ取り除き、相手モンスターを破壊し、攻撃力分のダメージを与える！

素早いモモンガを焼き尽くせ!! 『マグマ・バーン』

『キュウウウウー!!』

飛娘「ぐあああああー!!?」

飛娘 LP 6400

王城「さらに、ヴォルカザウルスでジャンク・シンクロンに攻撃!! 『火炎砲台』」

ヴォルカザウルス ATK 2500 ジャンク・シンクロン AT
K 1300

飛娘「ぐうううっ!!」

飛娘 LP 5200

飛娘「ぐ……はあつ……さ、さすがに、ダメージまでは防げないアルね。」

王城「ほれほれ、早く何とかせんと、仲間諸共焼け焦げて死ぬぞ! フハハハ!

ターンエンドだ。」

大蔵寺 王城 LP9000

手札 0枚

場 ヴォルカザウルス ATK2500

伏せ×2

王 飛娘 LP5200

手札1

場 素早いモモンガ×2 DFF100

レナ「まずいなあ…かなり旗色が悪くなっちゃった。」

レン「そんなにまずいのか、今の状況。」

レナ「うーん…もし次のターンまでヴォルカザウルスが残ってたら、飛娘ちゃん、負けるかもしれない。なのに、相手はリバースが二枚。飛娘ちゃんの手札はまず魔法・罠破壊系のカードじゃないだろうし、厳しいね」

レン「何故魔法・罠破壊じゃ無いと思うんだ？」

レナ「飛娘ちゃんが地砕きでシエキナーガを破壊した時、ワンシヨットキルし損ねたって言ったのは…覚えてる…かな。にー？」

レナはほんの少し前の出来事に対し、もしかしたら覚えていないかもしれないという気持ちでレンに聞いてみた。

レン「……………なんとかな。」

その答えにほっとすると、レナは説明を続ける。

レナ「あれはきつと、『モンスターがいれば相手にダメージを与えることが出来る』カードだと思うんだ。」

それも9000あった敵のライフを削り取れるくらいのダメージになるカード。」

ケイト「それはありえそうな話ツスよ、レン君」

レン「あ？心当たりあんのか？」

レンが聞き返すと、ケイトはうなずき返して未だレンが持ったままのスマホを指でたどどしく操作する。

ケイト「……………これ。」

目的のカードが表示されると、ケイトはレンのカラダに身を預けるように眠った。

体力の限界がきたようだった。

レナ「うん。レナもこのカードが一番可能性高いと思う。」

レン「……………なるほどな。そりゃあ、キツイわな……………」

ケイトが見せたカードは、レベルの低いモンスターカードだった。たしかに、これならさつききのターンでケリが付いていた。和睦の使者が伏せられていたあの状況では、あまり意味のない仮定かもしれないが。

レン「このデュエル…負けるかもしれないな」

ラツシュ・ウオリアー

風属性 戦士族 星2

3000/1200

「ラツシュ・ウオリアー」の①②の効果はそれぞれ1ターンに1度しか使用できない。①：自分の「ウオリアー」Sモンスターが相手モンスターと戦闘を行うダメージ計算時、このカードを手札から墓地へ送って発動できる。その戦闘を行う自分のモンスターの攻撃力は、そのダメージ計算時のみ倍になる。②：墓地のこのカードを除外し、自分の墓地の「シンクロン」モンスター1体を対象として発動できる。そのモンスターを手札に加える。

飛娘「ワタシのターン。ドロー。」

飛娘は、自身の手札を見ていた。最初のターンから持っていたモンスターカード。『ラツシュ・ウオリアー』のカードを。

飛娘「……………」

七皇—NO. 6 王 飛娘。その戦術は、徹頭徹尾ワンショットキル。それ以外の戦術を良しとしない不後退（さがらず）の拳士。しかし、デュエル・モンスターズにおいて、攻撃札のみに頼ったデッキ構成は自身の不利な状況に対し恐ろしく脆さを露見させる。そして、対峙する敵側はしっかりと身を守る防御札を用意して、相手の行動の制限などを利用して上手く自分の有利な千強へ運んで行く堅実なデュエル。独りよがりの攻撃一辺倒なデュエルは、敵をリスペクトし、対

策を怠らないデュエリストには勝てない。それを相手との読み合いと一瞬の隙の探り合いの中で戦う『剣道』で天才と呼ばれたレナは知り尽くしていた。自分を凡才と語り、一夜漬けでカードの特徴や戦術を叩き込んだレンは、過去のギャンブル尽くしの生活から、対策を怠る愚かさと恐ろしさを思い知らされた。

なら、王 飛娘は……？

飛娘（とにかく、今はドローしたカードを確認……。）

そのカードを確認した飛娘に衝撃が走った。

飛娘「——これなら行ける！ワタシはモンスターカードをコストに、魔法カード『ワン・フォー・ワン』を発動！メインデッキからレブルーモンスター『ジェット・シンクロン』を特殊召喚。」

ヤブイヌ「これで場の合計レベルは5になった。ここから呼び出されるモンスターは……」

王城（ふん。大した問題では無いわ。ここで『ジェット・ウォリアー』を呼ばれようともな！）

王城「ならば『ジェット・シンクロン』の特殊召喚時、リバーカードドローン。」

『安全地帯』これをヴォルカザウルスを対象に発動する。」

安全地帯

永続罫

フィールド上に表側攻撃表示で存在するモンスター1体を選択して発動できる。選択したモンスターは相手のカードの効果の対象にならず、戦闘及び相手のカードの効果では破壊されない。また、そのモンスターは相手プレイヤーに直接攻撃できない。このカードがフィールド上から離れた時、そのモンスターを破壊する。そのモンスターがフィールド上から離れた時、このカードを破壊する。

レナ「……ここで安全地帯か。これが吉と出るか凶と出るか……だね。頑張つてね、飛娘ちゃん。」

飛娘「ふん。お前にいわれるまでも無いアル。レナ・ファムグリット。ワタシは、モモンガ二体に、ジェット・シンクロンをチューニング。不動の要はここに有り。調和と進化を繰り返し、我は竜へと昇華

する。シンクロ召喚。調和の使者 『T G ハイパー・ライブラリアン』」

王城「な…んだと。そのカードは…:…っっ!」

このデュエル。初めて大蔵寺の顔が青ざめて行く。

レン「…あのカードは確か、制限カードに指定されている奴だよな?」

なんかの雑誌で読んだんだが…死ぬほどメンドクサイことが書いてあったような…:…。」

その状況に今一つ理解が及んでいない初心者レン・ファムグリットは僅かに首をかしげる。

レナ「うん。戦術を研究する『学会』の戦術理論で、最も有名なソリティア理論の二大巨頭。『不動性ソリティア理論』の必須カードだよ。」

この世界には、デュエルに関する研究や実戦指導を行う機関が幾つ也存在する。

規模の小さいものは『塾』と呼ばれ、これが最も数多く存在する。学習塾などと同じくデュエルの理論や戦術を学ぶことが出来る。

その塾の中で特に優秀な成績を収めたものは、塾の推薦状をもらい『道場』と呼ばれる塾よりも規模の大きく複雑な勉強をすることが出来る場所へ赴くことが出来る。

大抵は山の上や砂漠のド真ん中など、普通なら人間が立ち寄らない場所に多く存在するため、推薦状無しでは場所の特定すら困難である。

更にその道場の中で師範代の資格を得た者の中で選りすぐりの者だけが入会を許されるデュエルモンスターズのエリートが集まり。それが『学会』なのである。

その学会のエリート達の中でも特に優秀なものの多くが研究の題材に選ぶのが『既に完成されているながらも時代と共に貪欲に力を喰らい、そのデッキは人の寿命すらも喰らい、もはや実際のデュエルには使用不可能』と言われる。究極の理論デッキを構築できる『満足ソリティア理論』と『宇宙の如く成長と膨張を止めず、決闘者の手を離れ

て進化し続ける、その真価を見るのは運命を支配する『超律者』のみ』究極の理想デッキの構築を目指す『不動性ソリティア理論』なのだ。

レナ「その不動性ソリティア理論の研究生は、優秀な論文と、実技試験での結果次第で、手に入れることが出来るカード。それこそが『TG ハイパー・ライブリアン』なんだよ。」

レン「ZZZ…ZZZ…」

レナ「にー？聞いてた…ねえ？」

レン「はっ…！お、おう。良い子のお昼寝の呪文のような説明アリガトウ。」

あやうく眠って焼け死ぬところだった。要するに、ウザいくらい長ったるい時間をかけて、アホみたいに勉強を繰り返した先にしか手に入らない、金持ちボンボンザマア(WWW)のスーパーレアカードつてわけだ。」

レナ「むう…なんか表現がすごく乱暴だけど…にーがそれで分かるんならいっか。」

レン「んで、そのガリ勉君御用足のカード効果は…つと」

TG ハイパー・ライブリアン

閻属性 魔法使い族 星5

2400/1800

チューナー+チューナー以外のモンスター1体以上

①このカードがフィールドに存在し、自分または相手が、このカード以外のSモンスターのS召喚に成功した場合に発動する。このカードがフィールドに表側表示で存在する場合、自分はデッキから1枚ドローする。」

レン「ふーん。まあ優秀なカードだな。でも中国のやつの手札は0じゃねえか。敵のシンクロに期待でもすんのかこれ？」

飛娘「フツフツフツ。そんなことでは不動性ソリティア理論の単位なんて未来永劫貰えないアルよ？レンさん。」

レン「欲しくねえ…俺、強いて言えば融合メインだし。ガリ勉とか勘弁してくれ。一夜漬けが毎日とか、イラつきすぎて目が合う人間片っ端から殴りに行きたくなるじゃねえか。」

飛娘「ひいつ!?と、ととと兎に角! レンさんは黙って観てるアル!!
今まで散々バカにされた汚名挽回ネ!!」

レン(手札〇枚からどうやってシンクロ召喚する気だか……。あと、汚名挽回は突っ込まないし突っ込ませない。)

飛娘「——ここからは、ずっと『オレのターン』ネ!!墓地から『ラッシュ・ウオリアー』を除外して効果発動!墓地の『ジャンク・シンクロン』を手札に加えて、通常召喚アル!更に、モモンガを特殊召喚!」
王城「ぬう…もう何度も観た効果だが…っっ!」

飛娘「さあ、真髄はここからアル!シンクロ召喚。アクセル・シンクロン。カードを一枚ドロ。そして今ドロした『レベル・ステイラー』を捨てて、墓地から『ジェット・シンクロン』を特殊召喚。そしてアクセル・シンクロンのレベルを一つ下げてレベル・ステイラーを特殊召喚。レベル1のレベル・ステイラーをとレベル1のジェット・シンクロンでチューニング。『フォーミュラ・シンクロン』をシンクロ召喚。ライブラリアンの効果発動、チェーンでフォーミュラ・シンクロン効果。で合計2枚ドロ!!」

飛娘 場

TG ハイパー・ライブラリアン ATK2400 星5

アクセル・シンクロン DFF2100 星4 (レベル・ステイラー影響)

フォーミュラ・シンクロン

DFF1500 星2

手札2

レン「——?!?!?は?おい、待て…」

レン(な、何だ!?!俺いつの間にか気でも失っていたのか!?)

飛娘「更に、魔法カード『調律』」

調律

通常魔法

①:デッキから「シンクロン」チューナー1体を手札に加えてデッキをシャッフルする。その後、自分のデッキの一番上のカードを墓地へ送る。

飛娘「手札に加えるのは、もちろん『クイック・シンクロン』その

後トップを墓地へ。手札の『チューニング・サポーター』を墓地へ送り、クイックロンを特殊召喚。ハイパー・ライブラリアンのレベルを下げて、レベル・ステイラーを特殊召喚。レベル・ステイラーとフオーミュラ・シンクロンでシンクロ召喚。星3『霞鳥クラウソラス』。1枚ドロ。」

レン「な、何がどうなってやがる…なんか気持ち悪くなってきたぞ」
飛娘「フツフツフ。この程度でスピード酔いアルか？レンさんも意外と意気地なしアルね！」

レン「ああ!?!んだとコラア！誰がスピードで酔うか。こつちとら今でも現役で走り屋だバカ野郎!!」

レナ「まだそんなことしてたの？にー。危ないからやめてって何度も言ってるのに……。」

レン「あ”しまった…——してません。」

飛娘「さあ、まだまだスピードを上げて行くアル！」

王城「おのれ…!!貴様いつまで続けるつもりだ!!」

飛娘「ワタシが満足するまでアル。喧嘩売って来ておいて、ヴェーラーも握ってないなんて甘ったれたこと言わないヨロシ。クイックロンのレベルを下げてレベル・ステイラーを特殊召喚。そして霞鳥クラウソラスとステイラーにクイックロンをチューニング。——戦士達の主はここに。蔑まれし非力さを武器に昇華し、今指導者が君臨する。シンクロ召喚。『ロード・ウォリアー』。」

ロード・ウォリアー

光属性 戦士族 星8

3000/1500

「ロード・シンクロン」+チューナー以外のモンスター2体以上

①：1ターンに1度、自分メインフェイズに発動できる。デッキからレベル2以下の戦士族・機械族モンスター1体を特殊召喚する。

飛娘「1枚ドロして、ロードの効果発動。デッキからシンクロン・キャリアーを特殊召喚。そして手札から、三枚目のジャンク・シンクロンを通常召喚。」

レン「おい待て、お前さつきジャンク・シンクロンを召喚してなかつ

たか!？」

飛娘「シンクロン・キャリアーの永続効果。通常召喚に加えてシンクロンモンスターを通常召喚可能アル。」

レン「…もう俺は着いていけない。メインフェイズが終わったら起こしてくれ。」

ヴォルカザウルの炎ですっかり炎の絨毯になりつつある芝生に何の迷いも無く寝そべり始めるレン。

レナ「ちよ!?ダメだよ、にー。火傷するよ!？」

レン「大丈夫大丈夫。俺、神龍に頼んで熱湯300℃まで耐えられるカラダにしてもらってるからよ」。

レナ「鉄でも溶ける温度だよ!?そんなカラダ上島隆平ぐらいしか喜ばないよ!!っていうか神龍って何!?ツッコミどころが多すぎてレナ1人じゃ捌けないよ!正気にもどってー!!」

飛娘「むう…外野がなんだか不味いことになって来たアル。やつぱりこの熱さは常人には辛いアルね。早く終わらせないと。アクセル・シンクロンの効果発動。シンクロン・エクスペローラーをデッキから墓地へ送り、レベルを2下げて星2にする。

シンクロン・キャリアーとチューニング。星4 『波動竜フォノン・ドラゴン』

ハイパー・ライブリアンでドロー。そしてロード・ウォリアーのレベルを下げてステイラー。ジャンクシンクロンとシンクロして『アームズ・エイド』召喚。ドロー。ロードのレベルを下げてステイラーを特殊召喚。」

王 飛娘 LP 5200

手札2枚

『ロード・ウォリアー』 ATK3000 星6

『波動竜フォノン・ドラゴン』 ATK1900 星4

『TG ハイパー・ライブリアン』 ATK2400 星4

『アームズ・エイド』 ATK1900 星4

『レベル・ステイラー』 DFF0 星1

飛娘「さあ、そろそろ関所崩しを始めましょうネ……。」

レン「……………七皇すげえ」

遊戯王 ～Fake Origin～14 NO.

106 消火する剛拳

燃えている。

…燃えている。

…燃えている。

何が……？

真つ赤な水に濡れた、白いナニか。でも焦げていく。焦げて行く。黒く、黒く、黒く……。

「何故だ……」

「なんだよ……お前まだ泣けるんじやん。」

チリチリと燃えている。自分の身体が。

「……俺は……また……」

「お前は生きろよ？総長としての命令だ。」

その言葉を最後に、白いナニかは息絶えた。

「……また……護れなかった……」

次回、炎の総長。【世代交代】。お楽しみにね♪

「……ZZZ」

「……にー！こんなところで寝たら焼け死ぬよ!?!」

「……んあ？」

「……だいじょうぶ？焦げてない？」

「……昨日見たアニメの夢視てた」

「……はい？」

「……前回のあらすじ」

「……バトルフェイズに起こしてお」

「……」

「……ま、ちよつと運命力が有ればこんなもんアル。」

「……な……七皇すげえ……」

「……飛娘 LP 5200」

「……手札2枚」

『ロード・ウォリアー』 ATK3000 星8

『波動竜フオノン・ドラゴン』 ATK1900 星4

『TG ハイパー・ライブラリアン』 ATK2400 星5

『アームズ・エイド』 ATK1800 星4

『レベル・ステイラー』 DFF0 星1

王城「……………」

大蔵寺 王城 LP9000

手札 0枚

場 ヴォルカザウルス ATK2500 (安全地帯 対象)

伏せ×1

安全地帯

王城「……………どうしてだ。何故あの状況からこうなった!？」

飛娘「フッフッフ〜これが七皇のカアル! ひれ伏すがいいネ!
ワーツハツハツハツハハ!!」

レン「おい、中国」

飛娘「どうしたアルか、レンさん。……………はっ。これはもしかして、ワ
タシの余りの凄さにとうとうワタシのことを名前で呼ぶ気になった
アルか!？」

レン「いいからさっさとヴォルカザウルスを倒せ!! 幼女が焼け死ぬ
だろうがバカ野郎!!」

ひよの「うう…幼女じゃない〜……………」

飛娘「あ……………」

大蔵司 王城がヴォルカザウルスを召喚してすでに10分が経過
していた。

もちろん今でも火炎地獄祭りは絶賛継続中で、その炎の勢いは衰え
ることを知らない。

気絶から目が覚めて数分で熱にあてられて脱水症状寸前のひよの
は、レンがなんとか水を与えてギリギリの淵で堪えているが、これ以
上続けば命の保証は無い。

王城「愚かな！ヴォルカザウルスには『安全地帯』が在ることを忘れたか!!」

飛娘「ふはははははー!!そんなもの。今から出すカードの前では無いも同然ネ!!ワタシにはお前の絶望に歪む顔がハッキリ見えるアル。聞いて驚け見てひれ伏すネ!これぞ大型モンスタービートのワシマンショー」

レン《——調子こいてんじゃねえぞゴルア。さっさと殺れ——!!》

飛娘「——ひいッ????の、脳内に直接!!目が霸王みたいに成ってるアル!!これ以上は命が危ないネ。あわわわわわ!?て、てて手札から魔法カード『サイクロン』を発動!!これで『安全地帯』を破壊すればワタシの勝ちネ!!ほ、ほらレンさん。ワタシちゃんと勝ったアル!!倒したアルよ!!」

とうとうレンの怒りと殺気が脳内に直接言葉を届けるほどになり、命の危機を感じ始めた飛娘は、さっさとサイクロンを発動してしまふ。ショーも減つたくれもあつたものではない。

王城「関所を舐めてもらつては困る。リバースカードオープン。『ナンバーズ・ウォール』!!」

ナンバーズ・ウォール
永続罫

自分フィールド上に「N.O.」と名のついたモンスターが存在する場合に発動できる。このカードがフィールド上に存在する限り、お互いのフィールド上の「N.O.」と名のついたモンスターは、カードの効果では破壊されず、「N.O.」と名のついたモンスター以外との戦闘では破壊されない。自分フィールド上の「N.O.」と名のついたモンスターが破壊された時、このカードを破壊する。

飛娘「……これつて、まさか……!?!」

王城「これで、ワシのナンバーズは破壊されない!!よつて、『安全地帯』は破壊されるが、ヴォルカザウルスは残る」

飛娘「うわあああああああー!?!」

レン「おい、誰が勝つたつて?」

飛娘「ひいいいいいいいいー!?!?ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい!!!」

レナ(何で『NO.』専用のサポートカードなんか持つてるんだろう?)

飛娘「いや、落ち着くアル。まだこつちには手札を増やすチャンスはあるアル。もう一度シンクロして次のドロウに賭けるネ」

『ロード・ウォリアー』 ATK3000 星6

『波動竜フォノン・ドラゴン』 ATK1900 星4

『TG ハイパー・ライブラリアン』 ATK2400 星5

『アームズ・エイド』 ATK1900 星4

『レベル・ステイラー』 DFF0 星1

飛娘「フォノン・ドラゴンとレベルステイラーでチューニング！シンクロ召喚。HSRチャンブライダー!!」

王城「まだシンクロを続けるか。しかし良いのかな?このままではお仲間が焼け死ぬぞ?」

飛娘「ウルサイ!!こつちの命も大概大ピンチネ!!ライブラリアンでドロウ。」

王城「ふん。無駄な足掻きをしているが良い。」

飛娘「……ぐつ、来ないアル。仕方ない。場のアームズエイドの効果発動。HSRチャンブライダーに装備。攻撃力1000上昇」

HSRチャンブライダー ATK3000

飛娘「このままバトル。まずはチャンブライダーでヴォルカザウルスに攻撃!。ダメージステップに効果発動。攻撃力が200アップ!」

HSRチャンブライダー

星5 風属性 機械族

2000/1000

チューナー+チューナー以外のモンスター1体以上

自分は「HSRチャンブライダー」を1ターンに1度しか特殊召喚できない。①:このカードは1度のバトルフェイズ中に2回攻撃できる。②:このカードが戦闘を行うダメージステップ開始時に発動す

飛娘 「ぐうううああああーっ??」

飛娘 LP 2200

王城 「ヴォルカザウルスで、ライブラリアンに攻撃!!」

ヴォルカザウルス ATK 2500 VS ライブラリアン ATK 2400

飛娘 「うあああああー!!」

飛娘 LP 2100

王城 「カード伏せ、ターン終了。」

王城 LP 6700

手札 0

場 ヴォルカザウルス ATK 2400

ナンバーズ・ウォール 伏せ×1

飛娘 LP 2100

手札 3枚

『HSRチャンバライダー』 ATK 3400 星5

飛娘 「う……うう。ゴホ、ゴホッ。」

レナ 「まずい…護りの効力が切れちゃってる。ヴォルカザウルスの攻撃に耐えきれなくなっちゃったんだ」

ヴォルカザウルスの攻撃を受けた飛娘は、いつのまにか身体も服もボロボロになってふらついていた。

更に、前のターンにかなりのシンクロ召喚を行ったことで、エクストラデッキの枚数は半分を切っている。

カード同士のシナジーを持ってデッキを展開しエクストラデッキからのモンスター召喚をメインとする飛娘は、心身に加えて、デッキまでボロボロになっていた。

レナ（飛娘ちゃんの残りのエクストラデッキ枚数は最高で7枚。『七皇しか所持していないカード』が二枚）

既に大量の中級シンクロモンスターを吐き出していることと、不動性ソリティア理論の目指すデュエルを考えれば、多分残っているのはシンクロ召喚の境地に位置するような召喚条件に重い制限があるようなカード……。

多分一枚はそういうカードがある筈。『永久に揺るがぬ決意（クリア・マインド）』の中でのみデュエリストが創造と召喚が出来ると言われる『アクセル・シンクロモンスター』が最低1枚くらいあるかもしれない。

けど、今その召喚を狙えるかは怪しい。

だとすれば、現状飛娘ちゃんが現実で鑑みて使用できるカードは、残り5枚。いや、エクシーズが入っていれば、さらに少ないかもしれない。現状で彼女が同レベルのモンスターをそろえるのは、多分それなりに手間なはず。せめて『あのカード』が引ければ……。）

レン「……………」

レナ「……?にー??」

ふとレンの方を見たレナは、レンがなにやら呟いているのが見えた。その手に有るのは、一枚の黒いカード。その目はいつに無く真剣で、その表情は、仲間を救いたいと願う少年のものだった。

レン「——契約の名の下々が命じる。」

廻れ、運命のダイス。」

飛娘「うぐ……わ、ワタシのターン……つつ。」

レンが何かを言い終わった瞬間、飛娘のターンが始まり、右手がデッキに届けられる。

視界の脇には、熱にやられ意識を失った仲間達。もう、外せない――

レン「……………さあ、目覚めよ。剛拳の切り札よ。」

飛娘「ドロー!!」

力強く、美しく、デッキから解放放たれる一枚のカードは、彼女の切り札を呼び起こす逆転の一手。

飛娘「こ、このカードは!!」

レナ「まさか、本当に……!?!」

ヤブイヌ（……何だ?何を引いた?この局面でヴォルカザウルスを倒せるカードを引いたのか?）

王城（だが無駄じゃ。ワシのリバースカードは、どんな状況でも対処可能!!）

飛娘「——ワタシが引いたカードは、これネ。」

ヤブイヌ「(自ら手札を公開したのだと!?)」

王城「慢心のつもりか! わざわざ手札を公開するとは」

飛娘「このカードは、強すぎるアル。故に我々は、このカードを使うに当たって制限を定めたネ。デュエル中に一度だけ効果の適用を許すこと。ドローしたこのカードを相手に公開すること。」

メインフェイズの開始時に発動すること。」

王城「何だ……そのカードは? R U : マジック?」

レナ「本当に引いたんだ……三幻神の戦い以降、七皇の誰も『引けなかった』カードを」

飛娘「ワタシが引いたのは『R U M — 七皇の剣』(ランクアップマジック—ザ・セブンス・ワン)!!」

R U M — 七皇の剣

通常魔法

自分のドローフェイズ時に通常のドローをしたこのカードを公開し続ける事で、そのターンのメインフェイズ1の開始時に発動できる。「C N O .」以外の「N O . 1 0 1」〜「N O . 1 0 7」のいずれかをカード名に含むモンスター1体を、自分のエクストラデッキ・墓地から特殊召喚し、そのモンスターと同じ「N O .」の数字を持つ「C N O .」と名のついたモンスターをその特殊召喚したモンスターの上に重ねてエクシーズ召喚扱いとしてエクストラデッキから特殊召喚する。「R U M — 七皇の剣」の効果はデュエル中に1度しか適用できない。

飛娘「このカードの効果により、ワタシはデッキから

オーバーハンドレット・ナンバーズを召喚する!!」

王城「お、オーバーハンドレット……」

才人「ナンバーズだつて!」

飛娘のメインフェイズに入った瞬間。七皇の剣から凄まじい光が飛び出し、大空へと舞い、七つの星へと姿を整える。その配置は、まるで星座のようだ。そして、七つの星の内の一つが一層激しく煌めくと、何かが地上へ降りて来た。

飛娘「握れ、握れ、握れ。敵の力も、命も、降伏する意思すらも。掌握（にぎれ）。握り―潰せ。」

現れる。No. 106 巨岩掌ジャイアント・ハンド !!」

No. 106 巨岩掌ジャイアント・ハンド ATK2000

ヤブイヌ「こ、これがかつて三幻神に挑んだ七皇達が、自らの切り札を召喚するために使用した召喚の媒体と、その切り札：!!まさかナンバーズだったとは!!」

王城「だ、だが攻撃力は2000。しかも正規召喚でも無く、オーバレイユニットすらも無い!

これではただデカイだけの手だ!!」

そう、No. 106 巨岩掌ジャイアント・ハンド の姿は、巨（お）きく、ゴツゴツした岩の右手。

そのままではただの攻撃力2000のモンスターだ。

レン「あれが、中国の切り札か?」

レナ「そうだよ。そうだけど、アレはまだ第一段階。」

レン「第一段階?」

レナ「そう。七皇の剣は、二度煌めく。NO. に新たな力を与えるために。」

飛娘「さあ、活目せよ。七皇の星が二度煌めく時、大地に仇成すものならば、己がカラダをカオスに変えて、剛なる裁きを下さらう!!
No. 106 巨岩掌ジャイアント・ハンドをランクアップ・エクスィーズ・チェンジ!!

溶岩流の赤き剛炎、『CN0. (カオス・ナンバーズ) 106 溶岩掌ジャイアント・ハンド・レッド』

飛娘「これこそが、七皇の切り札、カオス・オーバーハンドレット・ナンバーズ。」

三幻神の横暴から世界を守った七皇の剣の姿アル。」

王城「ま、まさかランク5のナンバーズを手札一枚で呼び出すとは……!!」

飛娘「もう、余計なことは言わないネ。バトル。CN0. 106

溶岩掌ジャイアント・ハンド・レッドで、ヴォルカザウルスを攻撃。
『溶岩掌・煉獄』!!」

CNO・106 溶岩掌ジャイアント・ハンド・レッド ATK2
600 VS ヴォルカザウルス ATK2500

王城「ば、バカなあああああ!!」

LP6600

飛娘「永続罫のナンバーズ・ウォールは、NO・と名の付くモンスター同士の戦闘以外でのNO・の破壊を防ぐ。

でも、CNO・はNO・のモンスターでもあるネ。

よって、自身の効果により、ナンバーズ・ウォールも自壊するアル」
更に、ヴォルカザウルスが破壊されたことで、辺り一面の炎も消火されて熱も逃がされ始めた。

レン「こ、これで：ようやく火が消えた：：：か。」

仲間の安全を確認したレンは、今まで涼しい顔をしていたのがウソのように汗を掻きはじめた。

レナ「レン君、大丈夫!」

レン「あ、ああ。ハア：ハア：へ、平気だ。」

よく視ると所々火傷やソレに近い痕があるレン。

殆ど距離が離れていない中、逃げ出すことも出来ない温度と大きさの炎に囲まれて、自身はひよのを寝かせていた上着を今度はケイトとひよのをなるべく炎の熱から護るために使っていた為にずっと半袖姿のままだった。

この条件で火傷をしない方がおかしいのだ。

レナ（もう、やっぱり普通に無理してたんだ。あんまり自然だから私でも気付かなかった。やっぱりこの人は目を離しちやダメだね……それと）

レンが突然取り出した黒いカードとの関連性も気に成るところではあったが、病人が3人になった以上、一層気が抜けなくなったレナは、三人の看護に意識を向けた。

飛娘「行け、チャンバラライダー!!この攻撃で終わりアル!!自身の効果で攻撃力上昇!!」

王城「ここで負けるわけにはいかん!!カウンター罠『真剣勝負』。これでチャンバラライダーを破壊」

真剣勝負

カウンター罠

ダメージステップにモンスターの効果・魔法・罠カードが発動した時に発動できる。その発動を無効にし破壊する。

飛娘「…カードを一枚伏せて、ターン終了ネ」

王城「おのれ…ワシのターン。」

飛娘(何を引いても、私にはCNo. 106 溶岩掌ジャイアント・ハンド・レッドがいる。

このカードの前では、いかなる魔法も、罠も、モンスター効果も…無意味。)

CNo. 106 溶岩掌ジャイアント・ハンド・レッド

ランク5 地属性 岩石族

2600/2000

レベル5モンスター×3

このカードが「No.」と名のついたモンスターをエクシーズ素材としている場合、以下の効果を得る。●1ターンに1度、魔法・罠・効果モンスターの効果がフィールド上で発動した時に発動する。このカードのエクシーズ素材を1つ取り除き、このカード以外のフィールド上に表側表示で存在する全てのカードの効果をターン終了時まで無効にする。

大蔵寺 王城LP6600

手札1枚

真剣勝負の時には、スペルスピードの問題で発動出来なかつたが、現在王城に伏せカードは無い。よって、スペルスピード3のカウンター罠の発動は不可能。更に手札は一枚。盤石だ。

王城「モンスターを伏せて、ターン終了だ。」

ただひたすらに疾走（はし）り、爆走（はし）り、紛争（はし）り
……未来（マエ）に進んだ。

俺には安息など必要無い。俺には平和など必要無い、俺には……家族
なんかイらない。

求めるは命を縮める闘争。求めるは血飛沫が舞う致命傷（キズ）。
それだけしか無い。

だから走り続けた。命ある限り前に。命を削って生命を攻め切る。
命を失うまで、止まることの無い鼓動。

その時の俺の瞳は……狂気に塗れていただろうか？あるいは何も写
すことの無い虚空だったのか。

そんなイキザマを数年続けたある日……伝説と言う言葉を聞いて……
俺はカードを手取るようになった。

昔の俺は、デュエルをしても頑なに自身のデッキを持つとうとは
せず、手近な敵のデッキをディスクごと強奪し戦っていた。どんな武
器（デッキ）でも扱い切れる。

だから本来俺にはデッキを持つている必要は無かった。
ふと眼を閉じる。目の前には鏡が在って、俺の手の中には何も無
い。

だが、鏡の中に居る俺の手にはデッキが握られている。それはまる
で生まれたころから一緒だったかのようなデッキ。それを持つてい
る。持つて鏡の中に居る。鏡の中に居る。

居る。
イる。

??? 「……………才前ハ、誰ダ……」

飛娘と王城のデュエルが終盤に差し掛かった頃。

飛娘 LP 2100

手札 2枚

CNo. 106 溶岩掌ジャイアント・ハンド・レッド ATK 2

600

伏せ一枚

大蔵寺 王城 LP 6600

伏せモンスター×1

長かったデュエルも終盤に差し掛かった。

王 飛娘の手札は2枚。場にはカード効果の発動時に表側の全てのカード効果を握りつぶす溶岩掌。そして伏せカードが一枚。

一方、相手は伏せモンスターが一枚。

この状況で多少のライフ差はアドバンテージにもならない。それがデュエルモンスターズ。デュエリストの日常。

敵側のギャラリーは全員諦めムードであり、飛娘も勝ったつもりでいる。

だが、この場に1人だけ、未だ飛娘の勝利を確信できないデュエリストがいた。

レナ「……………」

味方側で唯一無傷のレナ・ファムグリットだけが難しい顔をして、大蔵司 王城の一手一投足を観察していた。

レナ（この状況、飛娘ちゃんの勝ちはかなり近い…。ただ、気になるのは飛娘ちゃんの手札。

1ターン前には伏せカードなんて伏せなかったのに『七皇の剣』を使った後に伏せたってことは、既に手札に持っていたということ。飛娘ちゃんのデッキはシンクロデッキ。なら、あの伏せカードがエクシーズのサポート用カードとは考えにくい。前のターンに明らかに劣勢だったのにリバースを伏せなかったのは…何故なのか）

飛娘「ワタシのターン、ドロ。」（モンスターが来ない…手札にも無い。仕方ない。壁だけでも削る！）

飛娘「このままバトル！ジャイアント・ハンド・レッドで攻撃」
溶岩の如き灼熱の腕が、秘められたモンスターの姿を暴きだし、襲
い掛かる。

伏せられていたモンスターは…

『マスマティシヤン』

王城「このカードが戦闘で破壊された時、カードを一枚ドロー出来
る。ドロー」

飛娘「たかが一枚のドローくらい…っ。ターンエンド」

王城「ワシのターンだ!!ドロー」

王城の手札は二枚。

ここで何も出来ずにいれば飛娘の勝率は跳ねあがる、だと言うのに
焦りは見せずにいる。

一方飛娘も自身の三枚の手札を見て口元をほころばせる。

王城「…ワシはリバースカードを二枚伏せてターンを終了する」
場に伏せられた二枚のカード。それは、ただのリバースカード。解
き放たれるその瞬間まで明かされることの無いデュエリストの闇。
一定の警戒は当然であり、それを怠るならばデュエリストでは無
い。

しかし、その二枚のカードに尋常ならざる殺気を感じ取った者が1
人いた。

飛娘「苦し紛れのリバースカード。フフっ。もはや万策尽きたアル
ね!!アツハツハツハツハッハー!!」

レナ「飛娘!!」

飛娘「——ツツ!??」

敵勢の男達「コ——!???」

——レナ・ファムグリット。

天才と称される剣道の腕を持ち、文武両道・才色兼備の成人に成り
きっていない少女。

その姿は可憐にして美しく、年齢相応の幼さと年齢不相応の色香を
醸し出す彼女の笑顔に虜になる男は、近所の小学生から軟派な大学生
や、手を出せば明らかに法律で罰せられる年齢の者たちまで数知れな

い。

誰が想像するだろうか？そんな彼女の表情が今——戦場を駆け抜け死線を潜り抜けた『戦士』を連想させるほど厳しくも凜々しいもの変わることを。

あまりにも平常と違いすぎるレナの雰囲気に、敵側である男達は勿論、仲間の飛娘ですら腰が引けている。これでもし彼女の声質が少女よりも女性のものに近いものであったならば、王 飛娘はその場でへたり込んでいたことだろう。

レナ「いつまで思いあがっているつもりなのよ！自分の置かれてる状況が判断出来なくなるほど脳みそ筋肉に持つて行かれたんじゃないでしょ！ピンチなのは貴方の方よ!!」

敵側の将であるヤブイヌは思う。何故、と。

飛娘の手札は三枚。そして王城は0枚。

もはや何も行動が出来ない王城に対し、次ターンには手札が四枚になる飛娘があのだの二枚の伏せカードに対処する確率はそう低くは無いらズなのに、と。

だがレナ・ファムグリットはもはやこのデュエルを見通していた。

飛娘の三枚の手札は

『魔法・罨 破壊カード』が無い。

在るならば既に『ナンバーズ・ウォール』の破壊に使用してるハズだから。

効果を無効にする類の『カウンター罨』が無い。伏せカードも然り。

そうでなければ『真剣勝負』で破壊されたチャンバライダーが無駄死になどと言う言葉で言い表せないほど愚かなプレイングだ。勝ち目は無い。

『モンスターカード』は無い。在るならば彼女の性格上召喚しているはずだ。

また、上級モンスターの線も薄い。

いわゆる「ジャンド」に該当する彼女のデッキは下級モンスターの効果と魔法カードのコンボで回すものである。魔法カード「調律」のサーチ対象にでき、「シンクロン」の名を持つ「クイック・シンクロン」

等を除けば大抵レベル5以上のモンスターを採用する意義はほとんど無いと言つていい。

——では、王 飛娘の手札は何だと言うのだ？

この全ての条件を満たさないカードとは……？

飛娘 「レナ・ファムグリット…お前」

レナ（手に取るように分かる。貴方の手札は、全て腐りきった『死に札』だ……!!）

『死に札』

それは、デツキに投入されていながら現状では役目がないカードのことだ。

デツキに入れているのに役目が無いとはどういうことか？

例えば、相手が効果を持たないモンスターのみに構築したデツキで戦うのであれば、モンスター効果を無効にし、なおかつ相手のモンスターしか効果対象に選択出来ない『ブレイクスルースキル』

飛娘の手札は。

既にサーチ対象の存在しない『調律』。

現状発動が許されず、発動したところで打開策を加えられない

『アームズ・ホール』。

必殺技カード『スクラップ・フィスト』

これらの情報が開示されたなら、デュエリスト全員に伝わる筈だ。このデュエルは絶望的だ。

飛娘が次に何を引こうとも、自身のカードによって、効果を無効にしてしまうジャイアント・ハンド・レット。

一方敵には二枚の伏せカード。どちらかを犠牲にどちらかを発動できる。

勿論苦し紛れのブラフかもしれない。

それでも、少なくとも王城は、次のターンは高確率で生き残れる。

以上が、レナがデュエリストとプレイングを観察して見通した、デュエルの現状だ。

一見飛娘が有利に見えて来たこのデュエルは、全く持って誤解であり、どちらかと言えば王城に若干の分がある。

もし、彼女と同じ見解を、この情報が開示される前に読みとれたものがいたのなら、それは彼女と同じく天才なのかもしれない。

??? 「フ…フフフ…ッ！」

その時、その場に居ながら一度たりとも口を開かず、傍観を貫いていた『蛇柄の皮ジャンを着た男』が笑いだした。

その様子に、男以外の全員が目を見開いた。

皮ジャンの男「おい、サレンダーなら早くしろ。どの道このデュエルは終わった。」

飛娘「なんだと…?」

蛇柄の男の侮辱とも言える発言に、飛娘は目を細める。

皮ジャンの男「こつちからはその木偶の手札が丸見えでなあ…終わってるぜ。このデュエル、そこの中国人（チャイニーズ）の勝ちは無。ククク…」

飛娘「言わせておけば…!」

皮ジャンの男「なら試してみろよ。どの道このままなら、お前に勝ちは無」

自覚はしていても、否。自覚しているからこそ、この発言を聞き流すことが出来なかった。

ついでに仲間に自分の不利をあっさり悟られたことも手伝って、自暴自棄に近いものになってしまった

飛娘「上等ネ!!ドロ。そのままバトル!!」

レナ「……………」

レナ（うわーん。さっき気を付けてって注意したばかりなのに……飛娘ちゃんのばかり。単純。単細胞ー）

助言を完全にふいにした仲間に苦笑しながら心で泣くレナであった。

C N O . 1 0 6 溶岩掌ジャイアント・ハンド・レッド A T K 2

6 0 0 大蔵寺 王城 L P 6 6 0 0

王城「リバースカードオープン、『ダイヤモンド・ウォール』！」

デイメンション・ウォール
通常罫

相手モンスターへの攻撃宣言時に発動する事ができる。この戦闘によつて自分が受ける戦闘ダメージは、かわりに相手が受ける。

王城を狙うジャイアント・ハンド・レッドの前に時空を歪ませる孔が現れる。

飛娘「ジャイアント・ハンド・レッドの効果発動!!場のカード効果を全て無力化」

その宣言と同時に孔はジャイアント・ハンド・レッドの手によつて無理やり閉じられていく。

だが、ここまでは誰もが想像しうる当然の展開。誰もが予見できる当たり前の未来。

問題はその先にあるものだ。無効化されるカードを罠に、どうやってジャイアント・ハンド・レッドを倒すのか。

その場に居る者の多くが、次の一手に注目した。
レナ「……………」

皮ジャンの男「……七皇、つまらないデュエリストだったな」

既に飛娘の敗北を予知した二人のデュエリストは、もはやデュエルに興味すら失つていて、仲間のレナは苦い顔をして、敵側の男すら、その勝利に何の関心も抱かない。

同じ未来を予見したデュエリストは、それぞれデュエルから視線を背けた。

飛娘（フツフツフツフツ……何とでも言えばいいアル。今とつておきのカードを引いたネ。『禁じられた聖衣』。

禁じられたシリーズのカードがあれば、怖いもの無しネ）

飛娘「さあ、何でも来るアル!そんな罠カードでジャイアントを破壊出来るならネ。アツハハハハハ!!」

王城「……………おい、貴様。」

飛娘「何アル?」

王城「デュエリストのデッキに、罠カードなど無いわ、この戯けがア

!!

リバースカードオープン 『禁じられた聖杯』!!」

飛娘「……………え？」

王城の解き放たれたリバースカードにより出現した聖杯の中身がジャイアント・ハンド・レッドに浴びせられると同時に、ジャイアント・ハンド・レッドが効果を失い、テイメンション・ウォールの孔が飛娘の背後に繋がると――

飛娘「ぎゃふん!?!」

飛娘 LP 0

そのままジャイアントのグープンが飛娘の後頭部にヒットし、敗北が決定した。

レナ「あくあ…負けちゃった。つて――わわわわわっ!?!」

一体どういう物理法則なのか?斜め上から後頭部を殴られたはずの飛娘は衝撃によって吹っ飛ばされていた。

向かう先は、川。そりゃ川辺なのだから川が近くに在るのは当然だが、今飛娘が飛んでいる川とジャイアント・ハンド・レッドが飛娘を殴った方向は90度の誤差がある。本来ありえないはずの現象がここにある。

などと言っている内に飛娘が今にも頭から地面に激突しそうになっている。因みにその速度もまた、物理法則を超えてグングンと速くなっている。何故だ。

それに気づいたレナは地面を強く蹴って、一息の内に飛娘の着地点に移動し、飛娘の頭を庇う形で受け止めた――

レナ「キヤツチ!!」

飛娘「ぼふっ!?!」

そして――

レナ「おわっぷ!?!」

飛娘「ぶぎやっ!?!」

バツチャーン!

思いつきり川辺に落ちました。

遊戯王　＼ Fake　Origin　＼ 16　キョウ
イノゼツボウ

例えばそれは蟻と巨象。蟻は群れを成したなら、大きなゾウにも討ち勝てる。確実では無いかもしれないが、この世に確実という存在が『一つ』であるがゆえに、議論に価値は無く、無知なるものは、その過ちに気付かない。

だが：しかし、どうだろう？

蟻と言う個体は群れを成せばこそ勝ちうるものであり、単体で象には勝ち得ない。

蟻はその事実気付いたとして、歯噛みしたとして、己を律し鍛錬を重ねたとして、それでもやはり討ち勝てない。

だからと言って、蟻は、その敗北感を、否。そもそも敗北と感じるのだろうか？蟻が敗北感を抱くものだろうか？

恐らくそれは無い。何故ならば、軍隊で討ち勝てるものに『個体で挑み打ち勝ちたい』というのは、人間の身が抱く欲であり、人の身が持ちうる負の感情だ。

つまり、何が言いたいのかと言うと――

飛娘「うがあああああああー！！！！何故ダ!?!?何故ヒトは勝者と敗者に分かれるアルか!!」

バイト先のカードショップで不覚を取り、いざ雪辱戦と挑んだデュエルに敗北した王　飛娘は、悔しさと惨めさに耐えきれず、天に咆えていた。

飛娘「こんな世界滅びてしまえば良いアル……っ。こんな……こんな……っっ!!」

心が冷たく冷えていくのと連動して、飛娘の体温も徐々に低くなっていく。緩やかにしかし確実に流れる川の水が、二人の少女の肢体を濡らしているせいだ。

少女の1人は王　飛娘。そしてもう一人は……。

飛娘「何故ワタシの方が年上なのにここまであからさまな胸囲の格差が生まれるアルかあああああああー!!!」

レナ「そんなことレナに言われても…。」

ついひと月前まで中学生だった少女。B89(E)W59H87というスリーサイズを持つレナ・ファムグリットだった。

現在そのやわらかな乳房を鷲掴みにされながら貧乳(フェイニヤン)の怨嗟を一身に受けている真っ最中だ。

レナ「ねえ、飛娘ちゃん。もうちよーつと優しく触ってくれないかな?さすがにちよつと痛いんだけど…。」

飛娘「黙れ!!!鷲掴み出来るといふ事実が如何に幸福か骨身に染みるまで痛みを味わうアル!!」

レナ「つて言うかそろそろ水から上がろうよ。もうパンツまで濡れ濡れだよ?ちよつと気持ち悪いかも」

そう言うのと、未だ手を放そうとしない飛娘を諭すように言葉が続けた。

レナ「それより飛娘ちゃん。後ろ…鬼がいるよ?」

飛娘「は?」

レナの言葉で初めて背中に気配を感じた。

それは、怒気。混じりけ無しの怒気。純然たる怒りのオーラ。

レン「……………」

飛娘「……………」

後ろに居たのは、炎が沈下してから倒れていたレン・ファムグリットだった。

倒れてからそう時間も経っていない筈なのにすでに回復しているようで、左手には何かがベコベコと音を立てて握りしめられている。

すると、やはりいつ回復したのか。レンの旧友と言うこと以外は謎だらけな少女、ケイト・ヴァルゼルドが、苦笑いを浮かべながら告げる。

ケイト「あー…えっと、飛娘さん…でしたっけ?」

レン君、倒れてはいたけど意識はしっかりあったんで、デュエルの始終は全部確認してるツス。

つまり…」

飛娘「……………（ガクブル）」

レン「よお、中国…」

飛娘「ひっ…!?」

レン・ファムグリットはデュエルの最初に告げていた。

『負けたら裸にひん剥いてマネキンにするぞコラア』

ケイト「負けたから裸にひん剥いてマネキンにされる危険があるから今すぐ逃げた方が良いツスよ?」

飛娘「ひやああああああああああああああああああー!!!」

レン「——逃がすか。風と呼ばれた男直伝の歩法、無空・縮地。逃れられる獲物はいねえ!!」

飛娘「いやああああああああああああー!!!ごめ”ん”な”ざ
いいいいいいいいいいいいいいいいいいー!!!」

こうして、王 飛娘の長い長い鬼ごっこが始まるのであった。

ヤブイヌ「……………デュエルは!」

遊戯王くFake Originく 16

才人「ねえ、体よく逃げられてんじゃん。バカじゃないの?だから
あいつらの言うことなんて聞く必要ないって僕が行ったじゃないか
!!」

ヤブイヌ「え、ええ。まさかこんなギャグみたいな調子でずっとい
られるとは思わなかったものですから。」

大宮司「ふん。逃げる者は追うな。問題なのは未だ残るデュエリス
トだ。」

勝者・大宮司王城は、この場に残る少女の内健在な二人を見据える。

ケイト「……………」

レナ「……………」

大宮司「どうした?ワシに臆したか。それでもかの七皇の1人か
?」

ケイト「……ボクは七皇じゃないツスけどね。(つてか、七皇って何?)」

ケイトが何言ってるんだコイツみたいな目で王城を見る。

大宮司「ならば良い。『赤髪のレン』は噂程でも無い腰抜けで、『七皇』の一人王 飛娘はあの噂程でも無い小娘であったが、次はどちらがワシの相手をする?」

ヤブイヌ「いえいえ、これは一人一回ずつのデュエルですから、大宮司君の出番はこれでおしまいですよ?」

大宮司「彘?」

ヤブイヌ「ですから、戻ってきてください?今すぐに」
大宮司「……。」

がつくりと肩を落とし、トボトボと陣に戻っていく大宮司であった。

ケイト「あのデカイ身体を小さくして歩く姿…ウチの特攻隊長を思い出すツスねー。まあ絶対ウチの隊長(バケモノ)の方が強いだろうけど。」

レナ「バケモノ?にーの昔のお友達ひとりかな?すっごい気になるよ主は昔のにーが。これが終わったら家に遊びに来ない?最近のアルバムとかあるよ?料理してる写真とか」

ケイト「ほお…ボクもすこぶる興味あるツスよ。主に最近のレン君が。シヨタ時代のレン君のアルバム、興味あるツスか?ライオンのコスプレしてる写真とかあるツスよ?」

その時、両者の間に確信が生まれる。

レナ「……。」

ケイト「……。」

少し見つめた後…。

レナ「みんなは怖いって言うけれど。」

ケイト「——素は滅茶苦茶ピュア可愛いツス」

レナの言葉に共鳴したかのように、ケイトが続いて言の葉を紡いだ。

ガシツ——!!

心響き合った盟友のように握手を交わす。この瞬間、レナとケイトは仲間になった。

才人「……なんだこれ？」

ヤブイヌ「……………」

大宮司「……………」

若干引き気味に白い目を向ける敵勢は、それでも戦意を失わずに前に出た。

才人「そろそろ茶番は終わりにして、次のデュエルをしようよ？」

それとも尻尾まいて逃げるわけ？あのヘタレた中国人と赤髪みたいにさあ！」

挑発するように嘲笑うのは、平中工業二番手、異常な背の低さと、梅干しを食べた時の口をリアルに描いたような表情が特徴の男だ。

ケイト「……………さて、どうするっスカねえ？正直あんなカード（N O）見せられた後じゃ、あのちっさいのもなんかヤバ気なカード持ってるって思った方が良いっスよね？」

レナ「そう言うのは慣れてるよ。三幻神とか。だから申し訳ないんだけど、先に行って良いかな？」

レナはおそらく次の対戦相手であろう小さな男を見据える。ケイトは軽くうなずいた。

ケイト「良いっスよ。そんな目で言われてちや断れない。」

レナ「…??目って何のこと？」

きよとんとするレナを尻目に、ケイトは邪魔にならないように未だ気絶したままのひよのそばに立ち退こうと後ろを向く。

しかし、足を進めるまえに振り向きレナに語る。

ケイト「いやあ…意外と純情派なフリして滅茶苦茶ヘビーな女騎士タイプなんじゃないっスカレナさん。」

奴らの口から七皇の仲間とレン君の中傷が出た瞬間——心中穏やかじゃないのが目にしっかり写ってるっスよ？

仲間がバカにされるのが逆鱗っスカねえ？」

蠱惑的に微笑むケイト。その瞳に映っているレナ・ファムグリット

は、同性の目から見ても思わず魅力的な美少女だ。しかし……。

レナ「……へえ、すごいねケイトちゃん。間違いなく隠し切れてる自信があっただけどなあ？」

ほんのわずかな変化。声が少し低くなった。目が少し鋭くなった。それだけで、まるで別人と話している気分させられる。

ケイト「フフツ……！良い感じ殺気ツス。とてもただの女子高生が放つていいレベルじゃ無い。」

レナ「ありがとう。こう見えてけっこう好戦的な、私」

ケイト「そうツスか。ならこのデュエルはお任せしていいツスか？」

少し溜めて、妖艶な笑みで言う。

レナ「クスツ…任せて♪」

ケイトは手を振りながら、レナは小粋にウインクしながら、両者戦場と傍観席へと移って行った。

才人「やつと決まったかー。でもよかったよ。僕もキミと戦ってみたかったんだ。」

下卑た笑みを浮かべながら、チビの男はレナの身体を舐めまわすように見ている。

才人「その顔といい、カラダといい、僕の好みだよ……フフウ」

それは女性ならば、いやもしかすると同性でも生理的嫌悪を禁じ得ない笑い顔だった。

そんな相手に対してレナは、語るに値しない相手として冷たい目を向ける。

レナ「そう。そのルックスでずいぶん贅沢な好みなのね。

あなたの学校って鏡が無いのかしら？それとも…背が低すぎて見えてないとか？」

才人「な、なんだとー!?!ぼ、僕をバカにするのか!!」

せっかく可愛い子だから僕の彼女にしてあげようと思ってたのに!!そんなこと言うならしてやらないぞ!!」

レナ「その驕りは、一体どこから来ているんだか……。」
ふと、思い出す。ケイトの先程の言葉を。

ケイト「あー…実は自分達、このマチだとイケない方向で有名な
んスよね。ポリ限定で。」

「やべえー逃げてえ……」

ヤブイヌ「そ、そうですね…逃げたいのは同感です。」

警官A「お前たちか?!通報にあつた河原で放火して遊んでいる高校
生は!!」

1人の警官の登場を皮切りに、次々とパトカーから降りてくる。

警官B「ちつ、折角押収した違法改造したスマホで幼女のポルノ動
画観てたつてのに、邪魔してんじやねえよ、クズ共がっ」

今何か警察官としても人としても看過できないことを聞いたよう
な気がしないでもない。

ケイト「く、クズが何か言ってるツス……」

どうやら自分が少しマチから離れている内に、ここも大分腐ったよ
うだ。とケイトは思う

警官B「んだとコラア!!」

その瞬間——レナの殺気が解放された。

レナ「黙れツツ!!」

警官B「——!?!?ブクブクブク……」

殺気に直に中てられたその場の警官が泡を吹いて倒れ伏す。そし
て、その近く^{!!}に居た警官、さらにその奥と、次々と倒れていく。

ヤブイヌ「?!?!」

王城「な、なんだこれは!?!おい、どうしたのだ!?!」

警官B「……………」

王城「へ、返事が無い……」

ケイト「ちよ!?!なに警官気絶させてるツスカレナさん!?!その覇気は
むしろレン君がやった方がいんじやないツスカ?——じやなくて
!!折角丸く収まりそうだったのに——!」

レナ「ムシヤクシヤしてやった。落とし前は付けるが反省はしてい
ない。」

ケイト「だ、ダメだこの人……レン君がいなくなった瞬間はつちや
けまくってるツス。レン君のストツパーかと思ってたけど、むしろレ

ン君が彼女のストッパーになっていたんじゃ……？」

才人「何だ？急に警官が倒れた……？まあ、いいか。邪魔者も黙ったし。じゃあ、デュエルを始めようよ？」

レナ「そのつもりよ。視界に入れるのも嫌だけど、少しだけ弄もてあそんであげる。」

……ついでに、埃が出るか叩いてみようか？」

才人「あらためて、僕は平中工業3年 平賀 才人（ひらが さいと）だ。」

レナ『『七皇』NO. 2。『剣姫』 レナ・ファムグリット。『お前の全てを否定する』』

レナ・才人「デュエル!!」

夢：夢を視ている。満天の星空のしたで、三人の子どもの影。肌を撫でる風が地面の草が…自分が今この惑星で生きていることを実感させてくれる。

子どもたちの背には、三本の宝剣が見守るように、あるいは己が主に付き従う従者の如く、剣の刻印の『三角星』と『奴隷影』と『裁定光』を意味する紋章が煌めく。

……私は、思った。

「ずっと、みんなと居られたらいいのに……。」

『三角星』の剣の者が笑う。

「いられるよ。ずっと一緒。ぜったい、だいじょうぶだよ。」

『奴隷影』の剣の反逆者が微笑む。

「ああ。きつと、大丈夫だ。大丈夫な世の中にしてみせる」

そんな二人がいる限り、きつとだいじょうぶ。ぜったいに一緒だ。

私は決意を胸に、『光』の裁定者として振り返る。

「私たちの戦いを…『エターニアソード』最期の戦争にしてみせる。」

振り返った先には、炭になった民家と、黒焦げになった遺体、乾いた血。壊れた剣や城壁。それら全てを燃やす炎。

紛れもない、そこは血と炎。地上に浮かび上がった戦場という地獄だった……。

「そんなことも、あるよね…。」

レナ『光』と『星』と『影』。このソラの光は星から来て、満たされないものは影になる。

でも、そのどれか一つでも欠けるのなら、世界には総てが消滅する。」

空を見上げながら、レナ・ファムグリットはソラを視る。

レナ「その先に自分の望む物が無いと知りながら、想いを馳せるこ

とを止められない。」

ケイト「……何の話ツスか？」

意味の分からない詩のような言葉をつぶやいたレナに、ケイト・ヴァルゼルドは首をかしげる。

レナ「『昔』にお友達と話した、私達の世界の真理のお話だよ。【戦士族】から『このデツキ』に替えるの、何年ぶりかなあ、って思ってたら思い出しちゃった。」

そう言いながら微笑むレナの表情は、どこか寂しげなものだった。

レナ「……そんなことも、あるよね。」

遊戯王くFake Originく 17

第一回戦、大宮司と飛娘のデュエルは大宮司の勝利で終わり、これで一敗。

特に戦う理由も無いレナと、それ以前に巻き込まれたただけでおまけ感覚のケイト。そしてたつた数十分で二度気を失ったひよの。

相手の実力は分かったし、特に戦いたいような相手でも無かったレナは、これでお開きかなくと呑気に今晚の夕飯のメニューを考えていた。

巻き込まれただけのケイトとしては、もうこれで終わりにしても良いんじゃないかと思った。

そう。いまから生贄になる平賀才人。彼が余計な煽りを入れなければ……。

止せば良いのに。

レナ・才人「デュエル！」

レナ・ファムグリットLP 8000

平賀才人LP 8000

才人「僕のターンだ。スタンバイ、メインフェイズ。カードを二枚場に伏せる。そして——」

才人が更に手札に手を掛けた瞬間、レナは口を開いた。

レナ「あ、そうそう。言い忘れてたことがあったわ。」

才人「なんだい？もしかして手加減してほしいのかな？いいよ。ただし、今晚その大きな胸や可愛い口を使って僕を気持ちよくしてくれるんらね？」

生理的に気持ち悪い笑顔を浮かべ、あくまで自身の優勢を謡う才人。

しかし、その笑みはレナの一言で凍りついた。

レナ「私のLP1000未満になるまで、私はバトルフェイズ行わないから。安心して動いていいよ、坊や」

才人「な、何だって!？」

ヤブイヌ「バトルフェイズを行わない!？」

王城「バカな、そのようなデユエルがあるものか!」

レナの発言は対戦相手に留まらず、ギャラリーの殆どが驚きを隠せないもので、なんのメリットも無いものだった。

ケイト「……なるほど」

蛇柄の男「ほお…」

残りの二人は、何かを納得したような表情で成り行きを見守ることにする。

才人「ふん！別にいいさ。僕が勝つのは同じことだ！更にモンスターを裏守備表示でセット。ターン終了だ。」

才人LP 8000

手札2枚

場 伏せモンスター

伏せカード×2

レナ「それじゃあ、醜く足掻いてね？因みに、私のデッキ『神の宣告』も『神の警告』も『神の通告』も入って無いから、頑張つてライフ削つてね？でないと坊やのデッキ負けで終るよ。」

才人「ヘンだ！自分でデッキの内容バラしてちや世話ないね。やつぱり七皇は名前だけの凡人だ」

レナ「私のターン。ドローフェイズ。ドロー。スタンバイフェイ

ズ。フェイズ移行、メインフェイズ。」

レナは引いたカードを確認もせず、デュエルディスクにセットする。

気のせいかそのカードは、微かにオレンジ色の光を反射していたようだった。

レナ「まずは切れ味の確認かな。ずいぶん使っていないから錆ついてるかもしれないし。」

手札から『星因士 ベガ』を通常召喚。」

才人「——テ、テラナイトだって!？」

レナのデュエルディスクにセットしたカードから放たれた星達が、こと座の星座を描き、宇宙からまばゆい輝きと共に星の戦士が地上に降臨する。

ベガ「セヤア——!」

星因士 ベガ ATK1200

才人「こ、この女…平然とガチデツキ使うかよ!？」

レナ「更に、星因士ベガの召喚時、効果発動。『新星の輝き』矢座 α 星より至れ、神エロスが射るキューピットの矢よ。手札から星因士シヤムを特殊召喚。」

ベガと同じく自身の星座を描いた星の光に包まれ、眠たげなアーチャーが地上にノロノロと降りて来た。

途中で光が持たなくて落ちた。頭から。

シヤム「……。」

特に気にすることもなく起き上がると、レナのモンスターゾーンの配列に加わると

シヤム「よっ。」

と、レナに向かって右手を上げた。

レナ「よっ。さっそくだけどお仕事よろしくね?」

シヤム「……（コクリ）」

顔は眠たげなまま変化が無い。

空から落ちて土に汚れた自身のモンスターを気に掛けるわけでもなく、レナも気さくに笑顔であいさつを返す。

レナ「シヤムの特殊召喚時、効果発動。

相手に1000ポイントのバーンダメージを与える。『星の降る夜』」

シヤム「……五体満足じゃ帰さねー。てやー」

シヤムは天に弓を掲げ、弦が存在の限界を迎えた瞬間に一矢を射る。

すると——その矢は光のように臨界が曖昧になりやがて分裂し、雨のように敵プレイヤーに降り注がれる。

その雨は、無防備な愚者に慈悲無く降り注ぎ、肉を削ぎ、骨を削つた。

才人「うつぎやあああああー!?いい、痛いいいいー!!
何でだよ、ソリットビジョンなのに!?!」

才人 LP7000

大宮司「いきなり1000もライフを削ってくるとは…バトルフェイズを行わないとはこういうことだったのか。」

ケイト「なんかしら勝利方法はあると思ったツスけど、効果ダメージとは。レン君も黒炎弾と言い、義理の兄妹のワリに大分似通った性格してるツスねこの二人。」

レナ「【星因士 ベガ】と【星因士 シヤム】で、オーバーレイネットワークを構築する。」

ヤブイヌ「ほうほう、七皇NO.2 レナ・ファムグリットはエクシーズの使い手でしたか。これは手ごわそうだ。」

興味深そうにPCを広げると、カメラを起動するヤブイヌ。

ヤブイヌ「先程の中国人のデュエルは拙くて見どころ無かったです
が、これは興味深いですね。あ、カメラはデュエリストは写らないようにしてしますので、プライバシー保護等はお気になさらず。」

特に気にした様子も無く、レナは自身のディスクから一枚のエクシーズモンスターを引き抜く。

レナ「人の夢は儚きもの。最期の希望は嘲笑う。さあ我らと共に嘲笑おうぞ！エクシーズ召喚。狩り取れ、その希望。ガガガンマン」

ガガガンマン DF F2400

ランク4 地属性 戦士族

1500/2400

エクシーズ/効果

レベル4モンスター×2

①①：1ターンに1度、このカードのX素材を1つ取り除いて発動できる。このカードの表示形式によって以下の効果を適用する。

●攻撃表示：このターン、このカードが相手モンスターを攻撃するダメージステップの間、このカードの攻撃力は1000アップし、その相手モンスターの攻撃力は500ダウンする。

●守備表示：相手に800ダメージを与える。
ケイト「うわーお。」

才人「また効果ダメージモンスターかよ!!」

バトルフェイズを行わないと宣言しながらこのバーストモンスターの連打。狩り取る気満々である。その場に居る誰もがそう思った。しかし……。

レナ「リバースカードを一枚伏せて、エンドフェイズ——ターン終了了。」

才人「…え？」

結局そのターンは、シャムの効果ダメージを与えただけでレナはターン終了を宣言してしまった。

レナ「どうしたの坊や。ダメージが無くてよかったじゃない。喜んで自分のターンを進めたら？」

才人「ふん、何だ脅かしやがって！幽鬼うさぎでも警戒したかよ。やーい、臆病者ー。」

レナは才人の言葉を無視して目を閉じて、『ふう』と少し息を吐く。

レナ「……………」

才人「ふん、可愛く無いヤツ！このデュエルの後で僕がしっかり教育し直してやる。僕好みにね。ドローフエイズ。ドロ―」

才人はドロ―したカードを確認すると、にやりと笑った。

それと同時にレナはすつと目を開ける。

レナ（――何か来る。この感じ、大型モンスターか。）

何をしたらそんな予想が出来るのか、レナは敵の取る戦術を予測したうえで、視線は敵に向けたままりバースに意識を向ける。

レナ（発動するかどうか……いや、ここは様子をみよつかな。）

才人「キヒヒヒヒ。行くぞレナ！

手札から『ビークロイド・コネクション・ゾーン』を発動!!」

ビークロイド・コネクション・ゾーン

通常魔法

手札・自分フィールド上から、融合モンスターカードによって決められた融合素材モンスターを墓地へ送り、「ビークロイド」と名のついたその融合モンスター1体を融合召喚扱いとしてエクストラデッキから特殊召喚する。この効果によって特殊召喚したモンスターはカードの効果では破壊されず、効果を無効化されない。

ケイト「『ビークロイド』ツスカ。敵さん融合使いが多いんスカね？しかもどれもこれも『パワーボンド』対応の機械族融合……あれ？」

ここで才人の手札枚数を確認する。二枚。場には正体不明のりバースモンスター。

この場合、条件を満たすモンスターは

スーパ―ビークロイドージャンボドリル

攻撃力3000貫通持ち。ただそれだけなのに同じ貫通効果を持ちながら攻撃力4000のサイバー・エンド・ドラゴン

と同じ素材三体指定。重い、弱い、下位互換。と三拍子そろった残念モンスターだ。

ケイト「こりやこの勝負貰ったツスね！」

これを召喚すれば手札0枚、伏せ二枚の短期決闘。これを崩せば勝ち目は目の前。

ひよの「——と、思うじゃん?」

ケイト「おや?起きたつスカロリ巨乳ちゃん。」

これまで気を失っていたひよのが再び覚醒した。日に三度目の覚醒。

ひよの「融合と聞いて目が覚めました。ところであなたはどちら様ですか?なんて言うか、アニメの設定資料で描いたらぶっ〇されそうな露出狂ファッションですが。」

ケイト「あくそーういやさつき目が覚めた時はアイサツもして無かったツスね。」

ボクはケイト・ヴァルゼルド。レン君の肉〇隷。んで、『胸は揉めば大きくなる』って言う言葉が迷信だと証明した生き証人ツス」

ひよの「……因みにスリーサイズは?」

ケイト「え〜つと。たしか上からB76(B)W55H78だったかなあ…?」

最近レン君と会ってなかったから測る人も居なかったんスよねえ」

ひよの「おおおおおー。次々出てくるレンさんの個人情報!浮き彫りになる爛れた女性関係。メモメモ」

ケイト「んじやそろそろギャグフェイズは終えて、解説に入るツスよ。ロリ巨乳ちゃん。」

ひよの「文月 ひよのですっ!」

才人「チェーン2:罫カード発動。『チェーン・マテリアル』」

チェーン・マテリアル

通常罫

このカードの発動ターンに自分が融合召喚をする場合、融合モンスターカードによって決められた融合素材モンスターを自分の手札・デッキ・フィールド上・墓地から選んでゲームから除外し、これらを融合素材にできる。このカードを発動するターン、自分は攻撃する事ができず、この効果で融合召喚したモンスターはエンドフェイズ時に破壊される。

ひよの「それでは、ひよのちゃんの良く分る融合コンボ解説講座です。」

ケイト「ぱちぱちぱち〜」

①このコンボは、どこにあっても融合素材に出来るチエンマテと、エンドフェイズに破壊されるデメリットを無視する事が出来るコネクションを使用して大型ビークロイドを特殊召喚するコンボです。

②このコンボは、手札に二枚カードがあれば成立する強力なコンボですが、デッキに名称固定で四種類のロイドモンスターと、チエンマテ、コネクションを投入するので、実質のデッキ投入必須カードが6枚で、思うほど割りの良いコンボではありません。

③手札に二枚揃えば成立する割に

- ・罠カードを使用する。
- ・成立したターンには攻撃できない。
- ・決まったところで決定打にならない。と言ったビートダウンコンボとしては割と致命的ですが、決まると嬉しい魅せコンボです。

ひよの「とまあ、お手軽ですが見返りは少ないコンボです。今時効果破壊耐性だけじゃ壁にもなりません。」

ケイト「ウキウキで覚醒して来た割には酷評ツスね…。」

才人「これでこのターン、僕はデッキからでも融合出来るぞ。トラックロイド・エクस्प्रेसロイド・ドリルロイド・ステルスロイドをデッキから除外して『スーパービークロイド』ステルス・ユニオン』」

スーパービークロイドーステルス・ユニオン

星9 地属性 機械族

3600/3000

融合／効果

「トラックロイド」＋「エクस्प्रेसロイド」＋「ドリルロイド」＋「ステルスロイド」

1ターンに1度、自分のメインフェイズ時にフィールド上に存在する機械族以外のモンスター1体を選択し、装備カード扱いとしてこのカードに装備する事ができる。この効果によってモンスターを装備している場合、相手フィールド上の全てのモンスターに1回ずつ攻撃をする事ができる。このカードが攻撃をする場合、このカードの元々の攻撃力は半分になる。このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、その守備力を攻撃力が越えていれば、その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。

ひよの「とまあ、これがやりたいだけのコンボなのですよ。ケイトさん」

ケイト「んくなるほど。確かにこれで攻撃できなきや只の的ツスね。」

などと外野が着々と死亡フラグを建設していると。

才人「フフフフフ…これだからバカな奴は困るよ。僕がこの程度で終わるわけが無いっていうのにさあ!」

ひよの「へ?」

ケイト「おや?これは…まさか。」

才人「更に手札から『ビークロイド・コネクション・ゾーン』を発動する!!」

ひよの「なんですって!!」

才人「そしてえ〜三枚目のビークロイド・コネクション・ゾーンを発動!!」

ケイト・ひよの「——!?!」

そう。たしかにひよの言うことは正しい。昨今効果破壊耐性がある程度では、いかに攻撃力3600のモンスターと言えど、真のデュエリストにとっては大きな脅威には成りえない。

それが、一体のモンスターであったならば。だが

スーパービークロイド—ステルス・ユニオン ATK3600 ×

攻撃力3600 効果破壊不可

これが場に三体並んでいる状態は、如何に効果破壊耐性程度と言えど刺さってくる。

往年の三強ですら、これが並んでしまうと本気でぶっ潰すソリティアをしなければ辛くなつてきます。

才人「クツクツク……。次のターンが楽しみだよ、レナちゃん？」

遊戯王 ｛ Fake Origin ｝18 大三角

前回のあらすじ。

ビークロイド・コネクション・ゾーン。チェーン・マテリアル。コネクション3倍プッシュ。

才人 LP7000

手札0

場 スーパービークロイド―ステルス・ユニオン ATK3600

×3 効果破壊不可

伏せモンスター×1

レナ LP8000

手札3

ガガガンマン DFF2400 ORU×2

伏せ×1

突如カードショップを襲撃して来た平中工業のデュエリスト達とデュエルをすることになった一行の二回戦目。レナ・ファムグリットVS平賀才人。

終始自身の優勢を疑わない両者だったが、LP1000未満になるまでバトルフェイズへは移行しないと宣言したレナに効果ダメージで先制された平賀は、効果破壊不可のATK3600モンスター三体を召喚して見せた。

これにはさすがにギャラリーも動揺する。

効果破壊されないだけならば、戦闘で倒せば良い。

攻撃力が高いだけなら、破壊すれば良い。

数が多いだけなら全体除去を使用すれば良い。

しかし、この三つが同時に満たされてしまった場合は厄介だ。

ヤブイヌ「……ことデュエルモンスターズというカードゲームに置いては、攻撃力が3000を超えるのは稀です。装備魔法を使えば簡単という素人もいますが、そもそも攻撃力上昇効果などオマケに近

い。狙って投入するのは何かしら理由があるか、好みによるところが多い。デュエリストとしての力が付けば付くほど、その採用率は激減する。」

ケイト「全体除去の多くは、『ブラック・ホール』のような破壊が絡むか、発動条件が存在する。そのために、テーマ専用の物でもなければ採用出来る、又はされる可能性は低くなる一方ツス。勝率を上げることと考えていけば尚更使用は控えるべき…。」

ヤブイヌ「つまり」

ケイト「このデュエル」

ケイト・ヤブイヌ「彼女のデッキに『星因子 トライヴェール』が採用されているかどうかが分岐点——！」

レナ「採用《はい》ってるよ」

ケイト・ヤブイヌ「あれ〜?？」

採《は》用《い》ってた。

遊戯王くFake Originく 18

レン・ファムグリットは歩いてた。

レン「…：飛娘（あいつ）足速すぎだろ。やってられっか。」

ものの5分で追うのを止めると、自販機に硬貨を入れてジュースを購入して商店街の様子を見ながら河原へ戻っていく。レンがとつくに諦めてジュース飲んでるなど露知らずに、飛娘は力尽きるまで走るのだろう。

汗をかきながら、必死で、水分も補えず、止まった時にはミイラのようになるのかもしれない。そんな想像をしながらのんびり喉を潤おしてレンは歩く。

走れば5分だが、歩いて戻れば30分はかかるだろう。そんなことを考えながら歩いていると、気になる光景を目にした。

フードを被った子どもが、道行く人に片っ端から声を掛けているのだ。

???'「250円で買いませんか?このカード、250円で買いません

か？250円で」

レン「やたら250円を強調してるな…。」

断られるたびに人を替えて同じことを繰り返している。

とりあえず、声を掛けてみよう。そんな気持ちで少年の元へ歩み寄るレン。

レン「…おい、ボウズ。」

すると少年は、同じ言葉を同じイントネーションで口にする。

???「250円で買いませんか？このカード。」

レン「…金に困ってるのか？」

???「いいえ。ただ探しているんです。このカードの主を。」

レン「お前、学校はどうした？」

お前が言うか。

レンが現在学校をさぼって河原辺りでデュエルをしていた高校一年生だと知る者は、そう言うだろう。いないが。

???「250円で買いませんか？このシンクロモンスターを。」

レン「…シンクロモンスターだと？」

久しぶりに現代のデュエルを観たあの時、大会優勝者も使用していた白のカード。レンは思い出す。あの時の映像を。

レン（何故か。俺はシンクロモンスターに気を引かれる。あの後、エクシーズやペンデュラムの存在も知った。

使用こそ未だしていないが、エクシーズモンスターも数枚程度なら持っている。

それでもシンクロモンスターに惹かれるこの思いは、未だ枯れない。）

レンはシヨップのシンクロモンスターを見て、購入することも出来た。しかし、1枚たりとも所持していない。これでは無い。レンの心が強く叫ぶ。

“俺のシンクロモンスターはこれでは無い”
だが…。

レン「……………」

???「250円で買いませんか？」

レン「見せてみる。そのシンクロモンスターを。」
???「どうぞ。」

シンクロモンスターを手取る。

レン「……………」

???「……………」

レン「……………」

???「……………」

永い沈黙が続いた後……。

レン「フン…。」

レンは、フードを被った子どもに250円を手渡し、踵を返す。

???「これはオマケだ。」

レン「——!?!」

レンの背後に向かって投げ放たれた二枚のカードに多少虚を突かれながら受け取ると、少年は姿を消していた。

これが、過去の●●●が手にした——未来の過去の現在——か。

誰からともなく、そんな言葉を聴いたような気がした。

???「ようやく最初の一枚…永い永い遠回りだった。フフフフ」

レナ「それじゃレナのターン。ドロ。スタンバイフェイズ、メイ
ンフェイズへ移行。」

ガガガガンマンの効果発動。ORUを使い、守備表示の時相手に8
00バーン。ORUは星因子 シヤムを使用。」

才人「ふん。痛くもかゆくもないね。」

才人 LP7000↓6200

レナ「……………カードを一枚伏せて、エンドフェイズへ移行。ターン
終了」

才人「さあ、お待ちかね。僕のターンだア！ドロ。おやおやあ？
良いカードを引いちやったあ。これはもうすぐに勝負が決まっちゃ
うなあ〜どうしよっかなあ〜」

才人 LP6200

手札1

場 スーパービークロイドーステルス・ユニオン ATK3600

×3 効果破壊不可

伏せモンスター×1

レナ LP8000

手札3

ガガガガンマン ORU×1

伏せ×2

才人「ねえ巨乳ちゃん。もし君が今サレンダーするなら、今までの態度は水に流してボクの彼女にしてあげてもいいよ?」

レナ「……………」

才人「ちつ、あくまでダンマリか。でもいいや。キミがなんて言おうと、僕には君を絶対に従わせることが出来るだから。バトル。さあ、一体目のステルスユニオンでガガガガンマンを攻撃だあ!!」

スーパービークロイドーステルス・ユニオン ATK3600 V

S ガガガガンマン DFF2400

レナ「攻撃宣言時に発動するカードはあるかな?」

才人「いんや。ないよん」

レナ「じゃあ遠慮なく。罨カード『仁王立ち』をガガガガンマンを対象に発動。DFFを倍加するよ。」

ガガガガンマン DFF2400↓4800

ひよの「やりました!これでユニオンの攻撃は通らず、バックダメージです!!」

ケイト(こう言うとフラグぶち抜いてるように聞こえるツスけど、攻撃宣言時:ねえ?)

レナのプレイングに単純に喜びひよのと、若干エロい顔をしながら微笑むケイト。

才人「アツハハハハ!!無駄無駄無駄だあ!!ダメージステップ時、手

札から速攻魔法リミッター解除を発動!!自分の機械族モンスター全ての攻撃力を倍加する!!」

スーパービークロイドーステルス・ユニオン ×3 ATK3600
0↓7200

才人「僕に逆らうからこうなるのさ!!」

レナ「効果処理後、リバースカードオープン。『D2シールド』!」

才人「なんだと!?!」

レナ「防御力は更に倍」

才人「くそつ、バカにしやがって:!!」

ガガガガンマン DFF4800↓9600
スーパービークロイドーステルス・ユニオン ATK7200 V

S ガガガガンマン DFF9600

才人 LP6200↓3800

才人「だが、僕のステルス・ユニオンは、効果では破壊されない。リミッター解除の効果で倍加した攻撃力が元に戻ってターン終了だ。」

スーパービークロイドーステルス・ユニオン ×3 ATK7200
0↓3600

レナ「ドローフェイズ。ドロー。スタンバイフェイズ。メインフェイズ。ガガガガンマンの最後のORUを取り除き、相手に800バーン。」

才人 LP3800↓3000

才人「くそつ、くそつ、くそつ!!」

癩癩を起したように地団駄を踏む才人をしつかりと見据えながら、レナは手札の一枚を手取る。

レナ「ねえ、キミさあ…もしかしてそれで全力なの?」

才人「なんだと!!この状況で僕の方が有利なのは目に見えているじゃないか!

破壊耐性を持ったATK3600のモンスターが三体。この状況で減らず口を!!」

その発言が決定打になった。目の前の相手は、相手にならない。

レナ(……目的があつたから。でも、ちよつと可哀そうかなと思つたから、手心を加える程度のプレイングで引き出すつもりだったけど)目の前のコレが、余りにも退屈過ぎて、拙過ぎて、相手をするのが嫌になって来た。

レナ「こんなに弱いなら、いつものように戦士族デッキで良かった。いや、アレでも持て余すかな。……もういや。飽きちゃったよ」
心底つまらなそうにデュエルディスクに一枚のカードをセットする。

レナ「星因子 アルタイル」を召喚。効果発動。わし座より舞い降りる再生の羽根、幾千の時を越えた終幕を今一度【カーテンコール】。
【星因子 ベガ】を特殊召喚。さらに、もう一度【新星の輝き】。手札から【星因子 デネブ】を特殊召喚。効果発動。【新星の揺り籠】デッキから二枚目のアルタイルをサーチ。

星因子の展開を行なうレナの上空に、『わし座』『こと座』『はくちよう座』が次々と出現し、それぞれの象徴たる一等星、『アルタイル』『ベガ』『デネブ』が輝く。その輝きは真昼の陽光さえものとせず巨大な光の三角形を形成する。

アルタイル ATK1700

デネブ ATK1500

ベガ ATK1200

才人「な…な、んで。手札消費一枚で、モンスターを場に三体揃えるなんて…」

そんなバカな。そう言いたげな顔をする才人に、レナは冷めた顔で吐き捨てる。

レナ「普通だよ、コレ。別におかしなことも無い。だって星因子だもん。」

才人「ふっ…う?」

才人が驚愕したようにレナを見る。その姿がまた、レナを失望させ

る。

レナ（星因子が当たり前に出来る展開をただけでこの表情。やっぱり、この世界のデュエルのレベルは、あまりにも低すぎる。この退屈は、どんな猛毒よりも激痛だ。）

遠い記憶の強敵達の姿がレナの脳裏に鮮明に映る。自身に死を予感させる死神のような。それでいて、乾いた心を水で満たし、その勢いで溺れ死んでしまいそうな幸福感を与えてくれる恋人のような二人の姿が。

レナ「会いたい…早く会いたいよ。クーちゃん。ライアス君。私を思い切り負かしてほしい。癒してほしい。会いたくて、会いたくて、戦《あ》いたくて…気が狂いそうだよ。」

自身のカラダを腕で抱きながら、天を仰ぐ。

レナ「…三体のモンスターで、オーバーレイネットワークを構築。」

才人「ぐう…ツツ!!」

これから何が召喚されるのか？そんなことこの状況で迷う筈が無い。才人の手札は0。リバースカードも無い。妨害札が存在し得ない。素材は三体の星因子。

星因子によって形成された巨大な光の大三角は真昼の空にあつてなおも輝きを増し、「夏の正三角」から「冬の逆三角」へカタチを変えてゆく。

レナ「白き王が仰ぐ天上の火よ、ハジマリの火を煌めかせたまへ。

エクシーズ召喚。ランク4。盟友の盾【星輝士トライブエール】

星輝士 トライブエール ATK2100

レナの呼びかけに応え、細身の騎士が紫電の盾と剣を構え、地上に舞い降りる。

そしてレナの前に歩み寄り、口を開く。その声は少し恨めし気にも感じられた。

トライブエール「…お久しぶりですね。現マスター。」

レナ「久しぶり。有給休暇はどうだった？」

トライブエール「5年の休暇とか拷問に近いんですね。戦争してる

よりはマシなんでしょうが、これからはもう少し頻繁に喚んでください。寂しくて死んでしまいます。」

レナ「無理。あなた達をデュエルに使うと私が退屈なんだもん。」

トライヴェール「部下が働きたいって言ってるのに拒否する主人など聞いたことが有りませんよ!?!」

レナ「ごめんねー。でもやっぱり退屈だから明日からまた有給で。」

トライヴェール「ちくしよおおおおー!!!」

ケイト「も、モンスターが、しゃべってる…!?!」

ソリットヴィジョンで現れているハズのモンスターが口を聞き、あまつさえ主人にもっと使ってくれと文句まで言っているこの状況に、その場に居る者が皆一様に目を奪われていた。

レナ「はいはい。そろそろ行くよ、トライ。準備は出来てる?」

トライヴェール「だから!五年間ずっと準備してたんですよ私はあ!!毎晩毎晩デッキは持って行っているのに使ってるのは違うデッキばかりで我々がどれだけ寂しい思いをしていたと」

レナ「——トライヴェールの特殊召喚時に効果発動!」

トライ「無視?!無視ですかマスター!!」

なおも苦言を呈するトライヴェールを横目に効果発動を宣言するレナ。

レナ「我に仇成す傀儡よ、汝の有るべき姿に戻れ——」

星輝士 トライヴェール

ランク4 光属性 戦士族

ATK/2100 DEF/2500

レベル4 「テラナイト」モンスター×3

このカードをX召喚するターン、自分は「テラナイト」モンスターしか特殊召喚できない。①:このカードがX召喚に成功した場合に発動する。このカード以外のフィールドのカードを全て持ち主の手札に戻す。②:1ターンに1度、このカードのX素材を1つ取り除いて発動できる。相手の手札をランダムに1枚選んで墓地へ送る。③:X素材を持ったこのカードが墓地へ送られた場合、自分の墓地の「テラ

ナイト」モンスター1体を対象として発動できる。そのモンスターを特殊召喚する。

レナ「【連煌星の帰還 《アステリック・リバーズ》】」

トライヴェールの効果により、煌星の光に包まれたフィールドの全てのカードが、元の主の元へ舞い戻る。

だが、本来手札に有り得ない存在であるEXデッキのモンスター達は、持ち主の手札に加わることを世界の修正力が許容しない。ゲームの法則により手札に加われないEXのモンスター達は、EXデッキへと還元される。

これにより……。

才人LP3000

手札一枚

レナLP8000

手札三枚

場 星因子 トライヴェール ATK2100

レナ「更に効果発動。ORUのデネブを取り除き、相手の手札を一枚捨てさせる。」

トライヴェールの構えた剣から発せられた紫電光が才人の最後の一枚となった手札を貫く。

雷光によって焦げたカードは開いた黒い風穴から灰と化し瞬く間に崩れ消えてゆく。

才人LP3000

手札 0枚

才人「あ……ああ………!???

事实上、レナの勝利は確定した。

遊戯王〈Fake Origin〉19 その夜明け昨日の明日へ

例えばこの夜が明けたら、あの月は光に焼かれるだろうか……：
例えば日が沈んだら、あの太陽が、闇に飲まれて消えるだろうか……：

もし、本当にこの星が廻る光が飲まれるなら……：もし、この星を廻る光が焼かれるなら

「俺は今日、君に告白して命を終えたい。」

俺の隣に腰を下ろす、小柄で年上の少女が……俺を見る。

「何を言っているの？私は……：貴方の彼女なの」

「ああ。でもこの星が消えるとしたら、俺は1秒後に消えるこのカラダで、お前への愛を口にして逝きたい。」

お前と寄り添い、お前と語り、お前と共に……俺は消えたい。」

ああ、愛おしい。

その蒼穹の髪に相対するほど紅潮しているお前が愛おしい。

消え去りそうなほどか細い声、崩れてしまいそうなほど儂い手。俺を見つめる青の瞳。

それは絶対に消えない想い。愛という……想い。

—————

「そんなの、私はイヤなの。消えて欲しく無いよ……」

私のせいで偏食してしまった赤の瞳、そして元の緑の瞳をみつめて——見とれてしまって、私は私の気持ちを口にしたの。

「ここが消えてしまうなら、どこか別のところに行きたいの……：」

もう殆ど見えていない彼の目の代わりになって、もうカードすら掴めない手の代わりになって、私は貴方と共に生きていたい。

「この星が消えてしまうなら、別の星に行きたい。貴方が生きていてくれる星へ。」

貴方の手を握っていられる星。貴方をずっと、感じられる星へ…行きたいの。」

だから

「夜が明けても、日が暮れても。――2秒^{あと}後にも、私を感じて。」

――

瞼を開ける。過去にあった光景は、常にこの瞳に刻んで来た。

その代償に俺は、自分の記録が所々欠けるが…ああ。もちろん安い買い物だと、今でもハッキリと言える。

レン「……………2秒経つても、お前を感じているよ。クエリイ。」

日の光を反射する白い病室の中で、今でもお前の青髪は、宇宙^{そら}の星々より、美しく煌めく。

ザザザザザザ……………!!!!!!

頭の中で、砂嵐が聴こえる。

レン「また、何か記録が消えたらしい。」

ああ、取るに足らない。何が消えたのかも興味が無い。

だからもつと、お前を見ていよう。俺の愛しい…………お前を……………。

へ

デュエルから一日経過。

ケイト「いや〜空が青いつスね、レン君。」

レン「ああ、そうだな。マチの至る所が黒焦げだし、煙上げてるけどな」

ケツに昔なじみの仲間を乗せて、単車のアクセルを全開に走っている。

とどこどこで消防やらが火消しに躍起になっている。ご苦労さまです。と。

ケイト「やっぱり昨日のデュエルの被害がマチにも出てるんスねー」

あちらこちらを遠目で見ながら、その光景に普段眠そうな目を開いている。

レン「昨日、俺がいない間に随分派手に遊んだんだな」

ケイト「いやいや、昨日ボクたちが水場でパチャパチャしてたのは、このマチの惨状とは関係無いツスよ？」

レン君がバツくれた後は、レナさんがキモいチビちゃんを死ぬほど煽って煽って、待つて待つてようやく召喚させた^{ナンバーズ}No.のモンスターの中に拉致された女子高生の集団を救助したんスよ」

レン「何だそりや??カードに人間を監禁してたつてののか?」

ケイト「そうそう。ドーにもナンバーズつてヤツはやバいツスよ。燃やすわ、監禁するわで……」。

レン「そりやまた【召喚師】みたいな連中だな……」

ケイト「アレはそんなチャチじゃ無い。【精霊】の域ツスよ」

レン「冗談じゃねえ。俺はもうそんなもんに関わる気はねえ

ぞ………」

ケイト「そうっすね〜」

言いながら、ケイトは俺の肩に手を置きながら反り返って後ろを見る。

ヴヴヴヴヴヴヴー！！！！

《そのノーヘル二人乗り暴走バイク！今すぐ止まって端に寄せないさい！！》

ケイト「ポリ公が五月蠅いッスね〜」

大して興味なさそうな、投げやりな感じでそう言った。

レン「何台いる？」

ケイト「三台。驚くべきことにピストルが見えるッスよ？撃つつもりなんスかね？このSNSで曝される時代に、この日本で」

レン「撃つてきたらこっちもモンスター召喚して煽るか」

ケイト「DQNのやることじゃねースかそれ」

レン「構うか。こんなボロボロのマチで、単車追いかけ回してる暇なポリ公なら、オモチャにするくらいしか役に立たねえ無能だろ。」

ケイト「こんなボロボロになったマチで、単車乗り回してるクズに言われちゃ、ポリ公も可哀想………」

レン「で、実際何でこんなことになったんだ？昨日何が起こった？」

ケイト「ほいほい、レナさんがデュエルした後に、気絶してたポルノポリが起きて、こりやマズいってなった不良さん達が」

レン「達が？」

ケイト「ナンバーズ召喚しまくってマチに放逐してこのザマッス。」

レン「へえー」

やっぱり大して面白いことも無かったんだな。
バツくれて正解だ。

そんなわけで、4年ぶりくらいに語られた昨日の話は、オレ達の知る今日になって

そして、明日が始まるのだろう。

ケイト「それで？これからどこ行くんすか？」

レナ「カードショップ。昨日手に入れたシンクロモンスター使って
えから、チューナーモンスター買いに行く。付き合え、バカ女」

ケイト「シンクロモンスターつか。了解っす。

真紅眼に合うようなチューナーを探すときましようかね。」

レン「ヨシ。じゃあ飛ばすぞ。先ずは後ろのポリ公をバックミラー
から吹き飛ばす!!」

ケイト「安全運転でオナシヤスー」

遊戯王〈Fake Origin〉20 どう考え
てもこの主人公はDQNから下の良識の持ち主であ
る

平時なら、もつとザワザワしているんだろう。このショップも。

だが今は平日の正午過ぎ。ここにいるのは、たまたま仕事が休みに
なった社畜か、社会的に抹殺しとくべきニート。あるいは……
職や学業を放棄した、唾棄すべき愚か者。

つまり、俺みたいなのだろう。

ケイト「つまり、このチューナーの効果を使って、このモンスター
を特殊召喚すれば

☆6☆8☆9のシンクロモンスターをシンクロ召喚出来るってこ
となんスよ」

レン「なるほどな。じゃあ、そいつを買おう」

ケイト「レン君、レン君。一枚しかないんじゃない可能性低いつす
よ。三枚買おう、三枚」

レン「みつつ欲しいのはいやしんぼめ。一枚で充分だろ」

ケイト「ええ……マジで一枚だけ入れるつもりなんすか？1/4
0じゃ、確率的に……」

レン「当たらない確率に生活と命を張るギャンブラーに何言ってる
だお前」

ケイト「まだギャンブルやってたんすか!?命大事に!!

じゃあせめて『ワン・フォー・ワン』だけでも!」

レン「一枚あるからいい」

ケイト「二枚よこせ……何なんすかレン君ハイランダーデッキで
も組んでるんすか？」

ちよつとデッキの中見せてよ」

レン「ほら」

ケイトにデッキを放ると、俺はさっさとレジに向かった。丁度まえ
に居た客が終わった所で、そのままカードをレジに出した。

レン「……………(すっ)」

「店長、これ給料前借りで会計して欲しいアル!!!」

突っ走って来たしまむら服の女と被った。

「つて、うわあ!?!?れれれれレンさんアル!?!?」

レン「誰だお前」

「え……………」

何か捨てられた子どもみたいな顔になった。

別に良いか。興味ないし。

レン「……………会計まだですか?」

店長「えつと……………レン君?」

レン「何か?」

店長「その……………彼女、物凄く悲しい顔をしているみたいなんだけど」

店長がしまむらを指さし、哀れむ顔をしている。指差されたしまむらは、何故か俺を涙目で見ている。親に借金の変わりに捨てられた子どもだって、あんな悲壮感あふれる顔はしない。

だって俺がそんな顔してなかったし。

レン「見覚えがない顔ですが、俺と何か関連が?」

店長「……………彼女、フェイニヤン飛娘ちゃんだけど……………」

レン「ふえいにやん?聞いたこと無いですが?」

飛娘「……………さだろオマエ!!!」

昨日の今日で何をワタシのこと綺麗さっぱり忘れてるアルか!?!?

昨日負けたことそんなに怒ってる力!?!?そんなきっぱり存在抹消しなくても良いじゃないか!!

ワタシだって悪かった思ってるネ!!だからこうして明日の生活費をリリースしてまでデッキの強化をしようとしてるアル!!ワタシがどんな思いでこの店のチンカスみたいな給料と自分の寿命を削ろう

としてると思うネ!?まだ記憶の片隅に想い出取つとく余地は残しても罰は当たらないヨ!？」

顔を顔汁でぐしゃぐしゃにしながら縋るように叫ぶしまむら。

この惨めさと無様さ・・・こいつ。こいつは

レン「別にどうでも良いんで、店長いいから会計してください。」

飛娘「オニかアナタ!?!?うわああああ!!！」

レン「あのすみません、服に顔汁が付着するんで離れて下さい。密です。」

飛娘「蜜塗れにしてやるアルううううううー!!!」

レン「汚水が汚えんだよ!!」

いい加減鬱陶しいので蹴り飛ばした。

飛娘「ふぎやあ!？」

その汚水は放物線を描いて、丁度ケイトがいる辺りに着地点を見いだした。

ケイト「ふえ?」

幸運にも何かが振ってくることに気付いたケイトは、広げていたデツキを仕舞って速攻その場所から離脱。なお、蹴り飛ばした瞬間にケイトが

「うわあ・・・これじゃあ、ただの紙束じゃない・・・」

とかほざいてたような気がしないでも無いが。

まあきつと気のせいだろう。だからあの汚水がケイトに向かっていったのは不幸な事故だ。決して狙って蹴り飛ばしてはいないことを断言しておく。

飛娘「プギヤ!!！」

ケイト「おっと!」

レン「ちっ・・・」

短く纏まった贅辞を送る。かつて共に旅をした仲間なら、それだけでオレ達は意思疎通出来るものさ。僕らはいつも以心伝心。

ケイト「舌打ちした!? わざとでしょ!? 今の絶対わざとだよね!?!? ゆうー……レン君!!」

ほらね。

レン「ソナコトナイヨー」

店長「通報した方が良いのかな昨日直したばかりの机が……」

レン「通っ報はいらねえから取るときな。」

店長「お客様は神様です。」

店長にはそつと諭吉を握らせておく。するとどうでしょう。さつきまで固定電話に指を掛けていた店長が、悟りを開いたかのような穏やかな顔に。

やはり金。金はひとの心を豊かにする。

豊かついでにボタンの『1』と『0』の部分には瞬間接着材をこっそり付着させておく。

出来る男は慢心せず、ベストを尽くすべし。

ケイト「なら戦略の中核になるカードくらい限界まで投入するツス。」

レン「勝手に人の心読んでんじゃねーよ」

ケイト「ボクらはいつも以心伝心なんでしょ?」

レン「俺はオマエの考えてること全く分かんねえから、実質盗聴な。」

ケイト「分かってよ!! もつとワタシのこと分かってよ!!」

レン「セフレ面倒くせえ勘違女みてえなこと言い出しやがったぞこのバカ女」

ケイト「せめて彼女とか言いません?」

レン「いやです。」

ケイト「ですます調で言うの止めて下さい泣きますよ?」

レン「クソ面倒くせえ。」

自分のデッキを取り戻して、さつきと購入したカードを入れる。

レン「おら、さつき言ってたの試すから相手しろ。ケイト」

ケイト「ボクはどうせ面倒臭い女ですよーだ」

レン「……………へそ曲げやがったか」

まあ、別に良いが。

レン「それならこつちでやるだけだ。」

顔面から床に突っ込んだしまむら……もとい中国を蹴り起こす。

飛娘「ぶおっ!?!」

レン「起きろ。戦え。」

飛娘「ーウツソだろオマエ!?!ついさつき蹴り飛ばした女の子を、更にもう一度蹴り飛ばして戦えて何ダ!?!デュエルか!?!」

レン「今ならサービスでもう一発付けてやろう。orデュエル」

飛娘「信じらんねえアルよ、コイツ。頼み事クソエイムか」

ケイト「漏れなく『誰か』に被弾するから、ある意味100発100中なんスよね……………」

ハア…………と大きいため息をつく二人。

何だこいつら息合うな。Aカップ同士気が合うのか?ノリも一緒だし。

ケイト「あーつと、飛娘さんって言いましたっけ?せつかくなんでここは一つ、強いと噂の『七皇』?とやらの力で、懲らしめてやって下さいっす」

飛娘「フッフッフ。そうまで言われちゃ仕方ないアル。七皇NO.

6『剛拳』の力を思い知らせて上げるネ…………!」

ケイト「よっ、チャイナ美人!ちよつと良いと良いとこ見てみたい!」
何か知らんが、やる気になったなら何でも良いか。

レン「店長、デュエルスペース借ります。」

店長「あ、はい。エレベーターを使って地下に降りてね。デュエルディスク用のスペースがあるから。」

レン「何だこの店。地下あんのかよ。」

金の掛け方に音楽性のような違いを感じる。

別に良いけども。

レン「じゃあ行くか」

ケイト・飛娘「おー！」

やる気あるんだか無いんだか……

飛娘「あ、店長。このカード買っていくネ」

遊戯王（Fake Origin） 21 この世界のカードの値段

オレ達がエレベーターに乗って待つ事五分。

レン「いや長えよ何だコレ。地下何階まで降りればエレベーターで五分経つんだよ」

飛娘「この店の地下は、核シエルターも兼ねているアルよ」

ケイト「たかがカードゲームを扱うだけの店に核シエルター!？」

大袈裟に驚くケイトだが、まあ、俺は地下シエルター自体は腑に落ちない程では無い。

オレ達が扱うこのカード。実はアホほど高価だ。

例えば・・・『融合』のカード。

融合モンスターを融合召喚する上で使用される、基本的な魔法カードだが・・・

なんと御値段。伍千円也。5000円である。

ケイトは・・・いや俺もだが、常識から逸脱した人生を送り、血に濡れた金を稼いできたタイプなので、金は持っている。つまり、割と金銭感覚がぶっ壊れている。

ので、この『紙切れに5000円を払う』という事実には、あまり違和感を感じていないから、カードショップに地下シエルターを買うのが驚きだったのだろう。

だが融合一枚が5000円だ。適当に40枚分のカードでも持つて行かれようモノなら、その損害は計り知れない。

が!!だ。

レン「別に地下シエルターは良い。」

ケイト「良いんだ!？」

レン「問題は、何でこんなバカほど時間掛けて下に潜ってんのかってことだよ。

デュエルスペースって言うくらいだから、ホカの客にも開放されてるんだろ?」

飛娘「え……えつと……」

レン「……オイ、何で黙ってたんだ？」

飛娘「ひっ!? ききき企業秘密アル!!」

ケイト「飛娘サン。それ何か有るって言ってるようなモンっすよ? 分かりやすいツスねえ。工員は無理そうツスねえ。」

飛娘「うぐっ!? わわ、ワタシは前線で戦う役ネ!」

ケイト「負けちゃったのにツスカ?」

飛娘「それはブランクがあったからネ! 昨日、新しいカードを調べて、相性の良いカードを手に入れたから、今日からまた修行するアル。『剛拳』の名前に塗ったドロを払拭してやるヨ!!」

ケイト「となると、このデュエルは負けられないツスねえ? レン君だってブランクはあるツスからねえ」

飛娘「もちろんアル!! 七皇の一人として、ワタシ負けないアル!!」

レン「なら、お前負けたら企業秘密とか全部吐け。」

飛娘「うえっ!?!」

ここでエレベーターの浮遊感が消え、扉が開く。

そこそこ広がった箱から出ると、上下左右に広く、機械的な景観ながら開放感がある場所に出る。

レン「……悪くねえな。」

地下シエルターとか言う割に良い場所だ。数日くらいなら住めそうだ。

リストバンド型のディスクを装着しながらある程度の間合いを取って立つ。

レン「さあ、始めようか? 中国」

飛娘「う……えつと……」

ケイト「やらないんすか? 前線で戦う者としての覚悟は口だけツスカ?」

さつきからケイトがやけに煽るな……楽しんでる? いや、何か狙う感じの目してるな。

アレ？

俺、もしかしてアイツの思い通りに動かされた？

飛娘「うぐぐぐ・・わ、分かったアル!! レンさんに負けたら煮るなり焼くなり好きにするネ!!」

ケイト（・・・・・） どうしてワザワザ負けたときのデメリットを悪化させてるんスカね。

すごい無駄に自分を追い詰めてるけど、この人本当にレナさんの仲間なんすかね？ 本当はパシリだったんじゃないっすか？

ま、こつちには都合良いだけだからヨシ！

飛娘「さあ、勝負アル!! ワタシが勝つたら、今度こそワタシをちやんと名前と呼ぶネ！」

レン「良いだろう。俺が勝ったときはお前の名前は・・・・・面倒くせえ。始めるぞ」

飛娘「扱いがあんまりすぎて、ワタシ、泣きそうヨ・・・」

ピンー・・・!

涙目の中国をほつといて、コインを指で弾く。

レン「どつちだ？」

飛娘「・・・・表」

若干ふて腐れたような声で宣言する。コインは床に落とし、グルグルと回り、やがて裏で止まった。

レン「俺が先だな。」

飛娘「別に良いもん。ワタシ後攻向けだもん・・・・」

レン「キャラ壊れてんぞ」

お互いディスクを構え、手札を揃える。

レン「行くぞ。」

飛娘「ああもうやったるネ!!!」

レン・飛娘「『デュエル!!!』」

レンLP8000

飛娘LP8000

レン「メインフェイズ。

ん？さっそく来たか。チューナーモンスター」

ケイト「おお！イケイケー！レン君ー！」

レン（……………不吉すぎる。

不運上等、手札事故平常なこの俺が、まともに召喚できる手札とは……………）

レン「まあ良い。召喚。チューナーモンスター『レッド・リゾネーター』だ。」

レッド・リゾネーター ATK 600

飛娘「これはチューナーモンスター!?

アナタ真紅眼の融合デッキや無かったアルカ!!」

レン「ああ。上手いこと真紅眼とシナジーがあったからな。」

ケイト「ボクが見つめました。」

レン「効果発動。手札から星4以下のモンスターを特殊召喚する」手札から目的のモンスターを手取る。

飛娘「甘いアル!!手札から『エフェクト・ヴェーラー』の効果発動!!」

ケイト「止められた!?まさかあんなガチカードを使ってくるなんて!」

レン「そのカード、たしか10万くらい」

飛娘「止めて下さい。心が折れそうデス止めて下さい。」

レン「……………」

飛娘「これが、これがワタシの覚悟アル!!!」

目元にガッツリと未来を憂う涙が零れている。
貧乏だとは聞いているから、恐らくコイツは今後しばらく人間らしい食事は出来ないだろう。

バイト代位じゃ雀の涙も同然だろう。

飛娘「……ワタシ負けないアル。生き別れの家族にもう一度会える日まで道草食つても生き残るアル!!」

レン「道草を食うを物理的に実行しようとするんじゃないやねえよ」

飛娘「さあデュエルを続けるアルツツ!!!」

レン「もう、後には引けないんだな……まあ良い。」

俺は特殊召喚しようとしたモンスターをそのまま墓地へ送った。

レン「手札の『伝説の黒石』をコストにして『ワン・フォー・ワン』を発動。

デッキから二枚目の『伝説の黒石』を特殊召喚。」

結果としては、あまり状況が変わらなかったな。

だが、ピン差しのカードが初手にある幸運に寒気が止まらない。

飛娘「ワタシの覚悟が無駄死にしたあああああああー
!!!!」

あつちは涙が止まらないようだ。

レン「『伝説の黒石』の効果発動『真紅眼の黒竜』を特殊召喚だ。」

真紅眼の黒竜 ATK2400

レン「そして魔法カード『黒炎弾』を発動。2400のダメージを喰らう権利をくれてやろう。」

飛娘「熱ッ!?!」

飛娘 LP5600

レン「さて、レベル9のシンクロが初のシンクロ召喚になるわけだが・・・こいつか。

真紅眼の黒竜にレッド・リゾネーターをチューニング。

『優しき愛の守神よ、その蒼き瞳で見つめた未来を、銀色の翼翻し、現在いま此処へ導くがいい！』シンクロ召喚。レベル9『蒼眼の銀竜』

蒼眼の銀竜 DFF3000

レン「特殊召喚時効果。

自軍の場のドラゴン族全てに『効果破壊不可』と『効果対象への選
択を禁じる』耐性を二回目のターン終了まで付与する。

銀竜もドラゴン族だ。特殊召喚するたびにこの効果が使える。」

飛娘「守備力3000でその耐性付与はやっかいアル。レッド・リ
ゾネーターの効果止めた意味も無かったし、銀竜にヴェーラー使うべ
きだったカモしれないヨ。」

レン「カードを一枚伏せて、ターン終了。」

レン LP8000

手札0

場 蒼眼の銀竜 DFF3000 (効果破壊・効果対象不可)
伏せカード1枚

飛娘「ちよつと思つたのとは違ったケド、ワタシも命がけでこの
デッキを組み直したアル。

負けられないアル・・・犠牲になった二ヶ月分の食費のタメにも!!!」

レン「・・・」

ケイト「・・・レン君。あの・・・」

レン「皆まで言うな。」

この女。ダメ過ぎる・・・。

飛娘「さあ！進化したワタシの『剛拳デツキ』を見させてやるネ!!」